# 考古学集刊

# KŌKOGAKU SYŪKAN

## 第 19 号

目次

**論　説**

古代横櫛の製作技術……大熊　久貴（1）

**研究ノート**

土器を構築材とする造り付けカマドの基礎的検討―埼玉県域を中心に―……松本　康太郎（13）

茨城県域における 6・7 世紀土師器の数値的検討ならびに地域性について　小西　竜世（24）

**資料紹介**

伝白石古墳群内出土の寄贈資料について……齋藤　直樹（35）

宮城県北部採集の古式須恵器……木村　太一・高橋　透・藤原　二郎（39）

**追　悼**

大塚初重先生を偲ぶ ―明大考古学の先頭を歩み続けた生涯― ……石川　日出志（43）

**記　録**

明治大学考古学研究室動向 2022 年（2022.01,01-2022.12.31）……（52）

2023 年 7 月

**明治大学考古学研究室　編**

考古学集刊　第 19 号　1-12 頁，　2023 年

**論説**

# 古代横櫛の製作技術

大熊　久貴

**要旨**

横櫛について日本では古墳時代前期ごろから使用されはじめ、それ以来、今日まで使われ続けている道具である。古墳時代中期以降の横櫛の歯は、細かく挽かれていることが確認でき、歯を挽く技術は現代の木櫛の製作技術を見ても高度な技術であることが見てとれる。

そこで本稿では、古代の横櫛の製作方法とその技術の復元を試みた。研究するにあたり、完形品をはじめ破片資料、そして未成品が出土した滋賀県草津市襖遺跡の資料を分析対象にし、それらに残された工具の痕跡などをもとに製作方法・技術を復元した。その結果、材の入手から始まり、加工、歯挽き、磨きといった工程を経ることが分かり、小型ヤリガンナや刃の厚さが 1mm 以下の鋸を用いて作られたことが推定できた。

また考古資料だけでなく、木櫛の伝統的製作技法を継承している長野県木祖村藪原のお六櫛と、全国でも多くの木櫛を生産した大阪府貝塚市の和泉櫛の取材調査を行った。この調査を通して、製作技術や製作道具だけでなく、材の入手や製品の流通、そして生産体制などについても重要な示唆を得ることができた。

**キーワード**：古代　日本列島　横櫛　木工

## はじめに

古墳時代から奈良時代の横櫛を通観すると、その歯の整然かつ緻密な作り込みが大きな特徴といえる。1cm ほどの厚さの材をヒビが入ることなく均一で細い歯を挽く技術の高さは、現代の伝統工芸の櫛の製作技術を見ても十分に想定される。そこで本稿では、完形資料や破片資料・未成品から古代の横櫛の製作方法について復元を試みる。また製作方法から見えてくる道具や手の動きもできる限り復元する。さらに、現代に残る伝統工芸の櫛の製作方法も研究することで、古代横櫛の製作方法の復元にあたっての新しい問題意識や横櫛製作の背後にある人々の営みを明らかにするための足掛かりにしたい。

## Ⅰ．古代の横櫛の概要と研究史

### （1）横櫛

櫛には、髪についた汚れを取る、梳かす、髪留めとして挿す、髪を飾るといった多様な機能を有している。日本列島では、縄文時代から櫛が使用されており、少なくとも縄文時代から古墳時代にかけては、土偶や人物埴輪から、櫛を髪に挿して頭部を飾っていたと推定できる。近世も日本髪に櫛を挿していたことは浮世絵からもわかる通りである。

形態については、縄文時代から古墳時代まで縦に長い竪櫛が使用され続けており、古墳時代前期末頃から朝鮮半島の影響を受けて、横に長い横櫛も使用されるようになる（木沢 2007）。そして、古墳時代の終末期に竪櫛が廃れても、横櫛は現代まで脈々と使われ続ける。

材質は、竪櫛は木や竹などが用いられた。そして、横櫛は木が用いられ、ツゲやイスノキなど細かな歯を挽いても割れることのない硬質な木材が選ばれる。正倉院には象牙の櫛も保管されている。近世になると、頭に飾るための横櫛としてべっ甲なども使用されるようになった。現代では横櫛が一般的であり、特別な場合を除いて、頭に横櫛を挿すことはなくなった。材質はプラスチックが多くなった一方で、伝統的なツゲの横櫛も伝統的工芸品として生産され続けている。

各部名称は図 1 の通りである。まず、持ち手になりうる部分を「棟部」といい、梳かす部分を「歯部」という。歯部の両側にある太い歯を「親歯」、歯部と棟部の境にある溝を「毛引き」と称し、棟部の隅を「肩」という。そして、歯と歯の間の断面にみられる V 字状の削り残しの部分を「ヤマ」と称する。これらの横櫛の構造は時期を通して大きな変化はない。

### （2）研究史と課題の設定

横櫛は、よく磨かれていることが多いため、工具の痕跡が明瞭に残る資料は限られている。さらに有機物であ

るため、良好な状態で出土することも少なく、未成品の例も希少である。そのような中で、滋賀県草津市襖遺跡出土の横櫛から未成品が検出されたことを契機に、池崎智詞（1990）が伝統工芸の和泉櫛の製作方法も参考にしながら、櫛の製作手順を復元した。ただし資料数の制約もあって、他の古代櫛との比較や製作技法の時間的変遷にまで迫ることには限界があった。

そして木沢直子（2008）は、愛知県安城市彼岸田遺跡出土の 4 世紀末頃（布留 4 式期）の横櫛の歯は刀子状の工具で刻みだしたものであったものが、5 世紀後半（TK47 型式期）の大阪府八尾市小阪合遺跡のものは鋸で歯を削りだす挽歯になることを歯側面に残る工具痕から明らかにした。このように資料数の増加に伴って、櫛の製作技術の変遷にまで迫れるようになった。

しかしそれでも、横櫛製作技術の研究は数が少なく、手の動きを含めたより具体的な製作手順や、工具との関連性にまで議論を発展させていく必要がある。

### （3）分析方法

まず、完形資料と破片資料に残る工具痕などから製作手順・技法の復元を試みた。この分析対象に挙げた横櫛は、古墳時代から奈良時代にかけての出土資料とした。さらに、池崎も分析対象にした襖遺跡の未成品資料を筆者も改めて観察した。これらを比較検討した上で、双方の統合解釈を行った。なお、横櫛の年代は共伴土器から推定し、依拠する土器編年は寺沢薫（1986）、田辺昭三（1981）、西弘海（1978）による。

しかし、工具痕などの痕跡のみからでは全工程の復元は限界がある。そこで現代でも手挽きの技術を継承している長野県木祖村藪原「お六櫛」と、全国でも大きなシェアを誇った大阪府貝塚市「和泉櫛」への取材調査を行い、古代の櫛製作技術を類推するための一つの指針にしたい。なお、お六櫛については、2022 年 9 月 15 日に木祖村お六櫛組合副組合長柳川浩司氏に取材および実際の製作と道具を調査した。そして和泉櫛については、2022 年 10 月 28 日に貝塚市南新町町会長南川孝司氏、泉州木櫛商栄組合組合長西出長仕氏に取材した。

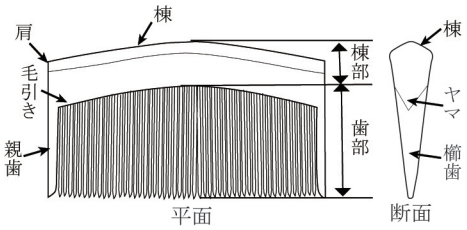



図 1．横櫛各部名称（筆者作成）

## Ⅱ．考古資料から復元する横櫛の製作方法

### （1）完形・破片資料から（表 1）

**素材**　古墳時代から奈良時代にかけての櫛の材は広葉樹のイスノキ・ツゲ、針葉樹のイヌガヤ・モッコクがあり、いずれも硬質な材である。特にイスノキ・ツゲは西日本を中心とする温暖な地域に植生する。木取りについて、ほとんどは板目[1]であるが、滋賀県東近江市斗西遺跡出土のものは例外的に柾目[2]である。

**毛引き**　三重県津市六大 A 遺跡出土の横櫛（図 2）は共伴土器より TK47 型式期（5 世紀後半）と推定される。この横櫛の毛引きは、細い線刻により作り出されているが、右側を三度引き直していることが確認される。さらに、この毛引きは歯を挽いた溝に切られていることから、毛引きは歯を挽く前に刻み込まれたものである。このような毛引きの溝が歯の溝に切られている事例は他にも数多く確認される。

**櫛歯**　六大 A 遺跡の横櫛には、毛引きを超えるように歯が挽き込まれている箇所が見られるが、その中には点々と傷跡が残るものがある。これについて、櫛歯の間の延長線上にあることと、点々とした傷跡が比較的均等についていることから、これは鋸の歯が付けた傷跡であると推定でき、櫛歯は鋸によって挽き出されたと推測

表 1．古代横櫛の諸特徴（筆者作成）

| 所在 | 遺跡名 | 実年代 | 土器編年 | 歯の密度（1cm あたり） | 歯先の作り分けの有無 | 材 | 木取り |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 愛知 | 彼岸田遺跡 | 4C末～5C初 | 布留4 | 3 | 無 | クワ | 板目 |
| 大阪 | 小阪合遺跡 | 4C末～5C初 | 布留4 | 3 | 無 | カバノキ | 板目 |
| 三重 | 六大A遺跡 | 5C後半 | TK47 | 9 | 有 | ツゲ | 板目 |
| 滋賀 | 斗西遺跡 | 6C前 | MT15 | 7 | 有 | イスノキ | 柾目 |
| 静岡 | 神明原・元宮川遺跡 | 6C後～7C初 | TK209 | 6 | 有 | ツゲ | 板目 |
| 宮城 | 山王遺跡 | 7C前 | 飛鳥Ⅰ | 6 | 有 | ― | 板目 |
| 宮城 | 市川橋遺跡 | 7C前 | 飛鳥Ⅰ | 7 | 有 | イヌガヤ | 板目 |
| 奈良 | 藤原京左京十一条一坊溝62 | 7C後 | 飛鳥Ⅱ～Ⅲ | 10 | 無 | ツゲ | 板目 |
| 奈良 | 藤原京左京十一条一坊溝62 | 7C後 | 飛鳥Ⅱ～Ⅲ | 10 | 無 | ツゲ | 板目 |
| 奈良 | 平城京左京二条二坊・三条二坊SD5100 | 8C前 | 平城Ⅲ | 11 | 無 | イスノキ | 板目 |
| 奈良 | 平城京左京二条二坊・三条二坊SD5100 | 8C前 | 平城Ⅲ | 9 | 無 | モッコク | 板目 |
| 奈良 | 平城京左京九条三坊十坪SE3815 | 8C前 | 平城Ⅲ | 10 | 無 | イスノキ | 板目 |

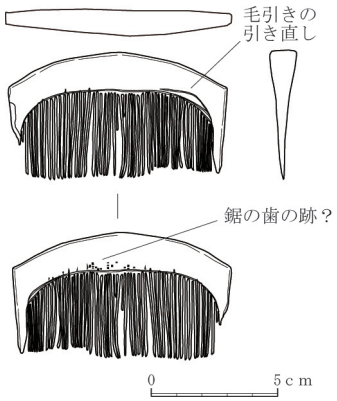



図 2. 六大 A 遺跡出土横櫛（筆者作成）

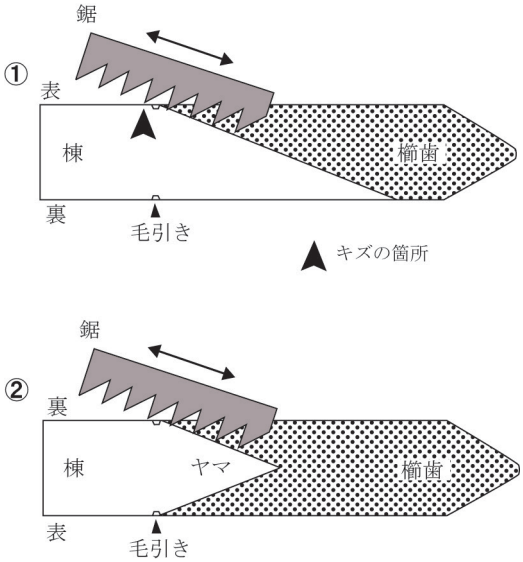



図 3. 歯挽き断面模式図（筆者作成）

される（図 3）。さらに、他の櫛の破片資料を見てみると、ヤマと呼ばれる逆三角形状の削り残しが歯の根元に確認できることからも、この推測の蓋然性は高いと言える。ただし、この六大 A 遺跡の横櫛の歯の密度は 1 ㎝あたり 9 本であることを踏まえると、鋸の厚さは 1mm 前後であると推測できるが、現状古墳時代の鋸で厚さが 1mm 以下のものは発見されていない。しかしこれについては、伊藤実（1993）も想定しているように、1 ㎝あたり 8 本～ 10 本の歯を挽き出すためには 1mm に満たない厚さの鋸が古墳時代からあったと考えるべきであろう。

そして歯先に着目してみると、櫛全体の左半分の歯先は右向きに傾斜するように削られており、対して右半分の歯先は左向きに傾斜するように削られている（図 4）。こうした事例は滋賀県東近江市斗西遺跡、滋賀県草津市北萱遺跡、静岡県静岡市神明原・元宮川遺跡でも確認でき、これらはいずれも 6 世紀以前の古墳時代のものである。対して 7 世紀以降の横櫛にはこのような歯先の作り分けは見られない。7 世紀以降の横櫛の歯先は、単に丸みを作っているのみである。

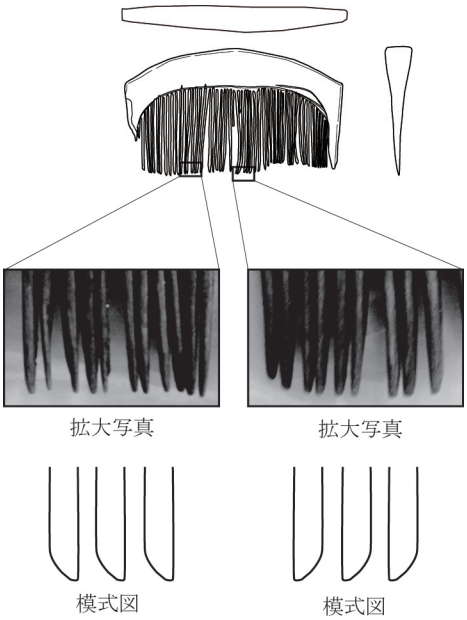



図 4. 櫛歯先端の作り分け（筆者作成）

以上、こうした横櫛の製作痕跡は TK47 型式期以降大きな変化は見られない。ただし、布留 4 式期の彼岸田遺跡のものは、木沢（2008）がすでに指摘しているように、歯は刀子状工具で削りだしており、鋸によるものではない。つまり歯の作り方に関しては、古墳時代前期ころまでは刀子状工具で櫛歯を作り出し、古墳時代中期以降は鋸を使用した作り方に変化している。

### （2）襖遺跡の事例から

滋賀県草津市襖遺跡の土壙状遺構 SK17 より、櫛の未成品の破片が少なくとも 3 点検出されており、他にも木片が検出されているが、これらも櫛の材料の可能性がある。本研究では、歯が途中まで挽かれた状態でかつ比較的良好な状態である 2 点（図 5-1・2）から製作方法の復元を試みた。なお、同一遺構から共伴した土器より飛鳥Ⅴ期（8 世紀初頭）ごろのものと推測される。

まず、図 5-1・2 ともに木材はカナメモチであり、古代の櫛の木材はイスノキやツゲが多いことから考えると、希少な例である。

木取りはいずれも板目になるように取られており、断面が三角形状に加工されている。そして、表裏共に約 8 ㎜の幅で右から左に削り取ったような痕跡が平行して残されている。これにより、木材の平面を平滑にしている。これは、ヤリガンナによるものであると想定される。ヤリガンナについて、古瀬清秀（1991）によれば小型のヤリガンナは 4 世紀代から見られるとされ、飯塚武

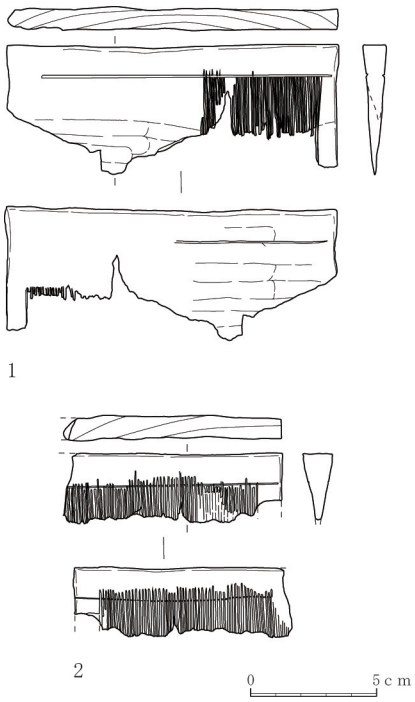



**図 5. 襖遺跡出土横櫛（筆者作成）**

司（2022）は古墳時代中期に相当する六大 A 遺跡出土の天板に丁寧なヤリガンナによる仕上げが確認されるという。

次に櫛歯の作り方だが、まず歯を挽く前に歯の根本となる箇所に一直線上に細い線を刻み付けている。これが毛引きとなる。毛引きは歯の長さと挽く限界の目印と推測されるが、図 5-1 は一部の歯が毛引きをはみ出し、図 5-2 では多くの歯が毛引きをはみ出している。そして、歯はいずれも 1 ㎝あたり 9 本挽かれている。1 は、片側のみ挽かれた状態であり、さらに歯の根元は裏側まで貫通しておらず、歯の根元まで削り切れていない。2 は両面から歯が挽かれているが、これも歯の根元が最後まで削り切れていない。さらに、1 の左半分は歯が挽かれていない。つまり、これは右から歯を挽いており、途中で止めた可能性が考えられる。

また同時期の他の横櫛を見てみると、棟部の肩と親歯の先端に丸みを持たしているが、この襖遺跡のものはそれが確認できない。よって、棟部肩と親歯の先端に丸みを持たせる工作は、歯を挽いた後に行っていたと推測される。

最後に 1 と 2 は棟高と歯の密度が近似値を示すため、同じ規格で製作された可能性が考えられる。

以上からこの襖遺跡出土横櫛の性格を考察してみたい。1 は片面から歯が挽かれており、反対側からは挽かれていない。そして片面からの歯挽きも途中で終わっている。それに対して 2 は両面から歯が挽かれているが、毛引きから大きくはみ出している。さらに歯挽きが最後まで貫通していない。また、1・2 ともに棟部肩と親歯角に丸みを施していない。これらの様相から考えて、襖遺跡出土の横櫛は未成品でありかつ、失敗品もしくは練習用の試作品の可能性が想定される。

### （3）小結―考古資料に見る横櫛製作の復元―

ここまでの完形資料・破片資料・襖遺跡出土の未成品の三者の分析を統合解釈して、TK47 型式期以降の古代横櫛の製作方法を復元した（図 6）。

まず材木であるがツゲやイスノキが多くを占める。これらの材は西日本を主とする温暖な地域に植生するもので、硬質な材である。それらの材を板目で取り、断面が逆三角形になるように加工する。さらに、歯部となる箇所には横方向にケズリを入れ、表面を平滑にしている。このケズリは小型のヤリガンナによるものと推定する。

次に毛引きを入れ、歯の長さの目安とする。そして鋸で右から順に櫛歯を挽いていく。片面から挽いた後、裏面にして櫛歯が完全に貫通するようにもう一度挽く。

そして、歯先に丸みをつけるように削り、親歯と棟部の肩も削りを加えて形を整える。最後に表裏ともに磨きを加えて完成品となる。

このように古代の横櫛は歯挽きの技術や歯先の作りこみなど、高度で熟練の技術の存在が推定できる。

以上横櫛の製作方法が復元できたが、磨きに使用する道具や、木材の良い具体的な加工方法、製作時の手の動きなどについては、考古資料のみでは限界がある。そこで、現代の伝統的手法で作られている横櫛の製作方法を参考にしたい。

## Ⅲ．現代の横櫛の製作方法

### （1）お六櫛の概要

お六櫛の歴史の詳細は木祖村教育委員会（1975）が編集した『木曽のお六櫛』などに譲り、ここでは概要にとどめておく。

中山道の宿場の一つである藪原宿[3]で江戸時代以来つくられ続けた工芸品がお六櫛である。この「お六櫛」という名称が見られ始めるのは、寛政・享和年間であるという（柳川 2001）。このお六櫛で有名な形態は、上下両歯の櫛で、歯の密度が上下で異なることが特徴である。無論、他の形態の櫛も製作されている。

そもそも発祥は木曽と伊那とを結ぶ脇街道沿いの清内路村と推定され、木曽の蘭・広瀬を経て、中山道筋の木曽北部へ広まったと考えられている（柳川 2001）。このような中で、藪原は材の提供をしていたが、中山道の宿場という立地条件を生かし、櫛の製作も盛行させていっ

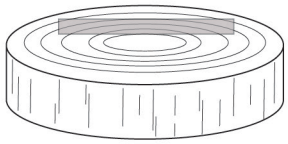
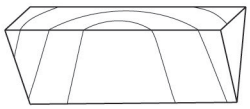
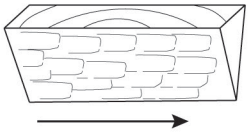
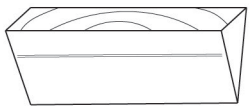
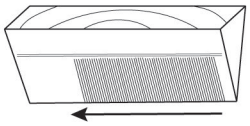
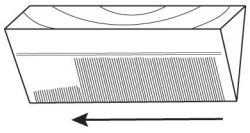
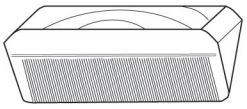
| 模式図 | 作業内容 | 使用する道具（推定） |
|---|---|---|
|  | 木材の伐採・輪切り<br>櫛木の切り取り（板目） | 鉄斧 |
|  | 断面逆三角形状に加工<br>規格・型の存在が推定される | （鋸？） |
|  | 表面の削り<br>特に歯部（下半部）は念入り | 小型ヤリガンナ |
|  | 毛引きの筋をつける<br>毛引きの位置を決めるための規格・型の存在が推定 | （刀子？） |
|  | 表から櫛歯を挽く<br>右から左へ挽いていく | 鋸（歯の厚さが 1 ㎜以下） |
|  | 櫛歯を貫通させるため、裏面から櫛歯を挽く | 鋸（歯の厚さが 1 ㎜以下） |
|  | 肩部・親歯先端の加工<br>歯先の加工<br>表面の研磨 | 不明 |

**図 6. 古代の横櫛の製作工程復元（筆者作成）**

た。弘化五年（1848 年）の人別改帳によれば藪原に櫛挽きは 239 人記録されていて（生駒 1975）、その盛行ぶりを知ることができる。

このように発達していったお六櫛は、現代でも継承され、さらに手で櫛歯を挽く技術を保存・継承に努めている例は全国でも希少である。

### （2）お六櫛の製作方法（図 7）

**材の入手**　材はミネバリを使用する。ミネバリは標高 1000 m を超える高いところに植生する木であり、標高の高い木祖村ならではの木材と言える。山からミネバリの木を入手し、櫛木の幅となる約 7 ㎝の高さに木を輪切りにする。そして外皮を取り、外側から木の芯に向かって目測で長さ約 11 ㎝、厚さ 0.9 ㎝の板目の板になるよ

うに大割りをする。

次に干割れや曲がることを防ぐために大釜でゆでてあく抜きをする。その後、櫛歯となる側面部分をナタで削り、0.2 ～ 0.3 ㎝程の厚さにする。ここまでは山で作業を行い、以降山から下りて作業を行う。

板材の乾燥は、日陰で1日から2日、もしくは囲炉裏の大棚の上に並べて4～5時間かける。

こうしてできた板材は問屋が大量に仕入れた後、職人たちが問屋に訪れて自分達で使いたい板材を選ぶ。その際、腕のいい一流の職人から順に板材を選んでいったため、一流の職人は一流の櫛が作ることができ、三流の職人は余り物の板材しか使用できないため、常に三流の櫛しか作ることができなかった。こうした櫛の出来は一枚当たりの単価にも影響するため、職人は問屋に頭が上がらなかったようである。

**加工**　ここから先は職人が行う。まず、鉋であるジョウシコ（図8-1）を用いて板材の平面と歯先を削りながら、歯先を尖らしていく。良く梳ける櫛は板の歯先部分が尖らず、厚さも均一にする必要があるため、この作業は櫛の良し悪しを決める上で重要な作業になる。次に、スンポウ（図8-3）という幅と高さを定める道具を用いて櫛の幅と高さを決めて、そのスンポウからはみ出した部分をヒキマワシノコ（図8-7）で切り落とす。このヒキマワシノコは歯の厚さが0.5㎜で、ナゲシ[4]とアサリ[5]もある。

次にカタ（図8-2）を用いて毛引きの形と位置を決める。このカタには突起がついているため、櫛板をこれに引っ掛けることで固定できるという仕組みである。カタによって決まった毛引きをスジツケ（図8-4）という刃物で筋をつける。このカタは毛引きの他に、カタを上下ひっくり返すことで棟の形も決めることができる。カタは、櫛木の派材や昨今ではベニヤ板やプラスチックも使う。職人はこうしたカタを複数所持しており、伝統的な規格にのっとったカタをはじめ、時代にあわせて独自の改良を加えたカタもある。

**歯挽き**　まず板材を、棟を手前にして盤に固定し、櫛木の片面からハビキノコ（図8-8）を使用して左から右へ挽いていく。ハビキノコは歯の厚さが1㎜以下で、ナゲシがない。時計の部品であるゼンマイを再加工して職人自ら自分の手に合うように製作する。

またこのハビキノコの歯に並行するようにアテガイと呼ばれる小型の歯を付ける。これは、ハビキノコで歯を挽くと、アテガイによりその次に挽く櫛歯に筋が付く。これにより、次に挽くべき櫛歯の位置がわかるという仕組みである。よってハビキノコの歯とアテガイの距離で櫛歯の幅・密度が決まる。なお、ハビキノコの歯とアテガイの間に紙を挟むことで、櫛歯の間隔を調整することも可能である。こうしたアテガイの工夫は、お六櫛ならではのもので、作業の効率化・多量生産に適応したものである。

そして櫛歯を左から右（棟を手前・下にした状態で）に挽いていくが、これは右利きの職人が左の人差し指で右手に持つ鋸の歯を右に押し出すことで、次の歯を挽く間隔を調整していく。この左手の人差し指の役割が均一な櫛歯を挽く上で重要になる。

均一な櫛歯を一定の角度で挽くためには、先に挙げた人差し指の他に、姿勢とリズムが重要だという。姿勢は、鋸をもつ右手が固定されるように、膝枕（図8-6）を左膝の下に入れ、左肘をその左膝につけて、身体の重心を左に乗せる（図9）。そしてリズムについては、子供のころから親が櫛を挽く音を聞いているため、身体に染み付いているという。

上手く櫛歯の挽けない初心者だと、「蚤の腰掛け」と呼ばれるものがみられるという。「蚤の腰掛け」とは、表から挽いた時の鋸の刃の角度と裏から挽いた時の角度とが異なることで、歯に段差ができてしまうことを指す。そして「ムラ歯」と呼ばれるものも初心者によくみられるもので、太さが均一の歯が挽けず、細い歯と太い歯が混じり合うものを言う。特に、表からみると均一に見えるが、裏から見るとムラ歯が目立つものもある。

**歯通し**　歯間の先端を、トクサ[6]を貼ったハドオシ（図8-11）で擦ることで、歯先にやや丸みを持たせて尖らせていく。その順序は、棟を手前にした際に右から左へと行う。つまり歯挽きの方向とは逆の方向になる。これについて、ハドオシは押すことで研磨できるため、歯間を擦る際に、ハドオシを支えている左差し指を左へ押しながら研磨することで、効率よくハドオシを次から次へと細い歯間を移動させることができる。

**ナカヌキ**　ハビキノコでは歯の根元（毛引き）まで挽ききれていないため、それを挽き切るためにナカヌキノコ（図8-9）を用いる。ナカヌキノコにはトメがついており、これは無制限に毛引きを大きく超えて挽いてしまうことを防ぐための部品である。さらにトメは櫛歯の長さにあわせてナカヌキノコの先端にある溝にはめて調整する。このトメはざっくり挽いても歯が揃うように江戸時代に開発されたもので、一日50枚挽いていた大量生産に適応した工夫であった。

なお、毛引きの筋を櫛歯が少々棟側へ超えてしまっている製品も見られるが、これは腕の良い職人のものにも見られる。これについて、機能面では全くの問題はなく、芸術作品を作ることを目的としていないためである。

**ヤマヌキ**　ここまでではまだ片面からしか挽いていないため、裏面からヤマヌキノコ（図8-10）で挽く。ヤマヌキノコは大きな力がかからないように、ナカヌキノ

| 模式図 | 作業内容 | 使用する道具 | 手の動き |
|---|---|---|---|
| | ミネバリの伐採<br>櫛木の切り取り（板目）<br>大釜で茹でて、あく抜き<br>乾燥 | 斧<br>鋸・鉈 | |
| | 断面逆三角形状に加工<br>表面を削る | 鉈<br>ジョウシコ（図 8-1） | ジョウシコで平面を削る |
| | 幅と高さを決める<br>スンポウからはみ出た分を切り落とす | スンポウ（図 8-3）<br>ヒキマワシノコ（図 8-7） | スンポウを用いて幅を決める |
| | 毛引きを引く | カタ（図 8-2）<br>スジツケ（図 8-4） | カタで毛引きの位置を決め、スジツケで筋を付ける |
| | 櫛歯を右から左へ挽く（片面から）<br>歯の先端を尖らすために擦る（歯通し）<br>歯の根元まで削りこむ<br>裏から歯を挽く | ハビキノコ（図 8-8）<br>ハドオシ（図 8-11）<br>ナカヌキノコ（図 8-9）<br>ヤマヌキノコ（図 8-10） | ハビキノコで職人から見て右方向へ挽く<br>トクサを貼ったハドオシで職人から見て左方向へ擦っていく |
| | ケバを擦り落とす<br>棟の形を決める<br>親歯の角を落とす<br>磨く | コソゲカンナ（図 8-5）<br>カタ（図 8-2）<br>ヒキマワシノコ（図 8-7）<br>ミミツキガンナ<br>鹿の角<br>ボウズガイ | 鹿の角で磨く |

図 7. お六櫛の製作工程（筆者作成）

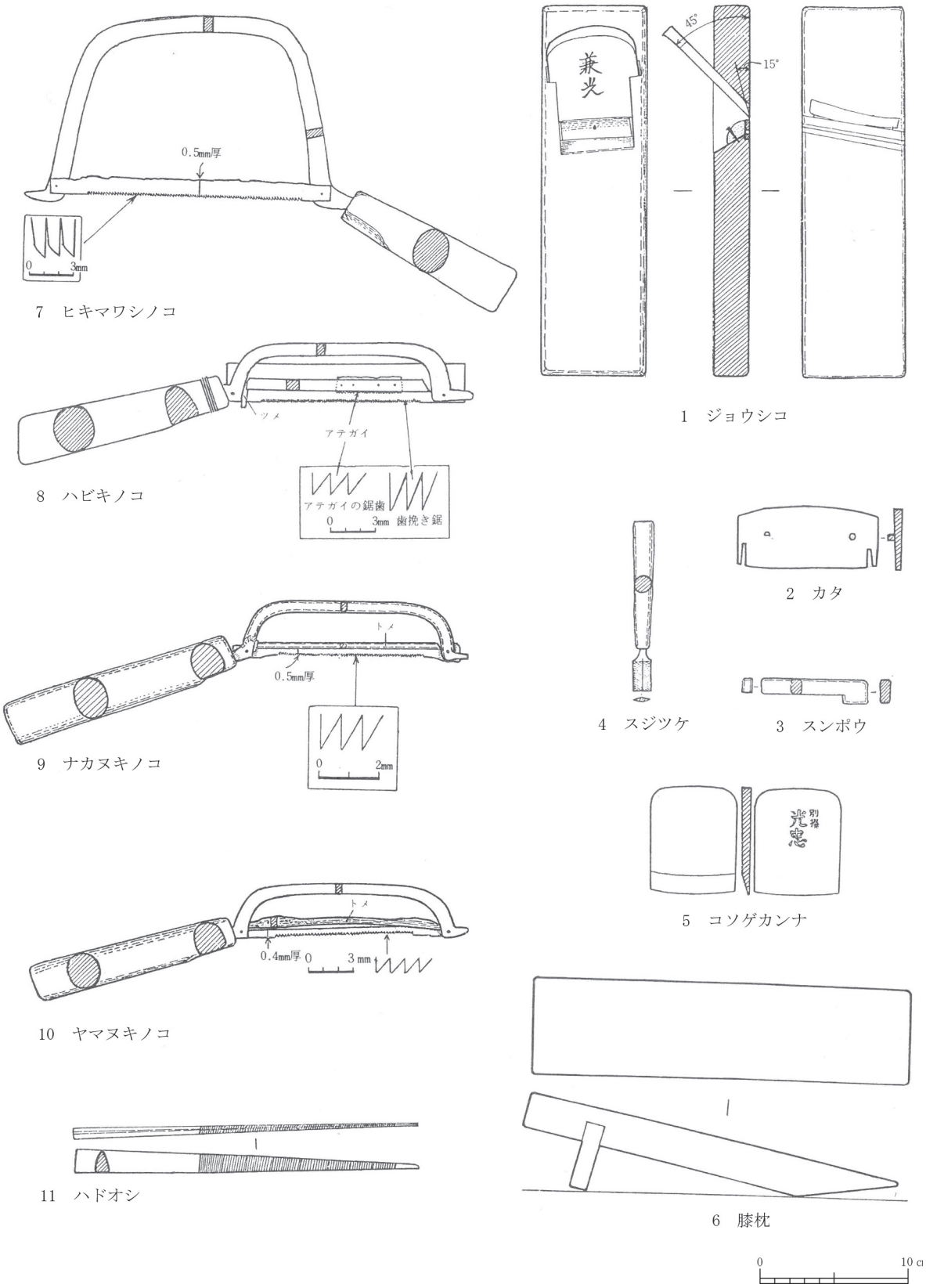



図 8. お六櫛の製作道具（柳川 1977 をもとに作成）

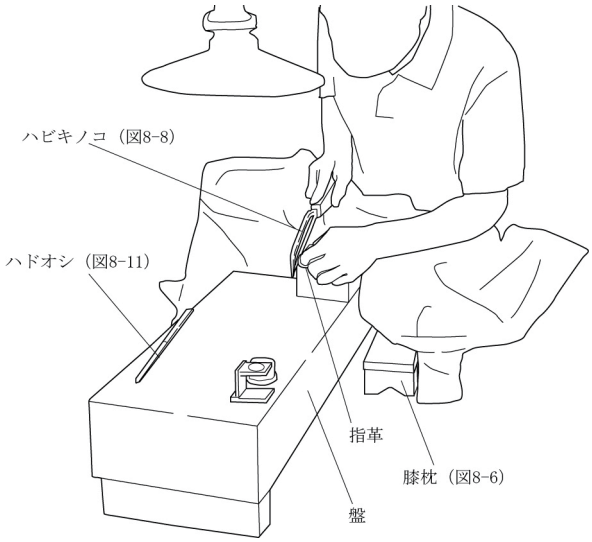



**図 9. お六櫛製作時の姿勢（筆者作成）**

コに比べて鋸身の幅が狭いつくりになっている。

**仕上げ**　櫛歯の挽いた際に出たケバをコソゲカンナ（図 8-5）で擦り落とす。そして親歯の角をミミツキガンナで削り落とす。さらに毛引きで用いたカタをひっくり返して、棟の形を決めて、カタからはみ出た分をヒキマワシノコで切り落とす。

**磨き**　下磨きとしてトクサで磨く。その後、貝や鹿の角で磨く。貝はボウズガイと呼ばれるものを用いた。磨きに使用した鹿の角は、磨いた箇所がへこみ、艶を出している。歯挽きまでは男性の仕事であったが、磨きの仕事は女性の仕事であった。また、歯の間に入った木屑を取り除くシュロカケは女性と子供の仕事であった。

こうして出来上がった櫛を女性たちが櫛問屋へ納めて金に換えた。

### （3）櫛を作るための道具

良い櫛を作るためには、自分の手にあった道具を自分で作り、自分で調整、加工、メンテナンスをする必要がある。特に、ハビキノコなどの鋸は、硬質の材を挽くため、適宜歯を研ぐ必要がある。そのため、鋸の歯の幅がどんどん狭くなり、歯を固定するための両脇の穴を開け直しているものも確認できる。

さらに、道具を作り、調整するための道具もあり、ゼンマイで鋸の刃を作るための両端に持ち手のついた刃物のセンと呼ばれるものなどを駆使して、自分の手にあった道具を職人自らが製作していった。

### （4）和泉櫛の概要

和泉櫛は大阪湾を望む貝塚市でつくられ続けている伝統工芸品である。伝承によれば欽明天皇の時代に始まったともされ、11 世紀に藤原明衡によって記された『新猿楽記』には諸国の産物のひとつに和泉櫛が挙げられている。江戸時代中期には、職人の数が 560 人いたとされ（福尾 1955）、その盛況ぶりが窺い知られる。大正 7 ～ 8 年には職人は 1500 ～ 2000 人に達し、昭和 55 年には全国の木櫛生産の 70％程まで占めていた（市川・吉川 2016）。

また明治時代後期から機械化が進み、現代でも歯挽きなどは機械によってなされている。さらに、お六櫛よりも分業が進んでおり、製材・歯挽き・磨きなど工程ごとに分業がなされ、最後に問屋に収められていった。こうした分業は、18 世紀中頃には始まっていた（萬代 2016）。このように機械化や分業化が進んだ背景には、大量生産に対応した結果であった。

### （5）和泉櫛の製作方法

**材の入手**　和泉櫛で使用する材はツゲが主である。ツゲの中でもホンツゲと呼ばれるものを使用し、伊豆諸島や鹿児島県が主な植生地であるが、和泉櫛は鹿児島県産のホンツゲが主に使用されている。このような遠方の材を用いることを可能にした背景には、和泉櫛の生産の地である貝塚市が海浜部に面しているため、海運の要地として機能していたからだと考えられている（市川・吉川 2016）。

戦前はツゲ櫛専門の材木問屋から職人に材を卸していたという。さらに戦後でもツゲは硬質な材であるため、一般の製材屋ではなく、ツゲの材を切る職人がいた。

入手した材は工場で製材し、材の色が変色しないよう日干し乾燥を行い、その後冷暗所に置く。これには 2 年程度かけ、次に曲がった材を矯正するために、材を束にしてそれを竹や金属製の輪で締める。

次に板をまっすぐに矯正するために、10 日～ 2 週間かけて窯の中で燻蒸する。これにより、板材は水分が抜かれ縮む。縮むと、束が緩むため、そのたびに束を締め直していく。燻蒸された材には、黒い煤が付着している。燻蒸の後、水分の抜けた材は空気が入って膨張するため、木材に竹や鉄輪を巻いて締めて、倉庫に入れておく。この状態で 30 年程放置した材が良いものだという。

**加工**　材の表面を鉋で削って大まかな形にする工程に入る。昨今では、機械のカッター一で削るようになっている。

**歯挽き**　現在では、電動鋸によって製作される。本稿では電動鋸の構造や具体的な工程を詳述することは、目的を外れるため避けることとする。

手で挽いていた時期の道具を見てみると、弓ノコを使用しており、お六櫛のハビキノコやヤマヌキノコ・ナカヌキノコと違い、アテガイやトメなどはない。ただし、この弓ノコも歯が 1 ㎜以下で、ゼンマイを加工したも

のである。

**ハスリ**　この工程は現代でも手作業で行われる。ツキヤスリで歯の先端をつぶすように削り、次にガリと呼ばれるヤスリで、歯の中を楔形に擦っていく。このガリは市販の金属製の三角ヤスリを櫛歯の長さや幅によって、職人自らが製作する。そして金属のヤスリでついた傷をトクサで磨くことで消す。トクサのあとは、ムクノハで磨く。

**テンズリ**　歯の先端部をサメ皮で粗く削ったのち、トクサで磨いていた。現在はサンドペ―パ―で磨いている。この工程は職人の熟練度が問われる作業であった（市川・吉川 2016）。

**カタキリ・ムネキリ**　カタに基づいて櫛の形に切る。カタは歯の深さと形を決める内型と櫛の外形を決める外型とがあり、問屋の発注や個人の注文に応じて職人自ら作ったものである。

**ミガキ・油塗り**　牛の骨やガラスで櫛を磨き、最後に椿油を染み込ませて完成となる。

### （6）櫛作りと信仰

櫛の製作方法とは関係がないが、職人の営みの一つとして信仰を取り上げる。

大阪府貝塚市には八品神社があり、全国の櫛職人や商人から「櫛の神さま」として信仰され、玉垣や石碑には全国の寄付者の名前が刻まれている。また、櫛の絵馬も奉納されていることが確認できる。八品の八は櫛を作る道具の数を示すという（市川・吉川 2016）。

お六櫛の藪原にも藪原神社の境内に八品社があり、櫛が奉納されていて、職人から信仰されていることがわかる。ここの八品の八は、水櫛、解櫛、真櫛、透櫛、爪櫛、挿櫛、唐櫛、小櫛を指す（武居 1975）。

### （7）小結

お六櫛と和泉櫛を比較すると、製作工程は大きな違いは見られないものの、材の違いに起因するためか、材の処理の仕方が異なるなど一部で相違点が確認できる。特にツゲを用いる和泉櫛では、良い櫛材にするために少なくとも 30 年はかかっている。また鋸をはじめとする道具も相違点が確認できた。生産体制も、和泉櫛は多量生産に適応するために完全な分業体制が行われ、性差の分業が主であったお六櫛との違いが見られる。これについて、多量生産に対して和泉櫛は早くから機械化を導入することで対応したのに対し、お六櫛は鋸に工夫を凝らすことで対応していったと考えられる。

一方で、職人が使う道具は職人自らが製作、調整、加工する点は双方で共通している。またお六櫛の藪原は中山道の宿場で、和泉櫛の貝塚市は大阪湾に面しており、いずれも交通の要所である。こうした立地条件が、藪原では製品の流通を可能にし、貝塚市では遠方からの薩摩ツゲの入手を可能にした[7]。

## Ⅳ. まとめ

ここで改めて考古資料から復元した古代横櫛の製作方法に立ち返ると、現代の伝統工芸品の櫛の製作方法といくつかの共通点が確認できる。ただし、古代の痕跡と現代に見られる痕跡とが容易に結び付けられるかどうかについては、別途さらなる検討が必要になるが、ここでは可能性としてとどめておきたい。

まず一点目は、大まかな製作工程である。材を入手し、適度な大きさに切って、表面を削り、毛引きの溝を彫って、櫛歯を挽き、最後に磨くという流れは古代も伝統工芸の櫛も大きな違いはない。

次に、歯挽きの手順である。襖遺跡出土の横櫛から復元できる歯挽きの方向は棟を上にしたときに右から左へ挽いていく。これはお六櫛とも共通し、棟を手前にして、左人差し指で右手の鋸の刃を押し出しながら緻密な櫛歯を挽くためという合理的な理由がある。古代の横櫛製作もこのような合理性を認識していた可能性がある。

さらに和泉櫛で確認できた燻蒸による煤の付着について、今回取り挙げなかった愛知県名古屋市櫛留商店の製品にも煤の付着が確認できる。これは和泉櫛と同様に燻蒸によるものである。そして斗西遺跡出土のものにも煤が付着しており、材を燻蒸したことによるものである可能性が考えられる。もし燻蒸していたならば、古墳時代から燻蒸によって材をまっすぐにする工程を行っていたことになる。

以上のように、実際に結び付けられるかどうかは別として、古代と現代とで共通点が見られることは事実である。このような共通点が、古代の横櫛に残された痕跡から人間の活動や営みを読み解いていくにあたっての参考となるであろう。

さらに現代の櫛製作の研究を通して、今後の古代横櫛研究の新たな視座が与えられる。例えば、製作に当たっての性差による分業や、大量生産に適応するための作業工程ごとの完全な分業化については、古代横櫛の生産体制を考える上でも重要な視点になる。

また、材の入手や製品の流通についてお六櫛と和泉櫛ともに交通の要所という利点を生かしたものであった。古代の横櫛も植生が限られるツゲやイスノキを用いているため、遠方との交通が可能でなければ製作できなかったと考えられ、未成品が出土した襖遺跡は琵琶湖に面する立地であることも、水上交通と材の入手、および製品の流通と関係があった可能性が推察される。

そして櫛歯を細かく挽く技術については、お六櫛の調査から技術の修練は勿論のこと、歯を挽くリズムは幼少のころから染み付いたものであり、血縁による家業の継承が高度な技術を保持する要因になりうる。古代の横櫛も歯が 1 ㎝当たり 10 本近い密度で挽いており、高度な歯挽き技術が想定されるため、その背景を考える上でとても参考になる事象である。特に人物埴輪の分析から、古墳時代後期後半において横櫛は、階層が上位の有力者層によって装着されていたことが推測されるが（大熊 2023）、高位の階層が横櫛を保持できた背景には、高度な製作技術と植生の限られる材の獲得といった条件を満たさなければ入手できなかったことに起因していると言える。

道具についても、遺跡から出土する櫛歯の細かさから 1 ㎜以下の薄さの刃をもつ鋸の存在をはじめ、櫛歯の先端の削り分けおよび調整を行う道具の存在や、稜線の丸みと表面を磨くための道具があったことが想定される。しかしこれらの道具について、実際の遺物としては現状確認できない。そこで現代の櫛製作に用いる道具を見てみると、1 ㎜以下の薄さの鋸、トクサを貼った擦り棒、磨きに使う鹿の角や貝殻がそれぞれ使用されていた。以上のように、遺跡では残りにくい有機物の道具をはじめとして、遺物では実際に確認が難しい古代の櫛製作の道具の候補が挙げられるのである。残念ながら襖遺跡からはこのような製作道具は出土していないが、今後櫛製作の道具が出土した際に、伝統工芸の製作道具が大いに参考になる。

なお、櫛の製作技術について室町時代に土佐光信によって描かれた『七十一番歌合』や 1685 年に菱川師宣の『和泉国諸国絵尽』、1690 年に原三郎によって描かれた『人倫訓蒙図彙』、1797 年の『職人尽発句合』、1806 年の山東京伝作の『於六櫛木曽仇討』の挿絵など、絵画資料が残されている。こうした絵画資料と比較してみると、現在のお六櫛で使用されている道具など共通点が確認できる。さらに、1841 年に宮田敏によって著された『岨俗一隅』[8] には櫛製作に必要な道具や工程も記されており、現在のものと多くが共通していることが確認できる。今後こうした資料も参考にしていくことで、古代と現代の技術の系譜を考えて行く必要がある。

## おわりに

古代の横櫛は、遺跡から出土する木製品の中でも、未成品が少なく製作工房も不明な点が多い資料である。このような要因もあって、横櫛についての生産体制や製品の流通などの研究も希薄である。

しかし現代の伝統工芸品の調査を通して、製作技術・道具・生産体制・信仰など今後の問題意識への示唆に富む成果を得ることができた。今後、このような問題意識を持ちながら、出土資料の横櫛のさらなる分析と新しい視点での検討を重ねていきたい。

**謝辞**

本研究では、諸氏・諸機関から、資料調査、取材のご許可・ご協力を賜りました。末筆ではございますが、御礼申し上げます。 安土城考古博物館（藤﨑髙志）、貝塚市南新町町会長 南川孝司、木祖村お六櫛組合副組合長 柳川浩司、国立奈良文化財研究所（浦蓉子）、滋賀県文化スポーツ部文化財保護課（福西貴彦）、静岡県埋蔵文化財センター（中川律子）、泉州木櫛商栄組合組合長西出長仕、奈良県立橿原考古学研究所（杉山拓己）、東近江市埋蔵文化財センター（福田由里子）、三重県埋蔵文化財センター（上村安生）（五十音順、敬称略）

なお、2022 年度髙梨学術奨励基金による成果を一部含みます。

**註**

1）年輪に対して水平方向に切った板材。曲線混じりの板目模様が特徴となる。
2）年輪に対して垂直方向に切った板材。直線の板目模様が特徴である。
3）藪原宿は中山道の宿場で、難所である鳥居峠の麓にある。
4）ナゲシとは鋸の歯を研いだ箇所を指す。
5）アサリとは鋸の歯を交互に左右に振り分けたものを指し、挽いた際に出た木屑を排出する機能を持つ。
6）トクサはトクサ科の植物で、茎には縦の筋があり、その表面はザラザラしているため、古来よりヤスリのようにして使われていた。
7）明治期の東京近郊の櫛問屋では伊豆の御蔵島・三宅島からツゲを買い求めていたという（石川 1986）。
8）服部良男校注（1932）を参照した。

**参考文献**

飯塚武司 2022『木工の考古学』雄山閣
池崎智詞 2019「出土櫛に見る古代木工技術―襖遺跡出土遺物をもとにして―」『紀要』第 4 号、pp.1-4、滋賀県文化財保護協会
生駒勘七 1977「第一章　お六櫛の歴史」『木曽のお六櫛』、pp.13-34、木祖村教育委員会
石川裕子 1986「つげ櫛職人」『研究紀要』第 3 号埼玉県立民俗文化センター、pp.1-32
市川秀之・吉川邦子 2016『伝統工芸和泉櫛の民俗技術調査調査報告書』貝塚市文化遺産活用実行委員会
伊藤実 1993「日本古代の鋸」『考古論集―潮見浩先生退官記念論文集―』、pp.535-562
大熊久貴 2023「古墳時代における櫛の使用法について」『考

古学研究』第 69 巻第 4 号、pp.59-80、考古学研究会
木沢直子 2007「古墳時代の横櫛」『元興寺文化財研究所創立 40 周年記念論文集』、pp.167-181、元興寺文化財研究所
木沢直子 2008「彼岸田遺跡出土木製横櫛に関する考察」神谷真佐子『鹿乗川流域遺跡群Ⅴ』、pp.403-408、安城市教育委員会
古瀬清秀 1991「鉄製工具」石野博信・岩崎卓也・河上邦彦・白石太一郎『古墳時代の研究』第 8 巻、pp.77-91、雄山閣
武居常雄 1975「年中行事」『木曽のお六櫛』、pp.257-268、木祖村教育委員会
田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店
寺沢薫 1986「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」寺沢薫『矢部遺跡』、pp.327-397、奈良県教育委員会
西弘海 1978「土器の時期区分と型式変化」『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ』、pp.92-100、奈良国立文化財研究所
萬代悠 2016「近世中後期における南泉州村落と和泉櫛産業―泉州日根郡畠中村を中心に―」『ヒストリア』248 号、pp.71-99、大阪歴史学会
福尾猛市郎 1955「第三編　近世」『貝塚市史』第一巻　大阪府貝塚市役所
宮田敏 1841『岨俗一隅』（服部良男校注 1932）
柳川静雄 1977「第二章　四　手挽きお六櫛の工程と技法」『木曽のお六櫛』、pp.70-109、木祖村教育委員会

## Production Techniques of Wooden Combs of Ancient Japan

OHKUMA Hisataka

This paper attempts to reconstruct the production techniques of wooden combs of ancient Japan. The focus of this paper is on combs of horizontal type that appeared in the early Kofun period (late third to fourth centuries, A.D.), as opposed to combs of slender, vertical type that had appeared much earlier. Those of the horizontal type continued being used till the present day. The comb teeth of the middle Kofun period (fifth century) and after were so fine that the technique to saw the comb teeth was very advanced even from the present perspective.

In order to reconstruct this advanced technique of the wooden comb production, the author has investigated not only complete artifacts of combs but also fragmentary artifacts, as well as unfinished product that was discovered at the Fusuma site in Kusatsu City, Shiga Prefecture. In particular the author has carefully observed minute traces of tools applied to the comb surface.

The author has gained important insight into a system of the comb production and distribution from ethnographic fieldwork the author has conducted at Yabuhara, Kiso Village, southwestern Nagano Prefecture where wooden combs are produced with traditional techniques even now and in Kaizuka City, southern Osaka Prefecture where the largest number of wooden combs are produced in Japan.

As a result, the production goes through the processes of the acquisition of material (wood), shaping, sawing the teeth, and polishing. It is highly likely that the edge of less than one millimeter was adopted to saws used for the comb production.

**KEYWORDS:**

Ancient Japan, wooden craft, comb production.

考古学集刊　第 19 号　13-23 頁，　2023 年

**研究ノート**

# 土器を構築材とする造り付けカマドの基礎的検討

## ―埼玉県域を中心に―

松本　康太郎

**要旨**

カマドの研究は多岐にわたるが構築材への着目はまれで、特に土器を構築材とする造り付けカマドは定量分析が存在しない。ここでは使用される土器と遺構としてのカマドを総合的に検討する足掛かりとして、埼玉県域内の該当する遺構を集成して分析および基本的な事実の確認を行った。

その結果、土器を構築材とする造り付けカマドは対象地域内において、検出量に時間的・空間的偏りが存在することが明らかとなり、基本的にはこの地域で製作・使用された土師器が使用され、須恵器は使用されないことが判明した。またその配置から焚口を重要視する可能性が高いと推測できた。さらに当該遺構を持つ建物跡と、持たない建物跡の差が、少なくとも建物面積に現れることも指摘できた。

この分析結果から、埼玉県域においては①土器を構築材とする造り付けカマドは 5 世紀に出現し、7 世紀に特徴的な遺構である、②より入手しやすい土器を構築材として使用した、③焚口に配置するのは補強以外に給気口面積の確保が考えられる、④当該遺構を持つ建物は、その時期の平均面積以上の面積を持つことが明らかとなり、その理由としてカマド補強という観点から、建物における食事を供する人が多いほど建物の専有面積が必要で、かつカマドの使用頻度多いためと考られる、などの考察を加えた。

**キーワード**：埼玉県域　構築材　土師器　カマド　古墳時代後期から平安時代

## はじめに

遺構としてのカマドは、古墳時代後期以来広く集落遺跡でみられる、鍋を掛けて煮たり蒸したりするドーム形の調理施設である。カマドには土製の置きカマドと、建物の一辺に付設される造り付けカマドの 2 種類が存在する。そのうち、造り付けカマドの研究は出現や変遷、祭祀、燃焼構造などの面で様々な成果が蓄積されており、近年は甕のススコゲ分析などと組み合わせて、当時の食材調理方法の復元、さらにはその東西差の解明に迫った研究もみられる。一方で､造り付けカマドには粘土や砂、石材、土器、瓦等多様な構築材が使用されるが、それらに着眼した研究は未だ少ない。その原因のひとつとして考えられるのが、造り付けカマドは壊れるのではなく人の手によって意図的に壊されるものであり（中沢 1986、堤 1991・1995）、検出状況が純粋な使用状態を示さないという点である。しかし、ある程度構築材が残ったカマドも一定数検出されるようになり、まとまった範囲内での定量分析は有効と筆者は考えている。本稿では『発掘調査のてびき』でも重要な遺構として示されている、土器を構築材とする造り付けカマド（図 1）に着目して基礎的な分析を行い、遺構としてのカマドと使用される土器を総合的に分析する足掛かりとしたい。なお、以下では該当遺構について「造り付け」の表記を省略する。

## Ⅰ. 研究史

カマド構築材全般への着目も含め土器を構築材とするカマドに関して、管見で触れる限りは定量分析は存在しない。以下ではこれらの遺構への記述を基に現在の認識について確認する。

カマド構築材に関する言及は古く、1955 年刊行の新宿区落合遺跡の発掘調査報告書内の大川清による記述がその端緒である。大川はカマドの構築材について、①粘

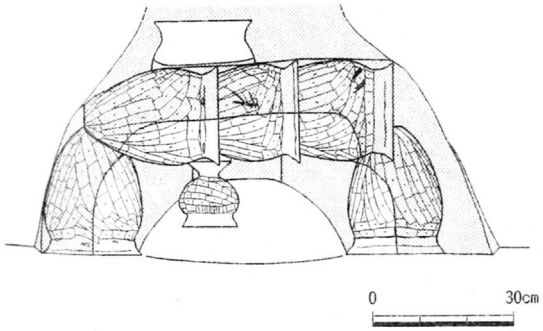



**図 1.『発掘調査のてびき』掲載の土器を構築材とするカマド（文化庁文化財部記念物課（編）2010）**

土製、②石芯粘土製、③石組み、④土器芯粘土製、⑤瓦組みの 5 つに整理し、構築材の使用は粘土による構造の欠陥を補うもの、すなわち補強を目的としていると推測した（大川 1955）。また粘土製が一番古いとしながらも、構築材の使用は時期差ではなく地域差であり、身近にあるものを使用したに過ぎないと考えた。大川のこの記述は、カマド構築材に関して基本的な視点を提示したものとして評価できる。

外山政子は群馬県長根羽田倉遺跡・三ツ寺Ⅱ遺跡の古墳時代のカマドについて、構築材として使用される土器とそこに付着する外面のスス痕や内面のコゲ痕を詳細に観察し、それらの土器が一度調理に使用されたのちカマド構築材に転用されることを突き止めた（外山 1991・1992）。その後、原智之は土器を含むカマドの構築材の使用について、①加工に労力を要さないもの、②建物内に必ず存在するものを条件に挙げ、構築材の使用目的として、カマド高さの維持と補強が主なものだと考えた（原 2001）。さらにこれらの構築材を使用するカマドは検出数が多くないことを踏まえて、「頑丈なものを末永く」的な考えに基づいた「高級竈」と位置付けた。加藤隆則は埼玉県加須市飯積遺跡の報告書内において構築材が使用される個所を集計したところ、カマドの先端、すなわち焚口に使用する例が一番多いことを明らかにし、焚口に利用する理由として焚口幅の決定と推測した（加藤 2007）。このほか、福島県本宮市高木遺跡（北野ほか 2008）、新潟県聖籠町山三賀Ⅱ遺跡（滝沢 2009）、京都府京都市西京極遺跡（柏田 2017）において土器を構築材とするカマドの事例が挙げられており、土器はいずれも一度調理に使用後、転用されているという。特に柏田有香は、西京極遺跡における 6 世紀前葉から中葉と推測される土器を構築材とするカマドの存在について、カマド導入から 1 世紀あまり経て構築技術が一定の到達点に達した段階のものと評価している（柏田 2017）。

近年は小林正史が、掛ける甕の個数との関連でカマドの構築材について言及しており、東国に甕や石などを構築材として使用する例が多い理由として、甕を 2 個掛けることで燃焼室内に隙間が無くなり、側壁に圧力がかかることでそこを補強する必要が生じるためと推測している（小林 2018）。

以上、土器を含めたカマド構築材に関する認識を概説したが、おおむね以下にまとめられる。すなわち、①土器を構築材とするカマドは東北地方南部・北陸を東限、畿内を西限とするかなり広い範囲にわたって見られる、②構築材に使用される土器は一度調理工程を経て転用されている、③カマドの高さや焚口幅の確保、側壁の補強など様々な理由が考えられている、④土器も含め構築材は身近にあるものを選択している、の 4 点である。一方で、これらの認識が定量分析から得られたものではないため、上記②～④に関しては定量分析を行い再検討する余地があるだろう。また、現在まで言及のなかった出現や変遷、空間的分布など基礎的な事実確認も課題として設定する。

## Ⅱ. 分析対象と方法

分析対象遺構は、土器を燃焼室範囲（袖・天井部）に使用したカマドである（図 2）。煙道を土器で構築するカマドについては、検出量が極めて少ないため今回は対象から除いた。対象地域は現在の埼玉県域で、対象の遺跡は古墳時代後期～平安時代の集落遺跡 78 か所、遺構数は 326 基である（図 3）。

分析は、土器編年を基礎とした（1）時期による検出量変化と[1]遺跡位置による空間分布の把握、（2）土器配置の類型化と傾向、（3）使用する土器の種類、（4）土器を構築材とするカマドの有無の比較の 4 つである。

## Ⅲ. 分析

### （1）時期による検出量変化と遺跡位置による空間分布の把握

各遺跡の報告などを基に、検出した 326 基のカマドを持つ建物をⅠ期（5 世紀後半）～Ⅹ期（10 世紀以降）に再構成し、数量の推移を示したのが図 4 である（図 4）。これによると、土器を構築材とするカマドは埼玉県域においてⅠ期（5 世紀後半）に出現し、徐々に検出量が増加する。Ⅴ期（7 世紀後半）になると数量はピークに達し、Ⅵ期（8 世紀前半）以降、その数を減らしながらⅩ期（10 世紀以降）まで継続する。

この時期別の推移を分布と組み合わせて示したのが図 5 である（図 5）。先に示した図 3 において、分布が県の北西部域に固まることが明らかであるが、さらにそれを時期別にみると、すべての時期において北西部域で検出されており、時期的にも安定して検出される範囲であることが分かる。

Ⅰ期（5 世紀後半）は深谷市の城北遺跡、柳町遺跡、川端遺跡で検出されており（図 6 上段）、Ⅱ期（6 世紀前半）以降、北西部域を中心にその分布範囲を拡大してゆく。分布範囲が最大広域化するのはⅣ期（7 世紀前半）で、埼玉県のほぼ全域において検出されるようになる。Ⅶ期（8 世紀後半）までは比較的広範囲で検出されるが、その後は検出量の減少と共に再び県の北西部域に収束し、Ⅹ期（10 世紀以降）に深谷市大寄遺跡、本庄市大久保山遺跡の検出をもってその終焉を迎える（図 6 下段）。

以上の分析から土器を構築材とするカマドは、当該地域において時間的、空間的にみて広く見積もっても 7 世

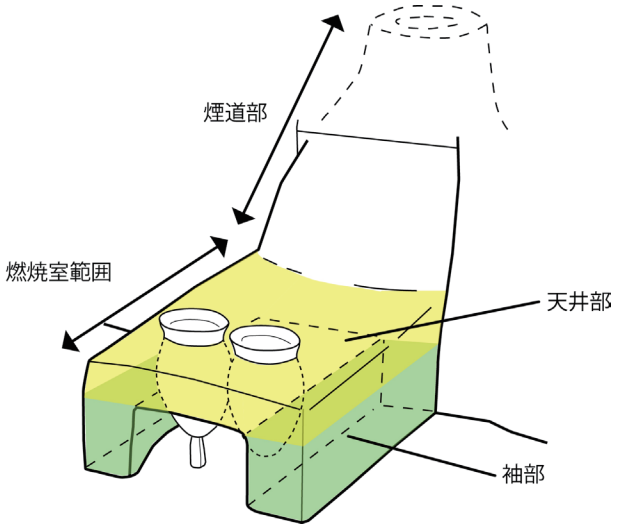



図 2. カマドの構造と名称（外山 2018 を改変し作成）

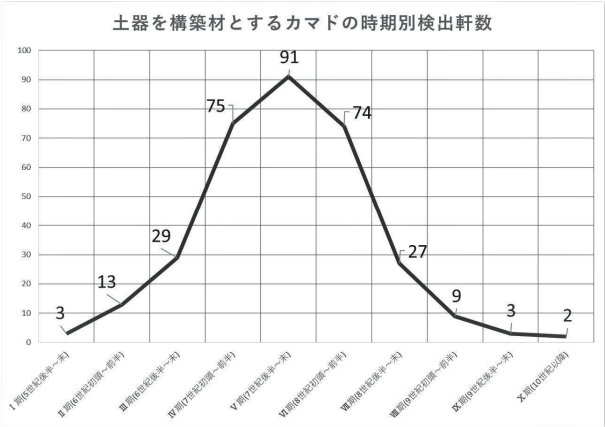
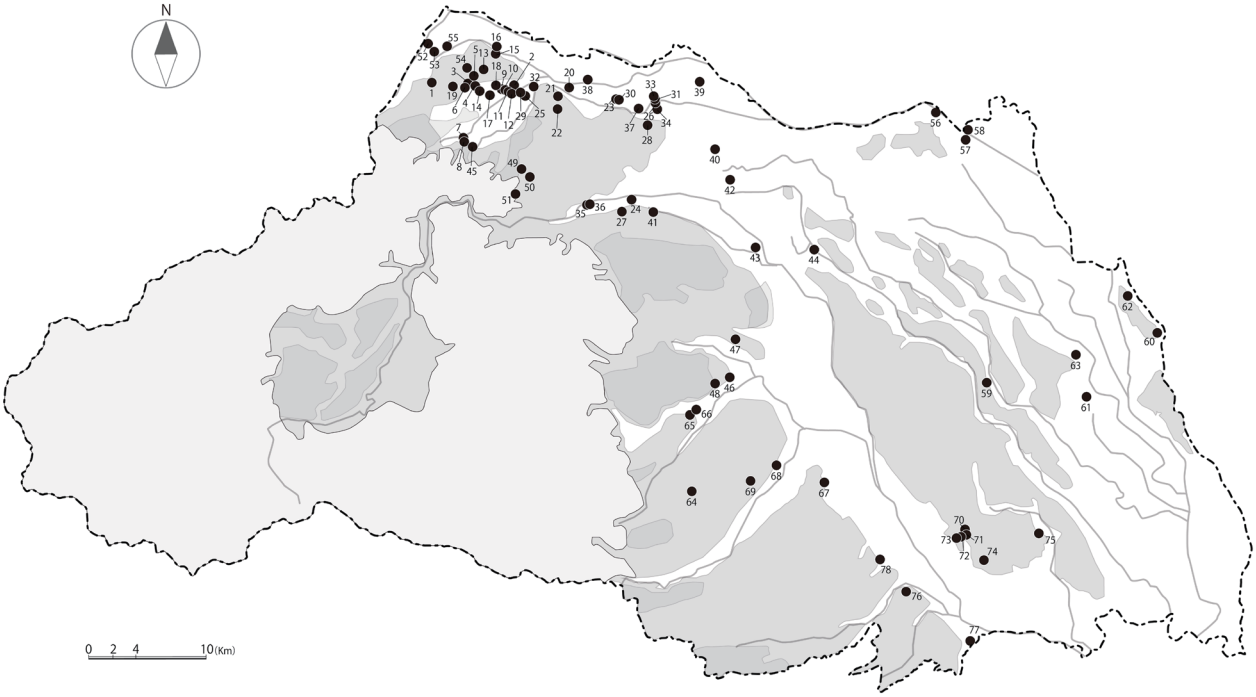



図 4. 土器を構築材とするカマドの時期別の数量変遷




1. 皀樹原遺跡・檜下遺跡
2. 社具路遺跡
3. 今井屋敷裏遺跡
4. 今井川越田遺跡
5. 地神遺跡
6. 今井遺跡
7. 秋山諏訪平遺跡
8. 秋山大町遺跡
9. 北堀久下北遺跡
10. 久下東遺跡
11. 久下前遺跡
12. 北堀新田前遺跡
13. 夏目西遺跡
14. 川越田遺跡
15. 小島仕切沢遺跡
16. 小島本伝遺跡
17. 大久保山遺跡
18. 七色塚遺跡
19. 将監塚遺跡・古井戸遺跡
20. 樋詰遺跡・砂田前遺跡
21. 熊野遺跡
22. 北原遺跡
23. 上敷免遺跡
24. 鹿島平方裏遺跡
25. 宮西遺跡
26. 前遺跡・居立遺跡
27. 権現堂北遺跡
28. 下郷遺跡
29. 大寄遺跡
30. 新屋敷東遺跡
31. 城北遺跡
32. 六反田遺跡
33. 柳町遺跡
34. 清水上遺跡
35. 如意遺跡
36. 川端遺跡
37. 宮ヶ谷戸遺跡
38. 雷電遺跡
39. 池ノ上遺跡
40. 北島遺跡
41. 宮下遺跡
42. 前中西遺跡
43. 下田町遺跡
44. 築道下遺跡
45. 広木上宿遺跡
46. 大西遺跡
47. 篭田遺跡
48. 大塚原遺跡
49. 堀込遺跡
50. 出羽塚遺跡
51. 金嶽遺跡
52. 東猿見堂遺跡
53. 臺遺跡
54. 下廓遺跡
55. 若宮台遺跡
56. 屋敷裏遺跡
57. 宮東遺跡
58. 飯積遺跡
59. 荒川附遺跡
60. 貝の内遺跡
61. 浜川戸遺跡
62. 槇野地北遺跡
63. 道仏遺跡
64. 王神遺跡
65. 稲荷前遺跡
66. 金井遺跡
67. 小仙波4丁目遺跡
68. 霞ヶ関遺跡
69. 上組遺跡
70. 小井戸遺跡
71. 札ノ辻遺跡
72. 札ノ辻3号遺跡
73. 今宮2号遺跡
74. 別所子野上遺跡
75. 水深遺跡
76. 城山遺跡
77. 吹上遺跡
78. 宮脇遺跡

図 3. 分析対象遺跡

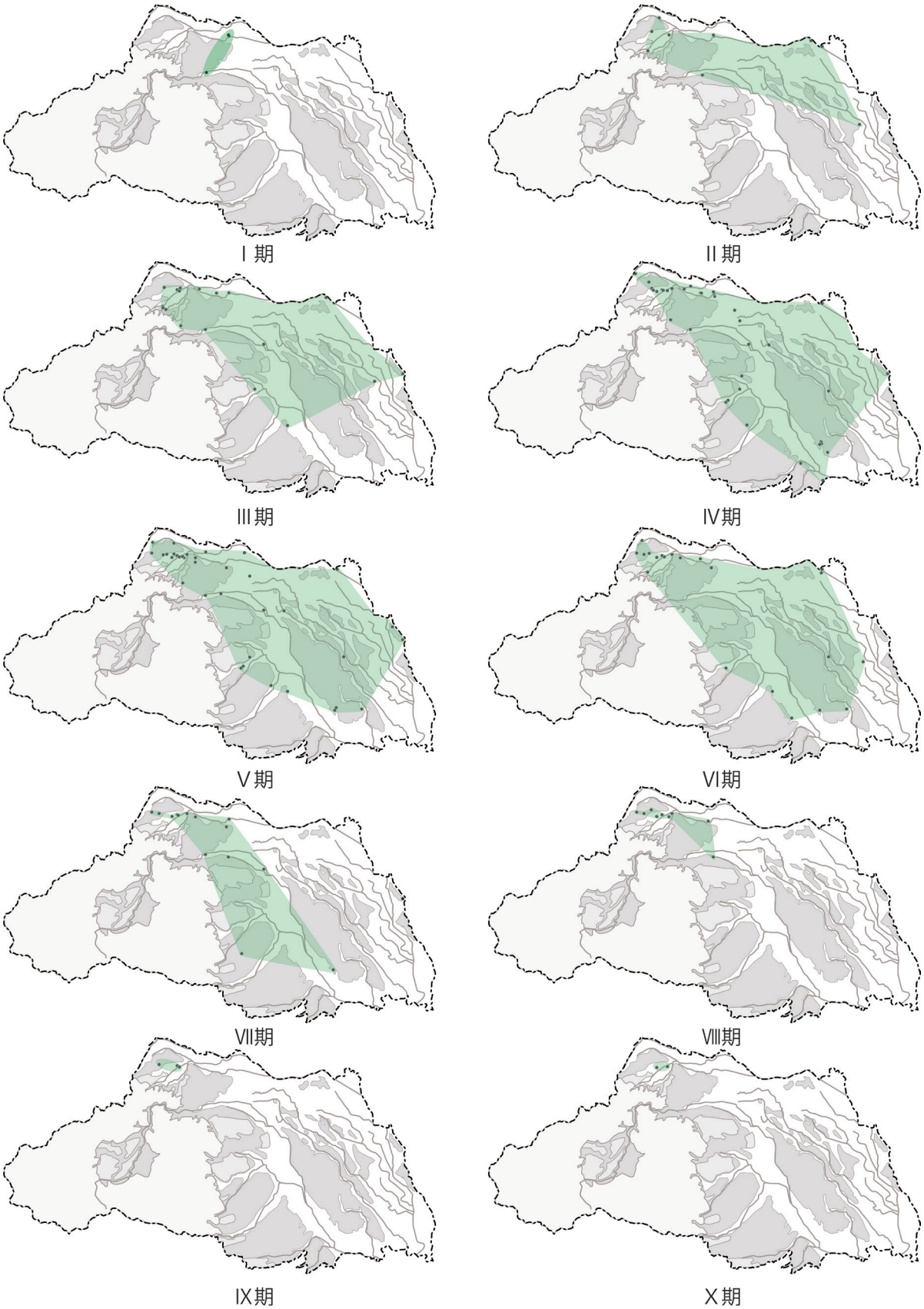



図 5．各時期ごとの検出遺跡位置

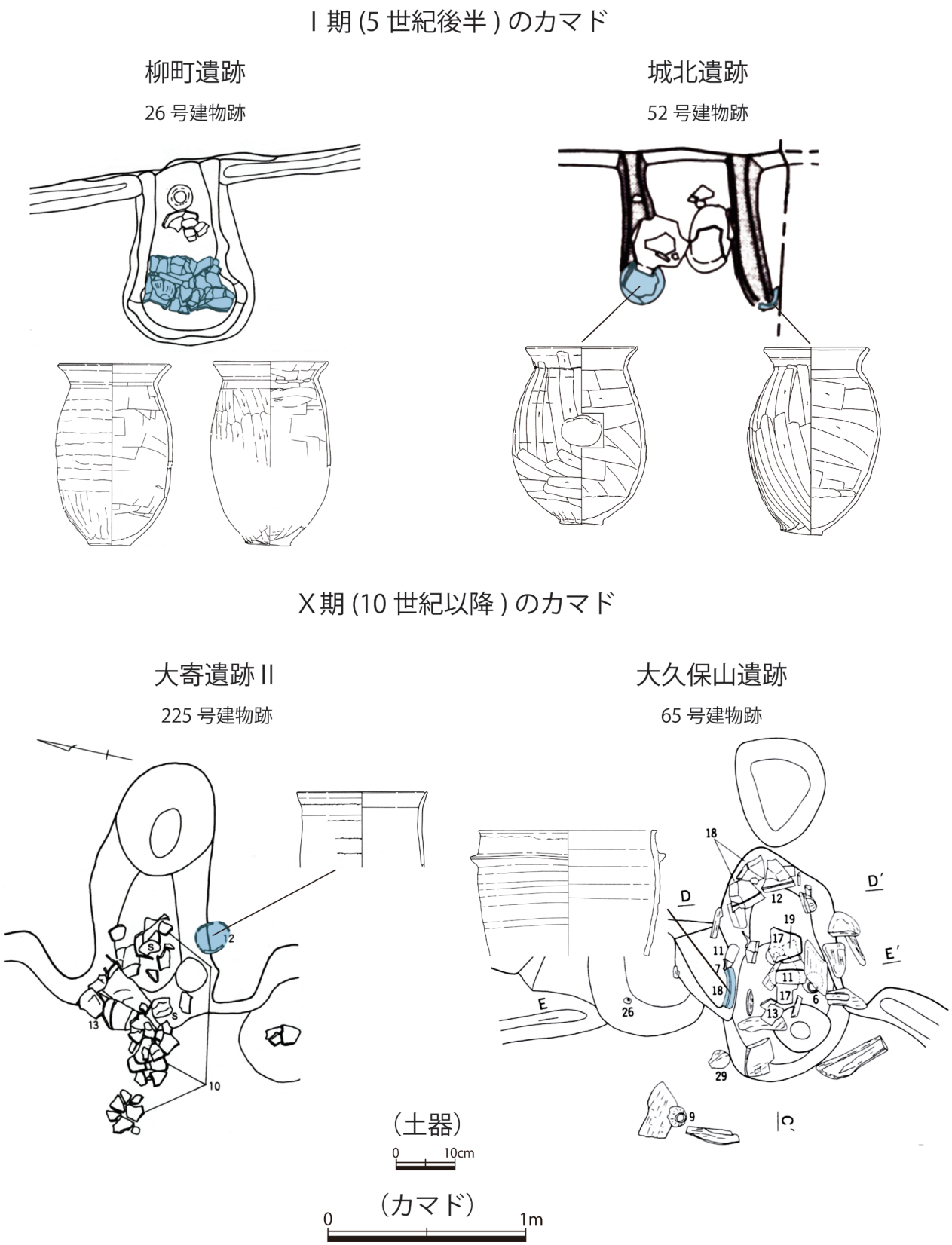



図 6.　Ⅰ期とⅩ期の土器を構築材とするカマド（各報告書による）

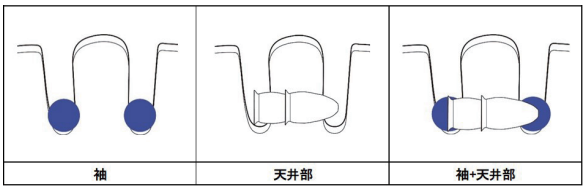



図 7. 主な検出遺跡位置と数量

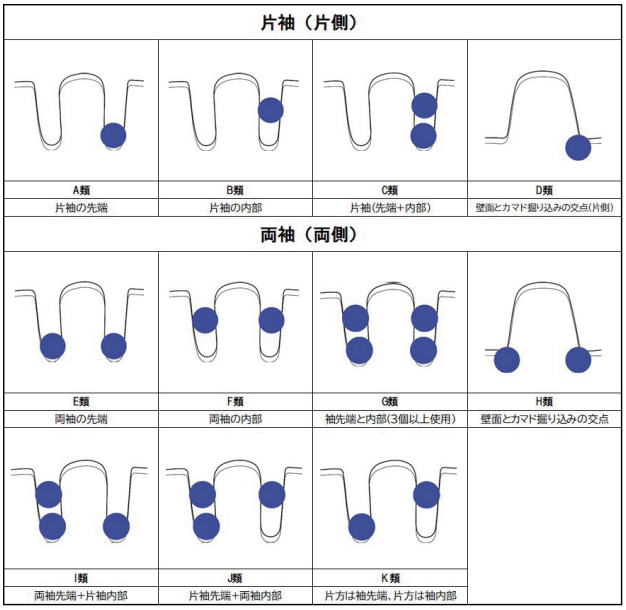



図 8. カマド袖からの土器の検出位置と類型

表 1. 各類型の時期別検出数量表

| 時期 | 類型 | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | A | B | C | D | E | F | G | H | I | J | K | 計 |
| Ⅰ期(5世紀後半) | 0 | 1 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 |
| Ⅱ期(6世紀前半) | 4 | 1 | 0 | 0 | 7 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 12 |
| Ⅲ期(6世紀後半) | 8 | 0 | 1 | 0 | 14 | 1 | 2 | 0 | 1 | 1 | 0 | 28 |
| Ⅳ期(7世紀前半) | 17 | 6 | 0 | 2 | 31 | 3 | 6 | 1 | 2 | 1 | 1 | 70 |
| Ⅴ期(7世紀後半) | 24 | 11 | 0 | 2 | 35 | 8 | 1 | 3 | 1 | 0 | 2 | 87 |
| Ⅵ期(8世紀前半) | 17 | 4 | 0 | 3 | 24 | 13 | 2 | 5 | 0 | 0 | 0 | 68 |
| Ⅶ期(8世紀後半) | 2 | 4 | 0 | 2 | 2 | 3 | 0 | 6 | 0 | 0 | 1 | 20 |
| Ⅷ期(9世紀前半) | 2 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 | 0 | 0 | 0 | 5 |
| Ⅸ期(9世紀後半) | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| Ⅹ期(10世紀以降) | 0 | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 |
| 計 | 74 | 30 | 1 | 9 | 114 | 28 | 11 | 17 | 4 | 2 | 4 | 294 |

紀に特徴的な遺構といえる。

## （2）土器配置の類型化とその特徴

土器の検出位置は大きく①袖、②天井部、③袖＋天井部の 3 つに分類できる（図 7）。そのうち袖からの検出例は①と③を合計した 294 基であり、全体の 90％に当たる。ここから、現状検出数の多い袖からの検出例を類型化し、その時間的な在り方を確認する。

袖からの検出状態を図 8 のとおり 11 の類型に分類した（図 8）。ただし類型 A ～ D は片袖のみの検出ではあるが、本来両袖に土器を配置していた可能性は否定できないので、注意が必要である。

特徴のある類型について記述すると、袖における土器の配置の仕方はカマドによって多種多様であるが、類型ごとの最大検出数を誇るのは両袖の先端に配置する類型 E であり、8 世紀後半まで安定して見られた（表 1）。また片袖の先端に配置する類型 A が次点で、6 世紀から 9 世紀まで認められた。このように袖の先端から検出される例は、類型 B・F を除く 294 基のうち 236 基であり、構築材配置の位置として当時の人びとが袖の先端を重視していたと考えられる。

次にあげられるのは類型 G で、両袖の先端と内部にそれぞれ土器を配置する。最低でも構築材として土器を 4 点使用していることが特徴である。このように土器を多量に構築材として使用する類型 G が、6 世紀～ 7 世紀にかけて一定数検出されており、1 基あたりの土器の使用個数と検出軒数は関係しないことが明らかである。

反対に類型 K のような片袖は先端、片袖は内部に土器を配置する例は極めて少ないことも特徴の一つとして挙げることができる。これらの配置類型か全体を通覧して、土器がカマドの中央軸と直行するよう配置されている例が多く（具体的には類型 A ～ D、K を除く 176 基）、ここから袖であればどこに土器を配置してもいいというわけではなく、土器を配置することで得られる効果を当時の人が把握していることが覗えよう。

## （3）使用する土器の種類

カマドの構築材として使用する土器についても、器種や種類に偏りがあるのかを検討した（図 9 左上）。結論として、カマドの構築材として使用される土器は、長胴甕とその系譜上に位置する武蔵型甕が大半を占めることが明らかとなった。当該地域において古墳時代後期から平安時代にかけて多量に出土するため、この結果は当然といえる。検出遺構としては 326 基の内 264 基が長胴甕ないしは武蔵型甕のみで構成するカマドで、その他、春日部市貝の内遺跡においては常陸型甕が使用される例がある（図 9 右上）。その他の土器を使用する残りの 62 基についても、使用する土器の一部に長胴甕・武蔵型甕が含まれるものもあるため、実際に長胴甕や武蔵型甕を使用するカマドはさらに多い。

また、この分析の特徴的な結果の一つに、甑を構築材に使用するカマドが存在することが挙げられる。数は少ないものの、実見したものの中には、ほぼ完形で構築材として使用されている例も存在した（図 9 左下）。このことは構築材として使用する土器は甕に限らず、甕に準ずるサイズを持つものであれば利用されることを示している。その一方で、須恵器の壺や甕をカマドの構築材と

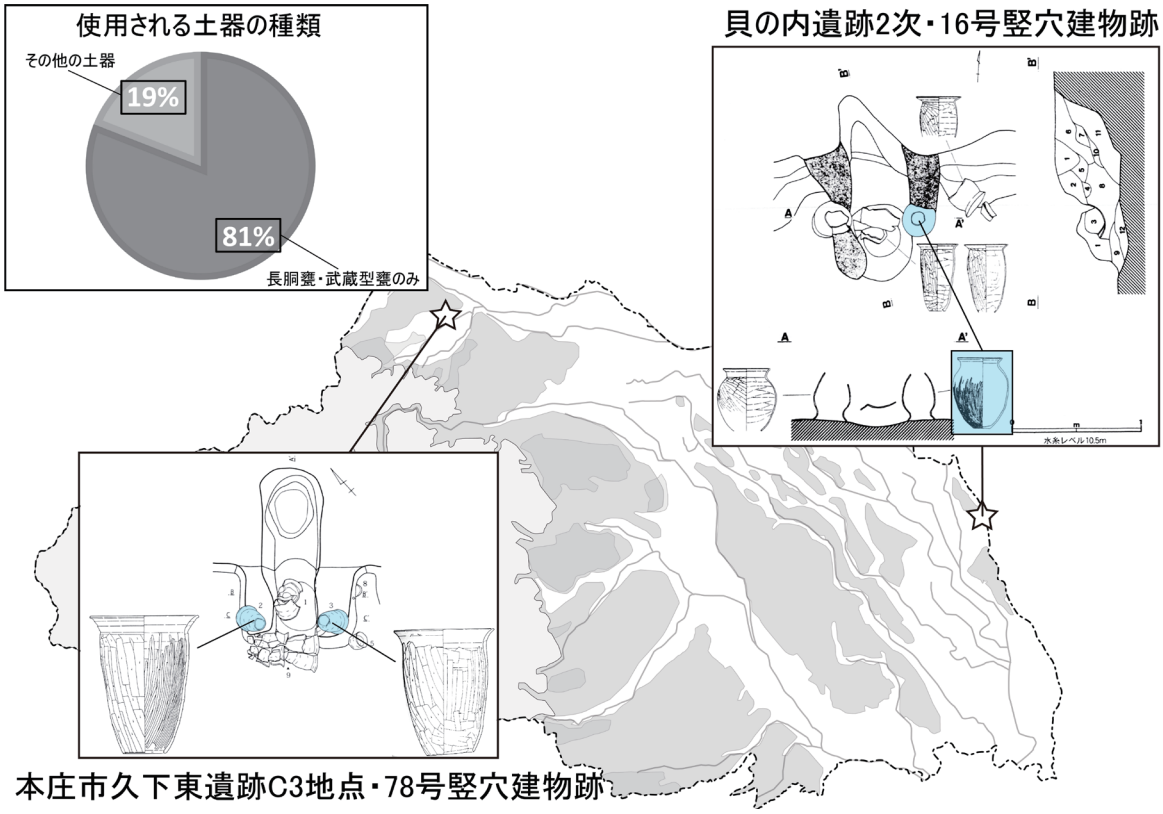



図 9. 検出される土器の種類と遺跡の位置（土器、カマドは各報告書による）

して袖の先端や内部に立てる例は全く見られなかった。当時の人びとが、須恵器をこのような使用の仕方として選択しなかったことが覗える。

### （4）土器を構築材とするカマドの有無の比較−建物面積の検討から−

前述のとおり、土器を構築材とするカマドは確認できただけで 326 基あり、当該地域の古墳時代後期から平安時代にかけての竪穴建物数に比して、その検出数は圧倒的に少ない。もちろん、最初に述べたようにカマドは使用終了時に意図的に破壊される例が多いため、土器を構築材としたカマドの実数は検出数より多いことが予想されるが、それでも通常の粘土や地山で構築するカマドと比較すれば、その使用数は少ないと考えられる。

ところで、カマドに構築材として土器を使用する理由は、「堅牢なカマドを作る」（原 2001 ほか）、「補強する」などが考えられている。もしこうしたカマドが「補強」の意味を持つならば、カマドを補強する建物、補強しない（＝粘土や地山などで作る）建物で何かしらの差が出るはずと考えた。そこで着目したのが建物の床面積である。

分析としてはまず、辺の長さが分かる竪穴建物跡を任意の遺跡 16 か所から抽出し（n=1590）、Ⅰ～Ⅹ期ごとの建物跡の面積の平均値を算出した（図 10・表 2）。次に、土器を構築材とするカマドを持つ建物跡の面積の平均値を算出し、その差を比較した（図 11）。なお、土器を構築材とするカマドを持つ建物で建物面積が判明したものは 326 軒のうち 263 軒であり（表 2）、時期によってはサンプル数が極端に少ない場合もある。面積の比較分析の結果、古墳時代後期において、当該カマドを持つ建物はどの時期においても平均より広い傾向が顕著で、奈良時代以降についてもこの時期の平均の数値とほぼ同じかやや広いという結果になった。分析数が少なく、一般的な傾向とするためには資料の増加を期待したいが、結果としてもある程度の妥当性は担保できると考えられる。

## Ⅳ. 考察

以上の分析結果をまとめると、①埼玉県域において北西部域が分布の中心であり、Ⅳ期（7 世紀前半）に分布が最大広域化する。②Ⅰ期（5 世紀後半）からⅩ期（10 世紀以降）まで検出が確認され、そのピークはⅤ期（7 世紀後半）である、③袖における土器の配置は先端（焚口）が多い、④使用される土器は長胴甕や武蔵型甕を中心とする、⑤土器を構築材とするカマドを持つ建物は各時期の平均よりも面積が大きい傾向にある、の 5 つに集約される。

この結果を基に、いくつか考察を加える。まず出現時

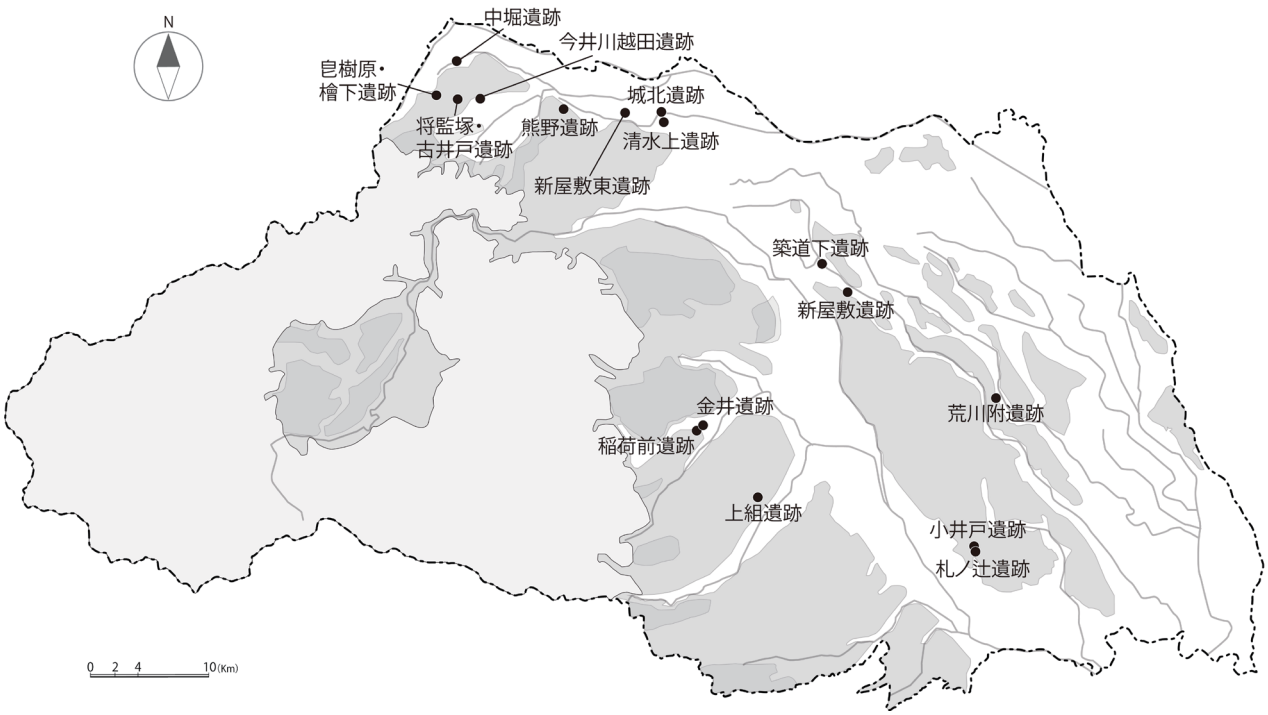



図 10．建物面積を分析した遺跡とその位置

期に関してであるが、土器を構築材とするカマドが埼玉県域において 5 世紀後半に出現するということは、少なくとも当地域において西京極遺跡の事例において指摘された、構築技術が一定の到達点に達した段階のカマド（柏田 2017）という認識は当たらないと考えられる。むしろカマド導入とさほど時間差なく現れると推察されるのだ。これを傍証する一例として、隣接する群馬県渋川市金井東裏遺跡において検出されたカマドが挙げられる（図 12）。この遺跡は甲冑を着た古墳時代の人骨が出土し著名となったが、発掘調査において 30 軒を超える竪穴建物が検出されており、その中でも 72 号建物跡の土器を構築材とするカマドが注目される。この建物跡の時期は出土土器から 5 世紀中葉に遡る可能性が指摘されており（杉山ほか 2019）、さらに当遺跡におけるカマドの出現期でもある点は特筆されよう。このことから土器を構築材とするカマドの出現は、カマド導入とほぼ時間差がなく、すでに当時の人がこれらのカマドの存在と構築方法を熟知していたことが覗える。また当該カマドは土器の配置から図 8 で示した類型 G または J と推測され、出現に近い時期において、土器を 3 個体以上使用する例が見られることも、これらのカマドの特徴として明記しておきたい。

次に土器の検出位置に関してであるが、その多くが袖の先端、すなわち焚口に配置することが明らかになった。焚口に配置する理由として、構築土の流出防止（加藤 2007）などの補強的側面のほか、高さの維持（原

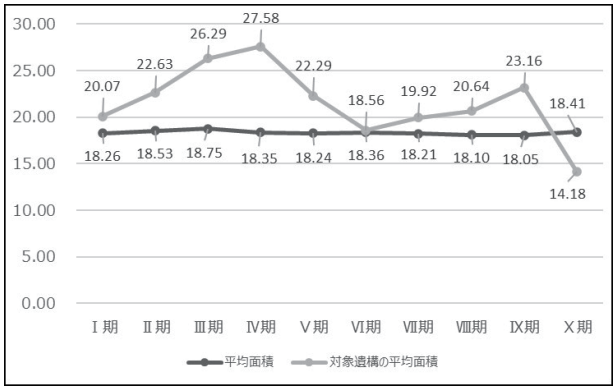



図 11．各時期の竪穴建物の平均面積と土器を構築材とするカマドを持つ住居面積の比較グラフ

表 2．建物面積の分析対象数

| | Ⅰ期 | Ⅱ期 | Ⅲ期 | Ⅳ期 | Ⅴ期 | Ⅵ期 | Ⅶ期 | Ⅷ期 | Ⅸ期 | Ⅹ期 | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 埼玉県全域 | 51 | 111 | 144 | 233 | 233 | 248 | 131 | 99 | 207 | 133 | 1590 |
| 対象遺構 | 2 | 11 | 22 | 64 | 67 | 63 | 23 | 7 | 2 | 2 | 263 |

2001）、幅の確定（加藤 2007）が考えられている。換言すれば、単にカマド補強だけがこれらの構築材使用の理由にならない。焚口高さの維持や幅の確定から考えられることは給気口の面積の確保であり、酸素の安定供給とそれによる安定的な火力を求めたことで、これらの構築材を使用したと考えることができる。このように構築材使用に関しては、カマドの補強以外の側面も評価すべきであろう。

一方で、土器を構築材とするカマドの有無と建物面積

の相関は、上に挙げた給気口面積確保のみならず、やはりカマドの補強という側面も強く関わると考えられる。現状では、土器を構築材とするカマドを持つ建物は、時期別にみてもその平均よりも大きい傾向にある。これはおそらくカマド使用頻度と関わると考えられ、同一建物内において食事を供する人が多いほど建物の占有面積が必要であり、かつカマドの使用頻度が多くなりより耐久

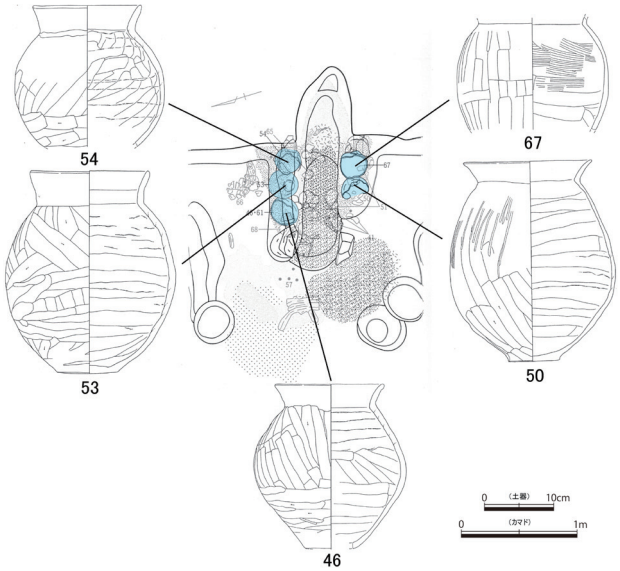



図 12. 金井東裏遺跡 72 号竪穴建物跡カマドと土器（杉山ほか 2019 を改変）

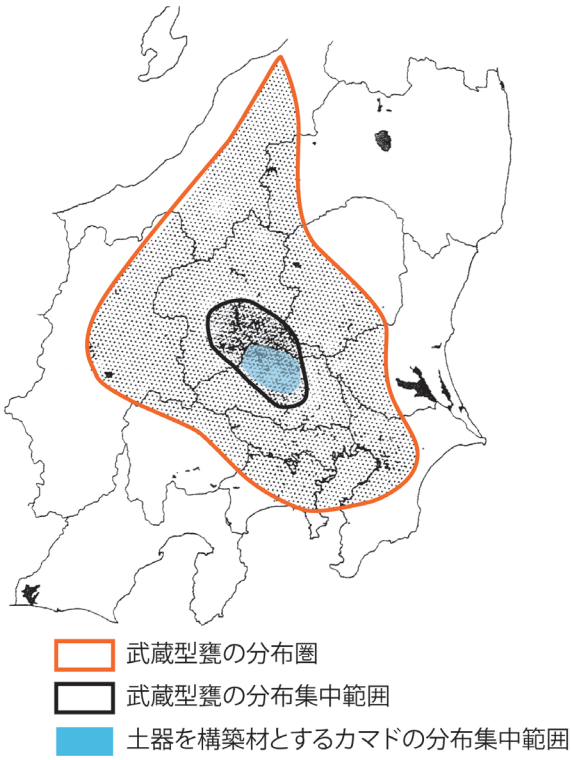



図 13. 武蔵型甕の分布範囲（桜岡 2003 に加筆）

力が必要であったと推測する。

最後に、使用される土器について考えてみたい。先述のとおり使用される土器については当該地においてよくみられる長胴甕や武蔵型甕が使用される傾向が強いが、実は土器を構築材とするカマドの分布の中心域と武蔵型甕の分布の中心域と範囲が重なる（図 13）。桜岡正信によれば、この武蔵型甕の分布の中心域が武蔵型甕の生産地であるという（桜岡 2003）。このことから、これらの甕の生産の中心と土器を構築材とするカマドの分布中心域が重なるということは、使用する土器はあくまでも恒常的に入手可能なものであると言える（大川 1955、原 2001）。その反面、甑や長胴甕や武蔵型甕以外の甕類、例えばやや小型の甕や形態的に壺に近いものなどが使用される例も散見され、長胴甕や武蔵型甕のサイズに準じるものであればよく、その建物で生活を営んでいた者からすれば、長胴甕や武蔵型甕に限らず身近に存在する土器を使用したに過ぎない。

ただし、構築材に使用された土器は実見した限りでは完存するものや、ススやコゲが顕著に見られないもの、残りのいいものを意図的に打ち欠いて利用する例も一定数見られた。そのため、今まではカマドの構築材として使用される土器は調理工程を経たのち転用されたものと考えられてきたが、調理工程を経ないで構築材に使用されている可能性も考慮に入れる必要があるだろう。

## おわりに

以上、土器を構築材とするカマドについて、時期・空間分布の分析や配置の傾向などを分析し、基礎的な事実とそれに伴う若干の考察を付け加えた。先述のとおり、これだけ分析をした資料も当該地域・当該時期のカマドの総数からするとごくわずかであり、構築材に土器を使用することは、カマド構築に際してのオプションのひとつに過ぎない。土器のみならずカマドの構築材は、周囲を取り巻く環境と人々の意識や知識によって選択されたのであり、そこから当時の人々の思考の一端が読み取れると考えている。今後の課題として、地域を広げて土器以外のカマドの構築材についても同様の分析を行い、地域を越えて同様の傾向が見られるのか、また食膳具と煮沸具である土師器の地域色とカマドの構築材の選択の仕方は相互に関連するか明らかにすること、そしてこの土器を構築材とするカマドの出現とカマドの伝播の関連性の検討、この 2 点を挙げ擱筆することとしたい。筆者の力不足ゆえ蒐集資料の見落としや分析の拙劣さは否定できず、また基礎分析以上の考察を加えることができなかった。諸賢のご叱正をお願いする次第である。

本稿執筆にあたり、明治大学文学部考古学専攻の先生方にはご指導を賜り、明治大学大学院の方々には多くのご意見をいただいた。また、大学の同期である柏瀬拓巳からも貴重な意見をいただき、文章校正に関しては鎌田ゆりかの手を煩わせた。さらに資料実見に際して以下の諸機関よりご高配を賜った。末筆ながら記して御礼申し上げる。

熊谷市教育委員会、埼玉県教育委員会、埼玉県立さきたま史跡の博物館、深谷市教育委員会、本庄市教育委員会（50 音順）

## 註

1）時期比定については原則各遺跡の報告に準じつつ、須恵器や当該地域に分布が集中する有段口縁坏や比企型坏などの土師器坏（田中 1991、水口 1989）、土師器甕（桜岡 1991・2003）を参照した。また古墳時代後期前半は熊谷市下田町遺跡（赤熊・瀧瀬 2006）、蓮田市荒川附遺跡の土器編年（富田 2007）、古墳時代後期後半については、深谷市下郷遺跡、幡羅遺跡（知久 2012）の編年、奈良・平安時代の須恵器については、渡辺一の論考（渡辺 1990a,b）を参照した。

2）使用した発掘調査報告書は紙数の都合上割愛した。

## 参考文献

赤熊浩一・瀧瀬芳之 2006「Ⅴ　調査のまとめ」赤熊浩一・瀧瀬芳之（編）『下田町遺跡Ⅲ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第 319 集 pp.492-499（公財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団

大川清 1955「カマド小考」『落合』pp.81-86 早稲田大学考古学研究室

柏田有香 2017「古墳時代の土器転用カマド」『洛史　研究紀要』11 号 pp.14-20（公財）京都市埋蔵文化財研究所

加藤隆則 2007「Ⅴ 結語 1. 遺構と遺物の出土状況」鈴木孝之・岩瀬譲・加藤隆則（編）『飯積遺跡Ⅱ』（公財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 334 集 pp.395-405　（公財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団

北野博司・三河風子・小此木真理 2008「東北地方南部における古代の土鍋調理」『東北芸術工科大学　歴史遺産研究』No.4 pp.1-26 東北芸術工科大学

小林正史 2018「総論　古墳時代・古代の米蒸し調理」『物質文化』98 pp.1-19 物質文化研究会

桜岡正信 1991「7 世紀代以降の土師器坏の画期とその要因について」『群馬考古学手帳』Vol.2 pp79-90 群馬土器観会

桜岡正信 2003「武蔵型甕について」『高崎市史研究』17 号 pp.1-16 高崎市

杉井健 1993「竈の地域性とその背景」『考古学研究』第 40 巻第 1 号 pp.33-59 考古学研究会

杉山秀宏ほか 2019『金井東裏遺跡≪古墳時代編≫』（公財）群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告書第 652 集（公財）群馬県埋蔵文化財調査事業団

滝沢規朗 2009「聖籠町山三賀Ⅱ遺跡煮沸具の使用痕跡について」『新潟考古』20 号 pp.129-148 新潟県考古学会

田中広明 1991「古墳時代後期の土器生産と集落への供給」『埼玉考古学論集』pp.635-663（公財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団

知久裕昭 2012「Ⅴ　出土遺物の検討」知久裕昭（編）『幡羅遺跡Ⅷ』pp.21-33 埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第 127 集　深谷市教育委員会

堤隆 1991「住居廃絶時における竈解体をめぐって」『東海史学』25 号 pp.93-114 東海大学史学会

堤隆 1995「竈の廃棄プロセスとその意味」『山梨県考古学協会誌』第 7 号 pp.12-16 山梨県考古学協会

外山政子 1989「群馬県地域の土師器甑について」『研究紀要』6 pp.95-115（公財）群馬県埋蔵文化財調査事業団

外山政子 1991「羽田倉遺跡の煮沸具の観察から」小野和之ほか（編）『長根羽田倉遺跡』（公財）群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告書第 99 集 pp.500-509（公財）群馬県埋蔵文化財調査事業団

外山政子 1992a「三ツ寺Ⅱ遺跡のカマドと煮炊」森田秀策ほか（編）『三ツ寺Ⅱ遺跡』（公財）群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告書第 93 集 pp.173-204（公財）群馬県埋蔵文化財調査事業団

外山政子 1992b「炉からカマドへ　古墳時代の新来の食文化」『助成研究報告』２　pp.87-99 味の素食の文化センター

外山政子 2018「東日本の竈構造と構成要素再考」『物質文化』98 pp.21-40 物質文化研究会

富田一夫 2007「Ⅴ　調査のまとめ」富田一夫（編）『荒川附遺跡Ⅱ』（公財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 338 集 pp.241-256（公財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団

中沢悟 1986「(2) 竈の廃棄について」中沢悟（編）『大原Ⅱ遺跡・村主遺跡』（公財）群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告書第 52 集 pp.251-253（公財）群馬県埋蔵文化財調査事業団

原智之 2001「竈復元の試み」『土壁』5 号 pp.47-60 考古学を楽しむ会

文化庁文化財部記念物課（編）2010『発掘調査のてびき―集落遺跡発掘編―』文化庁文化財部記念物課

水口由紀子 1989「いわゆる比企型坏の再検討」『東京考古』7 号 pp.119-138 東京考古談話会

渡辺一 1990a「第 4 章　成果と問題点」渡辺一（編）『鳩山窯跡群発掘調査報告書』第 2 冊 pp.373-390 鳩山窯跡群遺跡調査会

渡辺一 1990b「南比企窯跡群の須恵器の年代」『埼玉考古』27 号 pp.123-145 埼玉考古学会

# A Study of Built-In Earthen Stoves Adopting Ceramic Pots: With Special Reference to the Archaeological Discoveries in Saitama Prefecture, Northern Neighbor of Tokyo

MATSUMOTO Kōtarō

This paper clarifies various aspects of built-in earthen stoves adopting ceramic pots from the late Kofun period (sixth century, A.D.) to the Heian period (794-1185), discovered in the present Saitama Prefecture. Although Japanese archaeology has a long history of research into stoves, there are few studies on the structure and materials of stoves, especially built-in stoves adopting ceramic pots. Therefore, the author has complied all of their archaeological discoveries in Saitama in order to approach any regional differences, temporal changes, and other aspects.

As a result, the author has found the following:

1. Semi-subterranean residences with built-in earthen stove adopting ceramic pots were spatially skewed toward the northwestern area of the Saitama Prefecture.
2. Built-in earthen stoves adopting ceramic pots appeared in the fifth century, and they reached the peak in the seventh century.
3. The only locally-produced earthenware pots were adopted to the stoves, and no stoneware was used.
4. Ceramic pots were typically adopted to the part close to the fuel holes of the stoves, which suggests that the adoption of the ceramic pots was meant not only to reinforce the stoves but also to increase the opening of air inlet.
5. Semi-subterranean residences with built-in stove adopting ceramic pots were typically larger and more spacious than those without, which suggests that in such large residences foods had to be served to more people, and that the stoves had to be reinforced because of more frequent uses.

**KEYWORDS:**

Ancient eastern Japan (sixth to eleventh century), structure of earthen stove, earthenware jar.

考古学集刊　第 19 号　24-34 頁，　2023 年

**研究ノート**

# 茨城県域における 6・7 世紀土師器の数値的検討ならびに地域性について

小西　竜世

**要旨**

茨城県内における土師器研究は、多数の新たな発掘資料が示されているにもかかわらずいまだ停滞したままである。そこで本論文は 6・7 世紀の土師器様式における地域性などを再検討することを目指した。坏と甕に見られる特質は以下のような特質が認められる。まず、椀型に近い坏の衰退などから県域全体での古墳時代中期的土師器様相からの脱却が認められる。その後、6 世紀に入ると「須恵器模倣坏」を中心とした様式への劇的な転換が生じる。さらに「素縁口縁坏」の出現によって、「須恵器模倣坏」主体の土師器様式からの転換も認められる。甕に着眼すると、いわゆる「常陸型甕」の出現などに認められる 6 世紀以降の明確な地域性の発現などが特徴的である。加えて高坏と甑の分析を行った。高坏からは二つの特質が認められた。すなわち、古墳時代中期の土師器様相から後期における土師器様相への劇的な変化と 7 世紀後半までという長期的な高坏の利用が認められることの 2 点である。甑では「常陸型甕」の技法を取り入れた「常陸型甑」と呼ばれる器種が、「常陸型甕」と同様の分布を示すことがわかった。地域性に関する分析では、長谷川厚による先行研究で示された茨城県域の地域性とそれを示す器種の比較検討を行った。結果として、先行研究における大まかな範囲や器種におけるその妥当性を追認できた、一方、7 世紀における「常陸型甕」の及ぶ範囲などのような、具体的な地域性のありようを再検討することが出来た。

**キーワード**：古墳時代後期　茨城県　土師器　様式論　地域性

## はじめに

茨城県内における 6・7 世紀土師器の研究は、戦後すぐから開始された。当初は特定の遺跡、ないしひとつの遺跡に基づいた研究が中心的であった。

その後、県内各地での開発が進行していったことなどから大規模なものを含めた多数の集落跡で発掘調査が行われた。それに伴い、多数の土師器が出土したことは言うまでもない。これらを活用した研究は 1990 年代にひとつの到達点を示した。

具体的には、県央地域の編年は樫村宣行と浅井哲也による編年（樫村・浅井 1992）と樫村宣行による県南地域に対する編年（樫村 1993）が挙げられる。この 2 つの編年は現在でも県内の土師器編年のスタンダードとして用いられている。

しかし逆説的に言えば、1990 年代以降に開発などの各種事業にともなう発掘調査で発見された資料に基づく検討を行った研究者はほとんどみられないということである。渥美賢吾による近年の分析（渥美 2013）はあるものの、対象としている遺跡において地域の偏りがあるなど、県全域を包括的に再考察したものとは言いがたい。

そこで、本論文では茨城県全域の土師器様式を、近年の発掘調査で発見された一括遺物などを伴う遺構により再検討するものである。今回はとくに高坏および甑に対する詳細な検討を行い、筆者が推定する坏と甕による茨城県内の地域性と比較検討を行っていくものである。

## Ⅰ. 研究史

### （1）茨城県内の編年研究のあゆみ

茨城県内における 6・7 世紀の土師器に関する研究の嚆矢となったのは、伊東重敏による鬼高式土器の紹介である（伊東 1954）。そこでは勝田市（現在のひたちなか市）市毛遺跡などに基づくⅠ期とⅡ期からなる簡易的な編年を示した。

その後も各研究者による研究は継続していった。伊東重敏が現在での古墳時代中期後葉から後期初頭の土師器に関する考察を呈示した（伊東 1971）。海老沢稔と黒沢彰哉による「茨城県内出土土師器の検討」のうち、海老沢稔による「茨城県内出土土器の検討（1）鬼高・真間期における茨城県内出土土師器編年試論」では県内の総合的な編年案をはじめて示した（海老沢 1980）。さらに続いて黒沢彰哉により土師器坏に限定したより詳細な編年案が示された（黒沢 1986）。

1990 年代に入ると先述したように現行の標準的な編年である樫村宣行と浅井哲也による県央地区の鬼高式土器編年（樫村・浅井 1992）と樫村宣行による県南地区の編年（樫村 1993）が提示された。

### （2）集落遺跡の発見と編年

県内では多数の集落遺跡が発見されており、とくに大規模な集落遺跡では独自の編年案が示されることがある。これらは編年そのものの研究に援用される事が多い。

水戸市やひたちなか市などが含まれる県央地域においては、早くは那珂市森戸遺跡の調査に基づく編年案（加藤・西野・浅井 1990）が示されている。これはおもに古墳時代全般の土師器編年になっており、先に述べたいくつかの編年に、一括性の高い遺構と共に取り入れられている。その後、ひたちなか市武田遺跡群での土師器編年案（鈴木・佐々木・稲田・長沼 2010）なども示されている。

土浦市や石岡市、つくば市を含む県南地域では、とくにつくば市島名熊の山遺跡における遺跡編年案が代表的である（稲田 2003）。この編年案は18期区分から構成されており、およそ3期から5期が古墳時代後期に該当する。

### （3）近年の動向

近年の茨城県内の6・7世紀土師器に関する研究は、ほとんど渥美賢吾によるものである。特に7世紀に焦点を絞った分析と考察（渥美 2013）では、多様な器種のなかでも先行研究と同様に坏に着目し、律令期と古墳時代の揺れ動く中央政権に影響された「新型坏」の影響なども考察している。

ただしここで注意すべき点として、この論文で用いられている対象遺跡の中心が県南地域であることが挙げられる。すなわち、県全域を網羅したうえでの考察として扱うには資料の網羅が不徹底であるということである。

### （4）まとめ

ここまでをまとめると、編年そのものの研究は20世紀のうちに進行した研究に基づいており、そこに現在までの主要な集落遺跡などの編年案が組み合わされて用いられていることがわかる。2000年代以降の研究は、ほとんど渥美賢吾によるものであり、それも県全域を包摂するものとしては不十分さが否めないのが現状である。すなわち、県全域をまとめた再検討を実施する必要があるということである。

## Ⅱ. 坏と甕による地域性について

### （1）本論文における地域設定などについて

本論文では茨城県域をいくつかの地域に区分したうえで分析を行っている。ここでの区分は現行の行政区分に基づくものである。北から県北地域（日立市や常陸太田市、常陸大宮市など）、県央地域（水戸市やひたちなか市など）、鹿行地域（鹿嶋市や行方市など）、県南地域（石岡市や土浦市、つくば市など）県西地域（桜川市や筑西市など）となっている。

対象時期は古墳時代中期から後期とし、5世紀末葉から7世紀末までを対象とした。収集した遺跡は県全域の集落遺跡であり、合計40カ所となっている。

時期区分については、以下の通りとなっている。1期は中期末葉に該当し、TK73型式からTK208型式期にあたる。2期は5世紀後葉・末葉に該当し、TK23・TK47型式期にあたる。3期はおよそ6世紀前半に該当し、MT15型式からTK10古相段階期にあたる。4期は6世紀後半に該当し、TK10新相段階からTK43型式期にあたる。5期は7世紀前半に該当し、TK209型式からTK217型式古相期にあたる。6期は7世紀後半に該当し、飛鳥編年Ⅲ期からⅤ期にあたる。

### （2）坏と甕の器種分類や編年

**器種分類**

坏と甕の器種分類は以下の通りである。坏では、おもに5つの形式に分けられる。坏A形式は、古墳時代中期、いわゆる和泉式期から継続する椀型の坏である。古墳時代後期には、須恵器蓋坏を模倣した形態の坏があらわれる。そのうち、須恵器坏蓋を模倣したものを坏B形式とした。坏B形式の変化した器種として、口縁部が著しく外反したものがある。これを坏C形式(とする。須恵器坏身を模倣し器種については、坏D形式と呼称する。これ以外に、口縁部が直立して口縁部と体部の境に稜などがない器種もある。これを坏E形式からK形式とする。B・C・D形式では模倣の程度が変容するため型式を設定した。

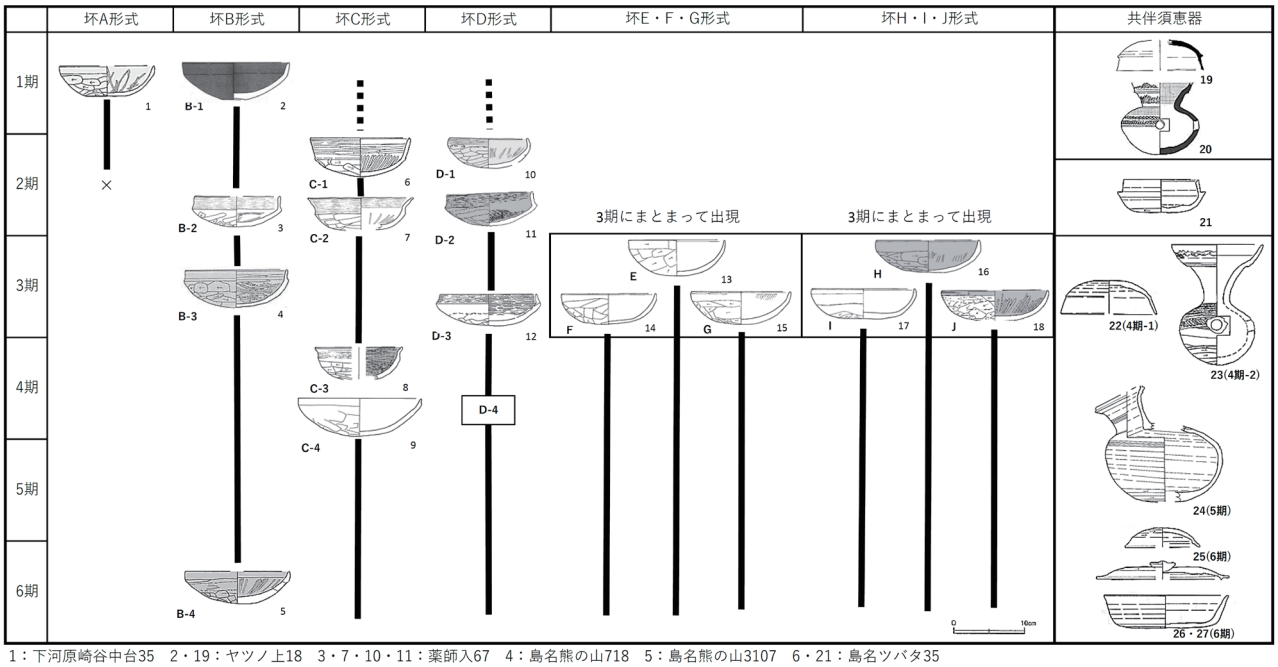
甕では、A形式からN形式を設定した。このうち、甕D・E・F形式は茨城県域で見つかる特徴的な甕である。これらは胴部下半へラミガキと口縁端部の上方摘み上げが特質であり、先行研究（樫村 1998）に基づき「常陸型甕」と呼称する。甕A形式からC形式、甕H形式と甕I形式については長胴化の傾向があり、これに基づいて2型式を設定する。

**編年（図1・2）**

坏と甕については先述の5地域すべてで集成を行った。そのうえでの型式変化と組成を検討に基づく編年については別稿を投稿中である。今回は、その続編として器種の地域性を論じ、高坏・甑を編年する。そのため、時間軸となる坏・甕の県南地域編年のみを呈示するが、その実証過程は別稿を参照いただきたい。

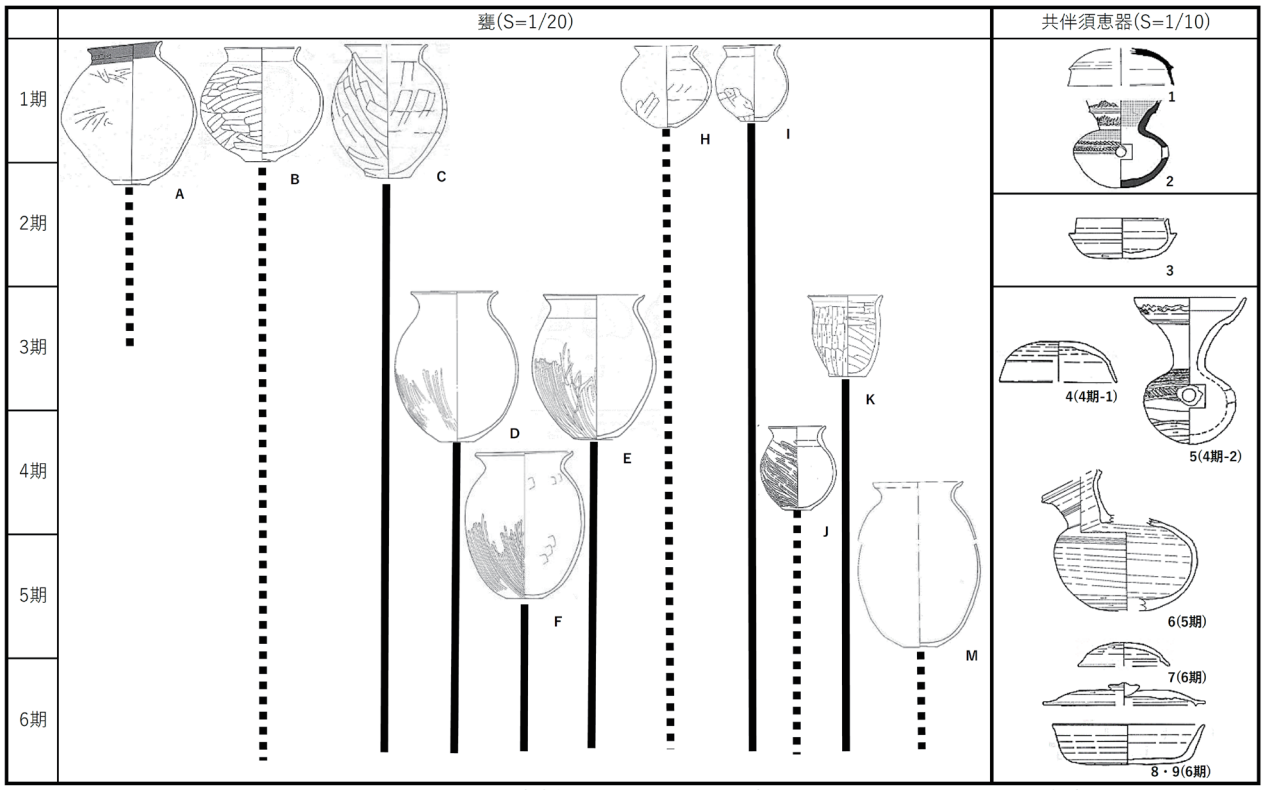
### （3）坏にみられる地域性（図3）

古墳時代後期の土師器坏に関する大きな画期はおもに3つ挙げられる。一つ目は古墳時代中期的に主体的な形態の坏A形式に後期に特徴的な形態の坏B・C・D形




1：下河原崎谷中台35　2・19：ヤツノ上18　3・7・10・11：薬師入67　4：島名熊の山718　5：島名熊の山3107　6・21：島名ツバタ35
8・23：島名熊の山2681　9：島名熊の山3122　12：石橋南12　13~15：平北田29　16~18：島名熊の山2918
20：ヤツノ上28　22：島名熊の山1596　24：島名熊の山2351　27：上野陣場69　28・29：上野陣場93

**図 1. 県南地域における坏の編年（筆者作成）**




A・I・2：ヤツノ上28　B・C：下小池47　D：平北田29　E：島名熊の山1445A　F：上野陣場111　H・1：ヤツノ上18　J：石橋南12
K：島名熊の山2918　M：柴崎Ⅰ区63　3：島名ツバタ35　4：島名熊の山1596　5：：島名熊の山2681　6：島名熊の山2351　7：上野陣場69
8・9：上野陣場93

**図 2. 県南地域における甕の編年（筆者作成）**

式が加わることである。関東地方における中期の土師器様式において、主要な坏の形態は図中における「和泉式系坏」であった。これは椀に近い高い器高を有することが特徴である。この器種と共に古墳時代後期初頭になると、いわゆる「須恵器模倣系坏」と呼ばれる器種が加わる。これは須恵器坏蓋および坏身の形態を模倣した坏である。種類としては忠実な坏蓋模倣である「須恵器坏蓋模倣坏」、坏蓋模倣の一種と考えられるが口縁部が著しく外反する「外反口縁坏」、忠実な坏身模倣である「須恵器坏身模倣坏」である。これらが併存関係を示すことが、最初の画期となっている。

二つ目は、須恵器模倣坏の台頭である。6 世紀に入ると「和泉式系坏」の坏に占める割合はほぼなくなり、代わって「須恵器模倣系坏」が主流になる。ただし、県央地域と鹿行地域においては、6 世紀前半頃ではやや「和泉式系坏」の割合が大きい。このように地域差が少しずつ生じてくることも特徴的である。

三つ目は「素縁口縁坏」の出現による新しい土器様式の成立である（図 4）。6 世紀後半頃から、口縁部に調整や特徴的な形態をもたないシンプルな坏が出現してくる。これは千葉県域などでも出土しており、「素縁口縁坏」と呼称されていることがある（高橋・宇田・小倉・松田 1999）。このような土師器坏が出現し、「須恵器模倣坏」と併存していくことが三つ目の画期である。7 世紀以降は県域全体へと分布するが、とくに県南地域で「素縁口縁坏」の割合が増加していく。これは古墳時代後期の特徴的な「須恵器模倣坏」主体の土師器坏様式からの転換として考えられる。

### （4）甕にみられる地域性（図 3）

土師器甕においては、土師器坏よりもさらに顕著な地域性を見て取ることができる。

6 世紀前半頃になると、甕 D・E・F 形式であるいわゆる「常陸型甕」が出現してくる。「常陸型甕」とは、樫村宣行（樫村 1998）や佐々木義則（佐々木 2007）、中村哲也（中村 2003）によるとおもに口縁部の端を上方に摘み上げることや体部下半にヘラミガキを施すこと、底部木葉痕を持つことが特徴的な甕である。

古墳時代の「常陸型甕」はこの特徴を形成していく段階の祖型ともいえるものとなっている。古墳時代における「常陸型甕」の祖型は、底部木葉痕は無く、少数であるが底部をヘラケズリやヘラミガキを施すことがある。体部下半のヘラミガキは上半にかかる場合もある。

このような「常陸型甕」の祖型は県南地域で 6 世紀前半頃に出現し、7 世紀までに主体的な甕として用いられる。この現象は鹿行地域にも及び、6 世紀前半から出現して 7 世紀になっても用いられる。

6・7 世紀における「常陸型甕」の分布は県南地域と鹿行地域にのみ分布している。このように、「常陸型甕」の分布から地域性を見て取ることが出来る。

## Ⅲ . 高坏・甑の検討

### （1）器種分類と編年について（図 5・6、表 1・2）

本項では高坏と甑を分析していき、前項の地域性と比較検討をしていく。まず、高坏と甑の器種分類を行った。

高坏は A 形式から M 形式の 13 形式を設定した。重

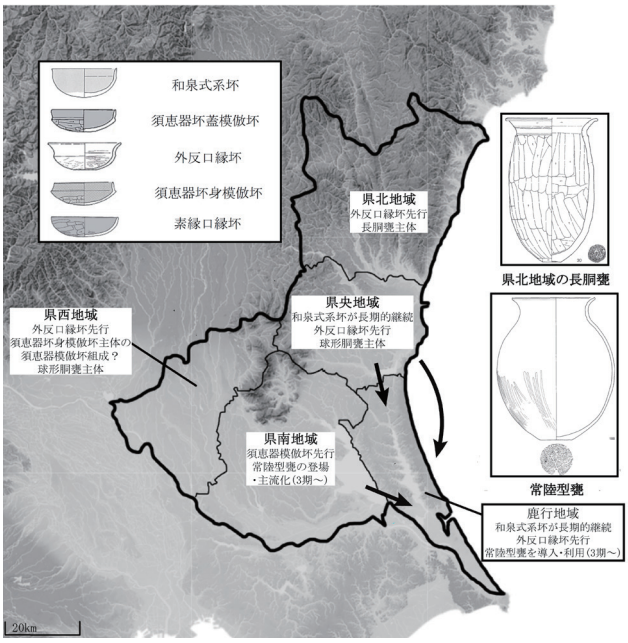



図 3. 土師器坏・土師器甕における地域性（筆者作成）

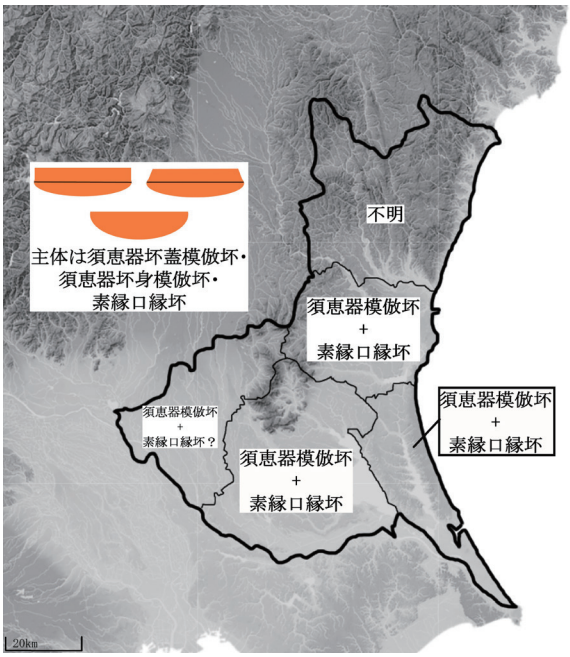



図 4. 7 世紀における土師器坏の様相（筆者作成）

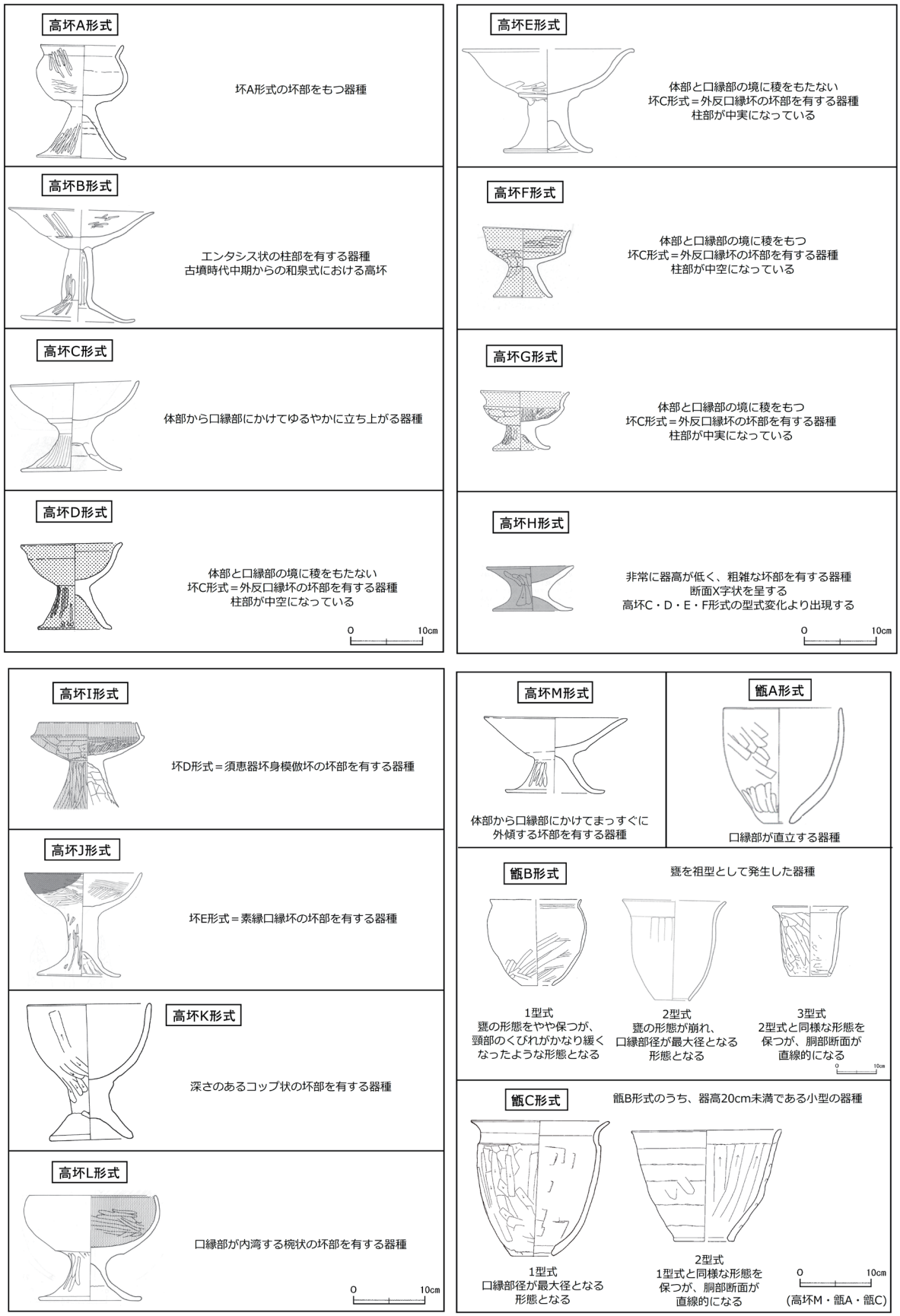



図 5. 高坏の器種分類表①（筆者作成）

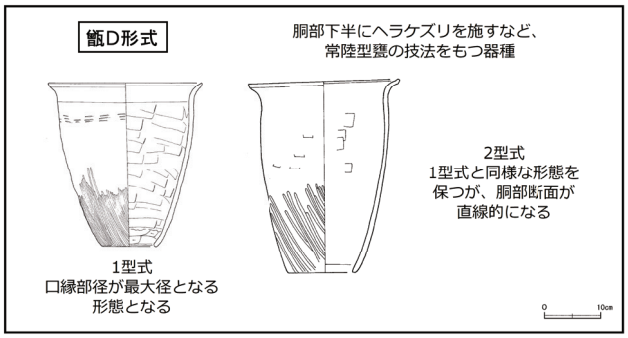



図 6. 高坏の器種分類表②および甑の器種分類表①（筆者作成）

表 1. 高坏の器種別消長表（筆者作成）

県央地域

| | 遺跡・遺構名 | A | B | C | D | E | F | G | H | I | J | K | L | M | 共伴須恵器 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1期 | 三反田下高井遺跡第69号住居跡 | | 1 | | | | | | | | | | | | | |
| 1期 | 三反田下高井遺跡第192号住居跡 | 1 | 2 | | | | | | | | | | | | | |
| 1期 | 森戸遺跡第91号住居跡 | 2 | | | | | | | | | | | | | | |
| 1期 | 三反田下高井遺跡第165号住居跡 | 2 | | | | | | | | | | | 1 | 1 | | |
| 2期 | 山崎遺跡第3号住居跡 | | | | | | 1 | 1 | | | | | | | | |
| 2期 | 森戸遺跡第47号住居跡 | | | | | | 1 | | | | | | | | | |
| 2期 | 山崎遺跡第7号住居跡 | | | | | | 1 | 2 | | | | | | | | |
| 3期 | 山崎遺跡第33号住居跡 | | | | | 1 | | | | | | | | | | |
| 3期 | 三反田下高井遺跡第50号住居跡 | | | | 2 | | | 1 | | | | 1 | | | | |
| 3期 | 大戸下郷遺跡第56号住居跡 | | | | 1 | | | 1 | | | | | | | | |
| 3期 | 三反田下高井遺跡第51号住居跡 | | | | | | | | | | | | | 1 | | |
| 3期 | 森戸遺跡第56号住居跡 | | 1 | | | | 4 | 1 | | | | | 1 | | | |
| 3期 | 三反田下高井遺跡第176号住居跡 | | | | | | | 1 | | | | | | | | |
| 4期 | 半分山遺跡第66号住居跡 | | | | | | 2 | | | | | | | | | |
| 4期 | 森戸遺跡第103号住居跡 | | | | | | | 1 | | | | | | | | |
| 4期 | 大戸下郷遺跡第65号住居跡 | 1 | | | | | | | | | | | | | | |
| 5期 | 三反田下高井遺跡第66号住居跡 | | | | | | 1 | | | | | | | | | |
| 5期 | 森戸遺跡第64号住居跡 | | | | 1 | | | | | | | | | | | |
| 6期 | 武田石高遺跡第107号住居跡 | | | | | | 1 | | | | | | | | 飛鳥Ⅱ～Ⅲ | 有段口縁坏の坏部(7) |

鹿行地域

| | 遺跡・遺構名 | A | B | C | D | E | F | G | H | I | J | K | L | M | 共伴須恵器 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1期 | 西平遺跡第13号住居跡 | | | | 1 | | 1 | | | | | | | | TK216 | |
| 2期 | 炭焼遺跡第3号住居跡 | | | | | | 1 | | | | | | | | | |
| 3期 | カマ田川波遺跡第6号住居跡 | | | | | | 1 | | | | | | | | | |
| 3期 | カマ田川波遺跡第9号住居跡 | | | | | 1 | | 1 | | | | | | | MT15 | |
| 3期 | 木工台遺跡第235号住居跡 | | | | | | | | | | | | 1 | | | |
| 5期 | 炭焼遺跡第14号住居跡 | | | | | | | | | 1 | | | | | 不明 | |
| 5期 | 西平遺跡第69号住居跡 | | | | | | | | 3 | | | | | | | |

県西地域

| | 遺跡・遺構名 | A | B | C | D | E | F | G | H | I | J | K | L | M | 共伴須恵器 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 3期 | 辰海道遺跡第248号住居跡 | | | | | 3 | | | | | | | | | | |
| 6期 | 犬田神社前遺跡第205号住居跡 | | | | | | 2 | | | 1 | | | | | 飛鳥Ⅲ～Ⅳ | |

県南地域

| | 遺跡・遺構名 | A | B | C | D | E | F | G | H | I | J | K | L | M | 共伴須恵器 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1期 | 下河原崎谷中台遺跡第55号住居跡 | | 2 | | | | | | | | | | | | TK216 | |
| 1期 | 下小池遺跡第47号住居跡 | | | 1 | | | | | | | | | | | | |
| 1期 | 塚本遺跡第2号住居跡 | | 1 | | | | | | | | | | | | TK208 | |
| 3期 | 島名熊の山遺跡第1445A号住居跡 | | | | | | 2 | | | | | | | | | |
| 3期 | 島名熊の山遺跡第2340号住居跡 | | | | | | 1 | | | | | | | | | |
| 4期 | 上野陣場遺跡第111号住居跡 | | | | | | 5 | | | | | | | | | |
| 4期 | 上野陣場遺跡第77号住居跡 | | | | | | 4 | | | | | | | | | |
| 4期 | 上野陣場遺跡第172号住居跡 | | | | | | 3 | | | | | | | | | |
| 4期 | 島名熊の山遺跡第281号住居跡 | | | | 2 | | 4 | | | | | | | | | |
| 4期 | 島名八幡前遺跡第70号住居跡 | | | | 1 | | 4 | 1 | | | | | | | | |
| 4期 | 島名熊の山遺跡第3122号住居跡 | | | | | | 1 | | | | | | | | | |
| 5期 | 柴崎遺跡Ⅰ区第63号住居跡 | | | | 1 | | | | | | | | | | | |
| 5期 | 上野陣場遺跡第25号住居跡 | | | | | | | | 6 | | | | | | | |
| 5期 | 島名熊の山遺跡第510号住居跡 | | | | | 1 | | | | | | | | | | |
| 5期 | 島名熊の山遺跡第2323号住居跡 | | | | | | 1 | | | | | | | | | |
| 6期 | 島名熊の山遺跡第3107号住居跡 | | | | | | 1 | | | | | | | | | |
| 6期 | 上野陣場遺跡第177号住居跡 | | | | | | | | 1 | | | | 1 | | | |

**表 2. 甑の器種別消長表（筆者作成）**

県央地域

| | 遺跡・遺構名 | A | B-1 | B-2 | B-3 | C-1 | C-2 | D-1 | D-2 | 共伴須恵器 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1期 | 下土師東遺跡第21号住居跡 | | 1 | | | | | | | TK73 | |
| 1期 | 下土師東遺跡第23号住居跡 | | 1 | | | | | | | | |
| 1期 | 武田西塙遺跡第77号住居跡 | | 1 | | | | | | | TK208 | 二孔式 |
| 1期 | 森戸遺跡第91号住居跡 | 1 | | | | | | | | | |
| 2期 | 半分山遺跡第20号住居跡 | | | 1 | | | | | | | |
| 2期 | 山崎遺跡第3号住居跡 | | | 1 | | | | | | | |
| 2期 | 森戸遺跡第47号住居跡 | | | 1 | | | | | | | |
| 2期 | 武田西塙遺跡第97A号住居跡 | 1 | 1 | | | | | | | TK47 | |
| 2期 | 半分山遺跡第61号住居跡 | | | 1 | | | | | | TK47 | |
| 2期 | 森戸遺跡第105号住居跡 | 2 | | | | | | | | TK47 | 把手付(7) |
| 2期 | 山崎遺跡第7号住居跡 | | | 2 | | | | | | | 胴部下端に穿孔(18) |
| 2期 | 山崎遺跡第18号住居跡 | | 1 | | | | | | | TK23~TK47 | |
| 3期 | 三反田下高井遺跡第96号住居跡 | | | 1 | | | | | | TK10 | B-3?, 二孔式(11) |
| 3期 | 森戸遺跡第56号住居跡 | 2 | | | | | | | | | |
| 3期 | 半分山遺跡第19号住居跡 | | | 1 | | | | | | | |
| 3期 | 三反田下高井遺跡第176号住居跡 | | | 2 | | | | | | | 二孔式(24), 把手付(25) |
| 3期 | 船窪遺跡第10B号住居跡 | | | 2 | | | | | | | |
| 4期 | 半分山遺跡第66号住居跡 | | | 2 | | | | | | | |
| 5期 | 武田西塙遺跡第51号住居跡 | | | 1 | | | | | | TK43~TK209 | |
| 5期 | 武田石高遺跡第4号住居跡 | | | 1 | | | | | | | |
| 5期 | 武田石高遺跡第45号住居跡 | | | 1 | | | | | | | |
| 5期 | 武田石高遺跡第76号住居跡 | | | 1 | | | | | | TK217 | |
| 5期 | 武田石高遺跡第14号住居跡 | | | | 2 | | | | | | |
| 6期 | 武田石高遺跡第107号住居跡 | | | 1 | | | | | | 飛鳥Ⅱ～Ⅲ | |
| 6期 | 大戸下郷遺跡第43号住居跡 | | | 1 | | | | | | | |

鹿行地域

| | 遺跡・遺構名 | A | B-1 | B-2 | B-3 | C-1 | C-2 | D-1 | D-2 | 共伴須恵器 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 3期 | カマ田川波遺跡第6号住居跡 | | | 1 | | | | | | | |
| 3期 | 木工台遺跡第158号住居跡 | | | 2 | | | | | | | |
| 3期 | 木工台遺跡第208号住居跡 | | | 3 | | | | | | | |
| 4期 | 西平遺跡第11号住居跡 | | | 1 | | | | | | | |
| 4期 | 炭焼遺跡第6号住居跡 | | | 1 | | | | | | | |
| 4期 | 炭焼遺跡第23号住居跡 | | | 2 | | | | | | | |
| 6期 | 木工台遺跡第216号住居跡 | | | 1 | 1 | | | | | 飛鳥Ⅳ～Ⅴ | |
| 6期 | 木工台遺跡第133号住居跡 | | | | | | 1 | | | 飛鳥Ⅳ～Ⅴ | |

県西地域

| | 遺跡・遺構名 | A | B-1 | B-2 | B-3 | C-1 | C-2 | D-1 | D-2 | 共伴須恵器 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 2期 | 犬田神社前遺跡第110号住居跡 | 1 | | | | | | | | | |
| 2期 | 辰海道遺跡第143号住居跡 | | | 1 | | | | | | | |
| 2期 | 辰海道遺跡第666号住居跡 | | | 1 | | | | | | | |
| 3期 | 辰海道遺跡第248号住居跡 | | | 1 | | | | | | | |
| 3期 | 犬田神社前遺跡第117号住居跡 | | | 1 | | | | | | | |

県南地域

| | 遺跡・遺構名 | A | B-1 | B-2 | B-3 | C-1 | C-2 | D-1 | D-2 | 共伴須恵器 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1期 | 下小池遺跡第47号住居跡 | 1 | | | | | | | | | |
| 1期 | 塚本遺跡第2号住居跡 | | 1 | | | | | | | TK208 | |
| 1期 | ヤツノ上遺跡第29号住居跡 | | | | | | | | | | |
| 2期 | 石橋南遺跡第7号住居跡 | 1 | | 1 | | 1 | | | | | |
| 2期 | 石橋南遺跡第1号住居跡 | 1 | | | | | | | | | 把手付(19) |
| 3期 | 薬師後遺跡第48号住居跡 | | | 1 | | | 1 | | | | |
| 3期 | 平北田遺跡第29号住居跡 | | | 1 | | 1 | | | | | 多孔式(190) |
| 3期 | 島名熊の山遺跡第718号住居跡 | | | 1 | | | | | | | |
| 3期 | 石橋南遺跡第5号住居跡 | | | 2 | | | | | | | 把手付(24) |
| 3期 | 石橋南遺跡第16号住居跡 | | | 1 | | | | | | | |
| 3期 | 島名熊の山遺跡第2838号住居跡 | | | 1 | | | | | | | |
| 3期 | 島名熊の山遺跡第1445A号住居跡 | | | 2 | | | | | | | |
| 3期 | 島名熊の山遺跡第2340号住居跡 | | | | | 1 | | 1 | | | |
| 3期 | 石橋南遺跡第10号住居跡 | | | | | | | 1 | | | |
| 4期 | 石橋南遺跡第12号住居跡 | | | 2 | | | | | | | 把手付(24) |
| 4期 | 石橋南遺跡第14号住居跡 | | | 1 | | | | | | | |
| 4期 | 上野陣場遺跡第111号住居跡 | | | | | | | 1 | | | |
| 4期 | 上野陣場遺跡第172号住居跡 | | | 1 | | | | | | | |
| 4期 | 島名熊の山遺跡第281号住居跡 | | | 1 | | | | | | | |
| 4期 | 島名八幡前遺跡第70号住居跡 | | | 1 | | | | | | | |
| 4期 | 島名八幡前遺跡第96号住居跡 | | | | | | | 1 | | | |
| 4期 | 平北田遺跡第3号住居跡 | | | 1 | | | | | | | |
| 4期 | 平北田遺跡第18号住居跡 | | | 2 | | | | | | | |
| 4期 | 西ノ原遺跡第9号住居跡 | | | 1 | | | | | | | |
| 4期 | 島名熊の山遺跡第2681号住居跡 | | | | | | | 2 | | TK43 | |
| 4期 | 島名熊の山遺跡第3122号住居跡 | | | 1 | | | | | | | 内面黒彩(90) |
| 4期 | 薬師後遺跡第65号住居跡 | 1 | | | | | | | | | |
| 4期 | 前田村遺跡第514号住居跡 | | | 1 | | | | | | TK43 | |
| 4期 | 前田村遺跡第525号住居跡 | | | | | | | 1 | | | |
| 5期 | 上野陣場遺跡第25号住居跡 | | | | | | | | 1 | | |
| 5期 | 島名熊の山遺跡第2351号住居跡 | | | | | | | 2 | | 飛鳥Ⅰ～Ⅱ | |
| 5期 | 反子遺跡第5号住居跡 | | | | | | | 1 | 1 | | |
| 5期 | 弁才天遺跡第19号住居跡 | | | | | | | 1 | | | |
| 5期 | 島名熊の山遺跡第2323号住居跡 | | | 2 | | | | 1 | | | |
| 6期 | 島名熊の山遺跡第3107号住居跡 | | | 1 | | | | | | | |
| 6期 | 上野陣場遺跡第143号住居跡 | | | | | 1 | | | 1 | | |
| 6期 | 弁才天遺跡第7号住居跡 | | | 1 | | | | | | | |
| 6期 | 島名熊の山遺跡第2975号住居跡 | | | | | 1 | | 1 | | | |

要な器種は高坏 B 形式、高坏 D 形式から高坏 G 形式および高坏 H 形式である。高坏 B 形式は、古墳時代中期から存在する高坏であり、柱部がエンタシス状に中膨らみして大きな坏部を有する器種である。高坏 D 形式から高坏 G 形式は坏部が外反口縁坏になっており、脚部がラッパ状に開く。その中でも、体部と口縁部の境にある稜の有無、柱部の内部での胎土の有無などで区分した。高坏 H 形式は非常に器高の低い粗雑な形態の高坏である。

甑は A 形式から D 形式までの 4 形式を設定した。注目すべき形式は甑 B 形式と甑 D 形式である。甑 B 形式は甕を祖型として発生した器種である。これは甕の形態をやや保った 1 型式は、2 型式になると甕の形態を保たず口縁部径が最大径になるものである。3 型式では胴部断面が直線的になる。甑 D 形式は、先述の「常陸型甕」の技法（口縁端部の摘み上げ、胴部下半へラミガキ）を取り入れた形式である。

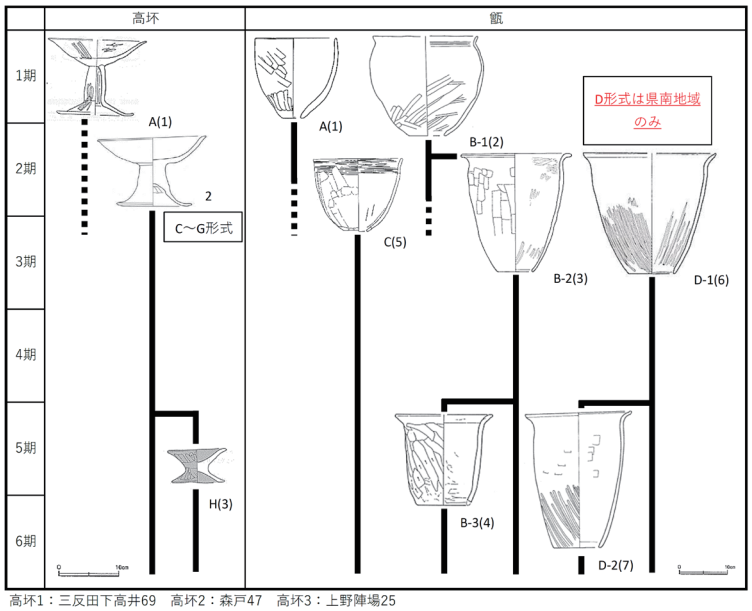
その後、器種別に消長を追跡し（表 1・2）、それに基づき編年表（図 7）を作成した。

なお、以下に示す高坏および甑の性質は一部特定地域の傾向などに基づく試論的な分析があり、今後対象資料を増やし再検証すべきである点を留意すべきである。

## （2）高坏・甑の性質

### 高坏の性質

高坏の消長からみてとれる特質は、おもに三つである。一つ目は、高坏 B 形式から高坏 D 形式から高坏 G 形式のような「外反口縁坏」状の坏部を有するラッパ状脚部をもつ器種（以下、「外反口縁坏タイプ」と呼称）への変化である。これは表中での数値としては、県央地域での分析のみで読み取れることではある。しかし、県央地域での鬼高式期の編年（樫村・浅井 1992）や県南地域での編年（樫村 1993）でも、鬼高式期直前に高坏 B 形式と同様な高坏が認められている。ここから、筆者としてはおそらく県全域でも同様であると考える。中期末葉頃に存在した高坏 B 形式は、後期になるとすぐさま「外反口縁坏タイプ」へと一斉に変化していく。ただし、柱部の構造や坏部の詳細な構造での地域差は認められなかった。このため、高坏 D 形式から高坏 G 形式はいずれも「外反口縁坏タイプ」の中のバリエーションであると考える。




高坏1：三反田下高井69　高坏2：森戸47　高坏3：上野陣場25
甑1：森戸91　甑2・8：下土師東21　甑3：平北田29　甑4：武田石高14　甑5：石橋南7

**図7．高坏と甑の編年（筆者作成）**

二つ目の変化は、「外反口縁坏タイプ」や高坏I形式を含む「須恵器模倣坏」状坏部の高坏（以下、「須恵器模倣坏タイプ」と呼称）の多様性と隆盛である。一つ目の変化以降、6世紀に入るころには「外反口縁坏タイプ」を主体としつつ、「須恵器模倣坏タイプ」と言えるようなさまざまな高坏の器種が出そろう。

三つ目は高坏の7世紀における存続である。このことは、茨城県域における土師器様式のひとつの特異性として考えられる。消長表から見て取れるように、7世紀に入っても少数ではあるものの高坏が認められる。注目すべき器種として、高坏H形式が挙げられる。粗雑で器高が非常に低いこの器種は、先行研究などから典型的な高坏の型式変化の結果生じた器種であると考えられる。新しいものでは一括遺物から7世紀後半と考えられる遺構でも出土しており、長期的な高坏の利用を見てとることができる。

**甑の性質**

甑における分析では、基本的に以下のような変遷が考えられる。初元的な甑である甑A形式は、既に中期から存在している。その後、甕型の甑である甑B形式が出現し、主な甑として用いられるようになる。甕の形態が徐々に型式変化した結果甑B形式2型式へと変化し、とくにこれが主体的な甑として用いられるようになる。

「常陸型甕」の技法を取り入れた甑D形式（以下、「常陸型甑」）は、分析の結果、県南地域のみで認められる器種であることがわかった。先述の「常陸型甕」における地域性を追認するような結果であり、6・7世紀における「常陸型甑」の利用は県南地域の特徴であると考えられる。

県南地域の「常陸型甑」の利用については、樫村宣行によると8世紀初頭まで継続するとしている（樫村 1998）。「常陸型甑」の動向として、「常陸型甕」の出現と同時に出現し、7世紀前半には主体的な甑として用いられる。その後8世紀初頭まで用いられた。この先行研究からは時期と形式ごとの割合での整合性があり、検証の妥当性は高いと言える。

## Ⅳ. 地域性に関する先行研究との比較検討

### （1）関東の土師器様式の地域性に関する先行研究

関東地方における6・7世紀の土師器様式に関する研究でとくに注目すべきものは、長谷川厚によるものである（長谷川 1995a・b）。長谷川は、とくに土師器坏と土師器甕の形態や整形技法を詳細に分析し、都県やその中の諸地域ごとに地域性を区分した。

長谷川による地域性の要点は以下の通りである（図8）。土師器坏では、関東全域で須恵器模倣坏が分布している。その中でも、須恵器坏蓋模倣坏は南関東や上総地域、上毛野地域にて主体的である。一方、須恵器も坏身模倣坏は下野や常陸、下総に主体がある。そのほか、武蔵地域の比企型杯や上毛野地域の後田型杯などでさらに詳細な地域性を読み取れる。土師器甕では、基本的にケズリ調整を施す長胴甕が用いられている。その中でもさらに調整技法の方法などでさらなる細分を可能としている。一方、神奈川県西部などではハケメ調整を施す甕が地域性を示している。つまり、ケズリ調整を施す土師器甕が主体的な地域とハケメ調整を施す土師器甕が主体的な地域とに分けられるとしている。

このほか、武蔵地域を起点とした鶴間正昭による律令体制成立期における土師器様式の研究（鶴間 2001）も挙げられるが、本稿では時期や関東地域全域に対する評価を重点とするため、長谷川による分析を基礎とする。

### （2）茨城県域の地域性と比較検討

**本論文で示した茨城県域の地域性**

前項までの考察に基づくと、茨城県域の地域性についてはこのように言える。土師器坏では「須恵器模倣系坏」を主体としつつ、6世紀に入ると「素縁口縁坏」が坏様式に含まれてくる。土師器甕では、卵殻型のやや丸い甕を用いる。その中で6世紀になると県南地域や鹿行地域では「常陸型甕」を用いており、県域内部でもさらに細かな地域性が出現してくる。高坏は県域全体で同じよう

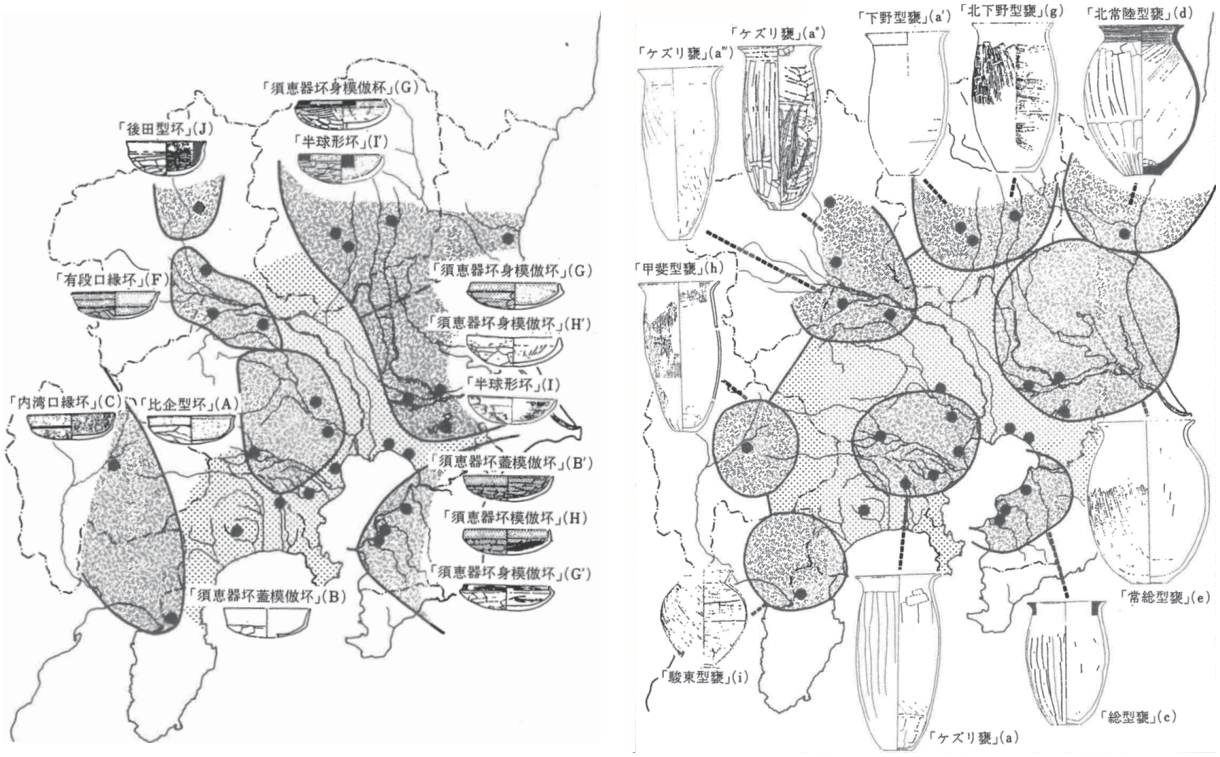



図 8. 長谷川厚による土師器坏および土師器甕の地域性（長谷川 1995a）

に後期独自の「須恵器模倣坏タイプ」が主体的に用いられ、粗雑で小型のものも出現しながら 7 世紀にも存続する。

### 長谷川厚による地域性との比較検討

長谷川が示した茨城県域の地域性は、3 種類の土師器坏と 2 種類の土師器甕によって示される。土師器坏は、基本的には須恵器坏身模倣坏となっている。それに加えて、「坏蓋模倣か坏身模倣か判断に迷う形態の坏」と「半球形の坏」（長谷川 1995a）が挙げられており、これら茨城県域の特徴的な土師器坏としている。

土師器甕における地域性については、長谷川は県の北部に分布する「北常陸型甕」と県の南部に分布する「常陸型甕」を挙げており、南北の地域性をこれらで分類できるとしている（長谷川 1995a）。

本論文で示した地域性との比較をすると、以下のように述べられる。茨城県域では須恵器坏身模倣坏が主体的であるとしているが、これは今後の考察すべき点である。「坏蓋模倣か坏身模倣か判断に迷う形態の坏」は、長谷川の分析した対象が 7 世紀の資料であることや先述の様々な編年案（樫村・浅井 1992 など）などから、須恵器模倣坏の型式変化の結果生じた器種であると考えられる。「半球形の坏」については、長谷川論文中の図版から本論文における「素縁口縁坏」と同様であると判断した。先述の通り、「素縁口縁坏」は 6 世紀後半頃から出現して 7 世紀には県全体に分布している。つまり、長谷川の示した分布と整合性があると言える。

土師器甕では、とくに「常陸型甕」について調整技法と分布の比較検討を行う。調整技法については、常陸型甕の代表的な調整技法である胴部下半ヘラミガキが重要となる。茨城県域は、長谷川厚が示したケズリ調整を施す土師器甕が主体的なグループに属する。一見、胴部ヘラケズリと胴部下半ヘラミガキは異なる調整技法として捉えられる。しかし、樫村宣行は胴部下半ヘラミガキの由来を須恵器甕に施される胴部ヘラケズリが由来であるとする分析（樫村 1998）を考えると、根本的にはヘラケズリの亜種として考えることが出来るのである。ここから、「常陸型甕」は長谷川厚が示したケズリ調整を施す土師器甕が主体的な地域として、妥当だと言えるのである。分布については、長谷川が示した分布図では県央地域や県西地域も含まれている。しかしⅢ章で示したように、6・7 世紀における「常陸型甕」の分布は県南地域および鹿行地域に限定されている。このことは佐々木義則による「常陸型甕」の分析（佐々木 2007）でも、同様の結果が示されている。すなわち、長谷川厚が示した分布に修正を加えることが出来るのである。「北常陸型甕」については、現状筆者が集成した遺跡および遺構のうち、県北地域などの資料が乏しいため、今後この地域の資料をさらに蓄積したうえで分析を行いたいと考えている。

## おわりに

本論文では、現在までにまとめられた発掘資料などのデータから、茨城県域における 6・7 世紀土師器様式の地域性をあらためて検討した。その結果、先行研究に対する追認と批判、さらにはこれまで示されていなかった独自の地域性の確認が出来た。あらたに考えられた地域性としては、卵殻型の胴部を有する土師器甕が多用されることや、高坏が 7 世紀後半まで存続することが挙げられる。

今後の課題としては、各器種の分析における調整技法の確認を行うことがそのひとつである。とくに坏や甕での分類は、先述の長谷川厚による地域性の分析などでも取り入れられており、器種分類を精緻化するうえでは必須であるといえる。

さらに、今後は周辺地域の当該期における土師器様相との比較検討を行っていく必要がある。6 世紀に入ると、土師器坏の一部には、黒色処理を施すようになる。この由来として、長谷川厚は南東北との接触に契機があったと考えた（長谷川 1995b、図 9 の上方からの黒矢印の一要素）。さらには「外反口縁坏」の由来なども考察すべき点である。これらを考えるためには、周辺地域や関連があると思われる地域の土師器様相を理解していく必要がある。

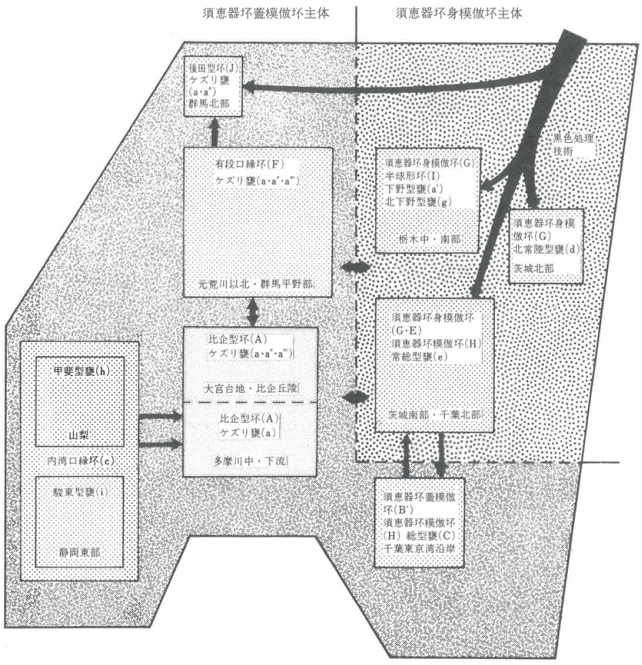



**図 9. 長谷川厚による土師器の地域間関係（長谷川 1995a）**

### 参考文献


渥美賢吾 2013「常陸における七世紀の土器―その様式と史的背景―」『博古研究』45、pp.1-20、博古研究会

伊東重敏 1954「鬼高式土器」『ヒタチジ』15、pp.1-12、常北古代研究会

伊東重敏 1971「水戸地方における土師器についての二、三の考察」『茨城考古学』4、pp.1-12、茨城考古学会

稲田義弘 2003『茨城県教育財団文化財報告第 190 集 熊 の山遺跡 島名・福田坪地区土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅶ』茨城県教育財団

海老沢稔 1980「茨城県内出土土師器の検討（1）鬼高・真間期における茨城県内出土土師器編年試案」『婆良岐考古』1、pp.11-27、婆良岐考古同人会

樫村宣行・浅井哲也 1992「常陸地域の鬼高式土器」福田静江（編）『考古学ジャーナル』342、pp.28-36、ニュー・サイエンス社

樫村宣行 1993「茨城県南部における鬼高式土器について」『研究ノート』2、pp.123-134、茨城県教育財団

樫村宣行 1998「『常総型甕』編年小考」『列島の考古学―渡辺誠先生還暦記念論集―』、pp.235-244、渡辺誠先生還暦記念論集刊行会

加藤雅美・西野則史・浅井哲也 1990『茨城県教育財団文化財報告第 55 集 一般国道 349 号線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書 北郷 C 遺跡・森戸遺跡』茨城県教育財団

黒沢彰哉 1986「茨城県中・南部における六・七世紀の土師器坏について―筑波町小田橋遺跡出土遺物を中心として―」『婆良岐考古』8、pp.69-88、婆良岐考古同人会

佐々木義則 2007「常陸型甕の生産と流通―奈良時代以前の様相―」『武田石高遺跡―奈良・平安時代編―』、pp.251-264、ひたちなか市文化・スポーツ振興公社

鈴木素行・佐々木義則・稲田健一・長沼正樹 2010『（財）ひたちなか市文化・スポーツ振興公社文化財調査報告第 40 集 武田遺跡群 総括・補遺編』ひたちなか市文化・スポーツ振興公社

高橋誠・宇田敦司・小倉和重・松田富美子 1999『財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書 145 南 羽鳥遺跡群Ⅲ』財団法人印旛郡市文化財センター

中村哲也 2003「“常陸型甕”以前―桜川流域における古墳時代甕型土器の型式学的検討―」『領域の研究―阿久津久先生還暦記念論集―』、pp.197-206、阿久津久先生還暦記念事業実行委員会

西弘海 1974「土器様式の成立とその背景」小林行雄先生古稀記念論文集刊行委員会（編）『考古学論考』、pp.447-471、平凡社

長谷川厚 1995a「東国における七世紀への胎動―土師器からみた六世紀から七世紀への東国の状況―」『古代探叢Ⅳ―滝口宏先生追悼考古学論集―』、pp.443-475、滝口宏先生追悼考古学論集編集委員会・早稲田大学所沢校地埋蔵文化財調査室

長谷川厚 1995b「東国における律令制以前の土師器の特徴について―東国の土師器の画期と生産・流通のあり方を中心にして―」『東国土器研究』4、pp.201-221、東国土器研究会

# Temporal Changes and the Regional Differences in the Production and Use of Haji Earthenware Pottery of the Sixth- and Seventh-Centuries, A.D. in the Present Ibaraki Prefecture, Eastern Japan

KONISHI Ryūsei

This paper examines temporal change and regional differences in the assemblages of haji-earthenware pottery of the sixth- and seventh-centuries in the present Ibaraki Prefecture, eastern Japan. The author's study is important because there are few previous studies on haji-earthenware pottery in this region. First, deep bowls declined toward the end of the fifth century in the whole regions of Ibaraki. The pottery assemblage drastically changed at the beginning of the sixth century as shallow bowls adopting the morphology of suè-stoneware shallow bowls comprised the major portion of the pottery assemblage. As time passed, the pottery assemblage changed along with the appearance of shallow bowls with simple rims. Regional differences in the production and use of the Hitachi-type pots became clear in the sixth century and after. While the morphological change in pedestalled bowls happened very quickly from the fifth to sixth centuries, the change was very slow from the sixth to seventh centuries. Spatial distribution of the Hitachi-type steamers was the same as the case of the Hitachi-type pots. While the regional differences in pottery assemblages the author has found confirms the validity of preceding study by HASEGAWA Atsushi, the author newly recognized the regional differences in the Hitachi-type pots of the seventh century.

**KEYWORDS:**

Earthenware pottery, regional difference, eastern Japan, sixth- and seventh-centuries.

考古学集刊　第 19 号　35-38 頁，　2023 年

**資料紹介**

# 伝白石古墳群内出土の寄贈資料について

齋藤　直樹

## はじめに

本市教育委員会には、白石古墳群出土と伝えられる考古資料が数多く寄託・寄贈されている。出土地点が明確なものとして、十二天塚古墳出土の石製模造品および土器類などがあるが（志村 1989、2019）、そのほかに白石地内より出土したとされるが帰属古墳が明確でないもの（以下、伝白石古墳群出土資料）も存在している。本稿ではこれらを紹介しつつ、帰属古墳についても検討を行いたい。

## Ⅰ．白石古墳群とは

白石古墳群は藤岡市北西部に南北約 3 ㎞にわたり広がる古墳群で、国史跡の白石稲荷山古墳と七輿山古墳をはじめ、本市域の古墳のうち 20％近くが本古墳群に属している。西は鏑川、東は鮎川・猿田川により形成された河岸段丘上に築造されている。

段丘はその地形から大きく三面に分かれ、下段には模様積み石室を持つ伊勢塚古墳が所在するほか、中段には古墳時代中期から終末期にかけて本古墳群の大多数が築造されている。また上段では、北に平井地区一号古墳や皇子塚古墳、中央には白石稲荷山古墳が位置し、周囲には十二天塚古墳・十二天塚北古墳など中期古墳が集中する。南には、大型の凝灰岩を用いた截石切組積の横穴式石室を有する喜蔵塚古墳が所在している。

## Ⅱ．伝白石古墳群出土資料について

本稿で扱う資料は、寄贈者からの口述などにより、受入時点で白石古墳群出土とされているものである。

### （1）伝白石古墳群出土　円筒埴輪

白石古墳群出土として収蔵されている円筒埴輪である。多条突帯の円筒埴輪とみられるが、2 条目の突帯より上を欠失しており、上端の破断面は研磨され平滑になっている。残存高 33.3cm、底径 27.4cm である。透孔は確認できず、外面は触るだけで表面が剥離してしまうほど風化が激しく、わずかに一次タテハケ調整を確認するにとどまる。底部調整は行われなかったものとみられる。内部は右斜めのナデ調整で、上部は縦方向のナデ調整である。全体的に丁寧な調整が行われているものの輪積み痕が一部で認められる。

### （2）伝白石古墳群出土　馬形埴輪

図 3-1 は馬形埴輪頭部で口先から目にかけて残存している。耳およびタテガミについて形状および成形方法は明らかでない。口先は平坦で、輪積みや内部調整から、口先を底として円筒状に輪積みで成形していることがわかる。内面調整の方向や輪積みの向きが口先から 15cm ほどの位置で変化しており、頸部から連続成形した U 字形の頭部と別作りした円筒状頭部を後で接合したことがうかがえる。なお、下顎部の粘土端部は折り返され丁寧にナデ調整が施されている。下顎骨を立体的に表現す

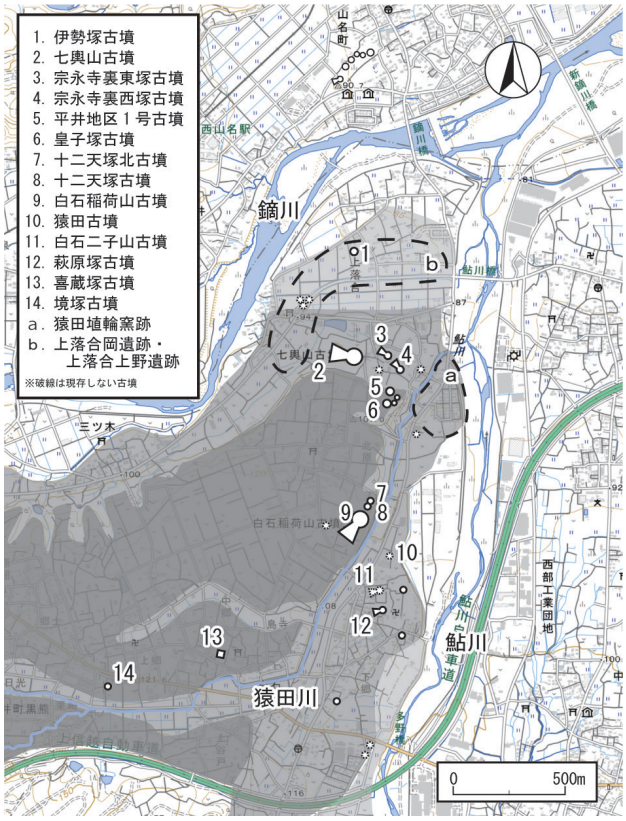



図 1．白石古墳群

るための粘土板の貼り付けはほとんど行われておらず、わずかに粘土紐が付加される程度である。

外面は一次ハケ調整を行ったのち部分的にナデ調整を施している。細部の表現をみると、口部は深い切り込みにより表現されているが、一部は轡の貼付後に切れ込みの入れ直しを行っている。また、鼻孔は穿孔後に外面ナデ調整により平滑に仕上げられている。調整の前後関係から、鼻孔は面繋などの貼付後、頭部成形でも最終段階におこなわれたとみられる。目は円形で、眼窩の立体的な表現をおこなうために粘土が付加されている。

面繋は 2cm 程度のやや幅広の粘土紐がナデにより張り付けられ、ヘラ状工具により薄く鋸歯文が刻まれている。轡は環状鏡板で、引手を轡上面に被せて貼り付けることで立体的に表現している。面繋には中央につまみのつく円盤状の装飾が貼り付けられている。

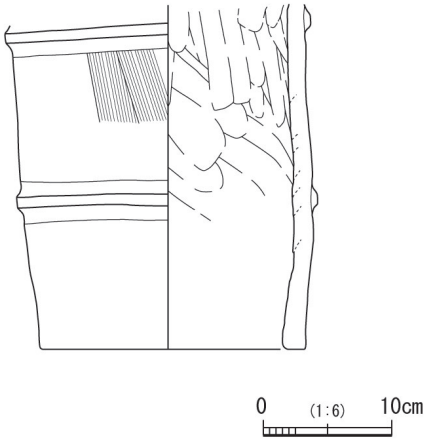



図 2. 伝白石古墳群出土資料　円筒埴輪

### (3) 伝七輿山古墳出土　器財埴輪（図 3-2）

伝七輿山古墳出土とされる器財埴輪片である。上下端部が欠損しているものの部分的に残存していることから台形の板状に復元でき、その形状から靫形埴輪の矢筒部上板とみられる。外面はほぼ全面がハケ調整で、表面左端部には縦方向のナデ調整が認められる。また、表面の上下端部にはそれぞれ 2cm 程度の粘土紐が剥離した痕跡が認められ、それぞれ貼り付けのためのナデ調整も確認できる。

## Ⅲ. 寄贈資料の位置づけについて

本報告において扱った資料のうち（3）伝七輿山古墳出土資料については、現状では積極的に否定するだけの論拠がないことから、七輿山古墳出土として扱うこととし、残る円筒埴輪と馬形埴輪について若干検討を行いたい。

結論からいえば、いずれの資料も帰属する古墳を明示

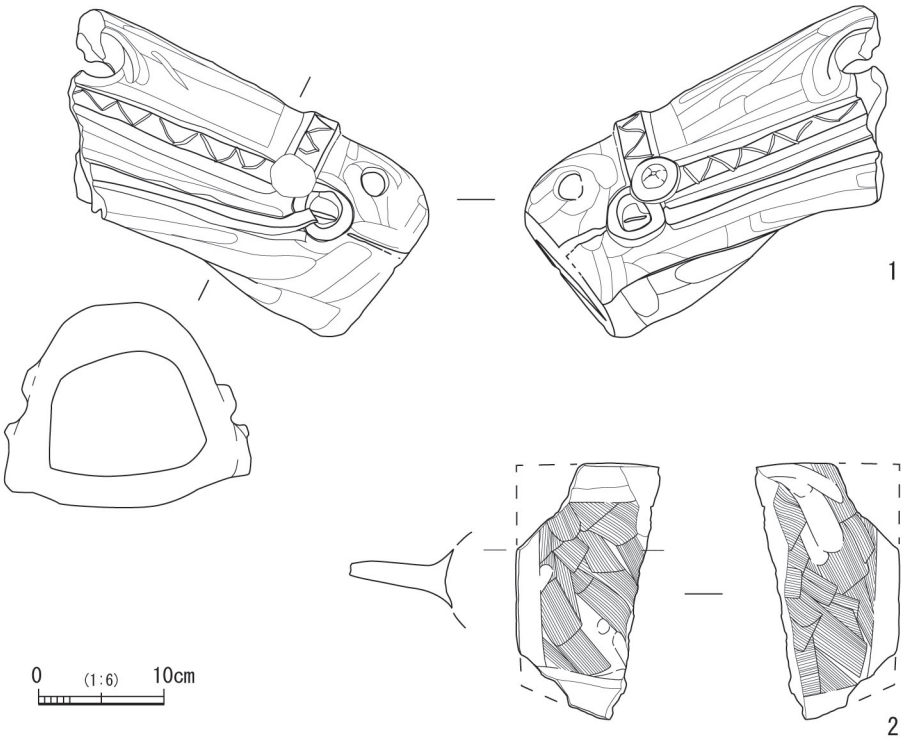



図 3. 伝白石古墳群出土資料　形象埴輪

することは極めて難しい。しかしながら、円筒埴輪については、多条突帯で底径 27.4cm とやや大型の資料であることが参考となろう。藤岡市に限らず、古墳時代中期の西毛地域では墳形、規模に応じて樹立する円筒埴輪に一定の規範が認められるようになることが知られている（山田 2008、若狭 2015 ほか）。この時期において 4 条を超える円筒埴輪の樹立が許されたのは井出二子山古墳や保渡田八幡塚古墳などごく一部に限られている。やがて七輿山古墳の築造を境に円筒埴輪の大型化、多条化が進んでいくが、後期でも白石古墳群において円墳が樹立する円筒埴輪は 2 条ないしは 3 条で[1]、4 条を超える多条の円筒埴輪の出土は確認されていない[2] ことから、いずれも前方後円墳に樹立されていた可能性が高い。白石古墳群においては、稲荷山古墳を端緒として古墳築造が開始されて以降、宗永寺裏東塚古墳、同西塚古墳（ともに 5 世紀後半）、七輿山古墳（6 世紀前半）、萩原塚古墳、二子山古墳（6 世紀後半）と 5 基の前方後円墳が知られているが、中期古墳への多条突帯円筒埴輪の樹立が想定しにくいことから、七輿山古墳以降の三古墳のいずれかへ樹立されたものと考えることができる。七輿山古墳の円筒埴輪は多条突帯で貼付口縁と低位置突帯を有するもののほかに、そうした特徴を持たない小ぶりな円筒埴輪も出土している。しかし、いずれも本資料と色調が異なり硬く締まった焼き上がりであることなどが特徴的で、また七輿山古墳の小型円筒埴輪は上下に波打つ歪んだ突帯貼付や調整の粗雑さなど、稚拙な製作技術が目立つことから、本報告資料との差異がきわめて大きい。残る 2 古墳への樹立を認めうるだけの論拠は乏しいものの、宗永寺裏東塚古墳、同西塚古墳、七輿山古墳への樹立を認めがたいことを踏まえるならば、6 世紀後半の 2 基の前方後円墳のいずれかへ樹立されたものであると考えられよう。

群馬県域における馬形埴輪については、近年資料集成や考察が進められている（三浦 2017、横澤 2017）。三浦茂三郎は古海松塚 11 号墳例を第 I 期（TK208 段階）とし、以降、第 II 期を 5 世紀後半（TK23・47 段階）、第 III 期を 6 世紀前半（MT15・TK10 段階）、第 IV 期を 6 世紀後半（TK43・209 段階）として時期設定を行い、各時期における製作技法や馬装の変遷を詳細に検討している。同論文によれば、本稿紹介の馬形埴輪は口先を窄ませながら解放成形しているが、これは第 III 期に多く確認されている技法とされる。その一方で、馬装にみられる

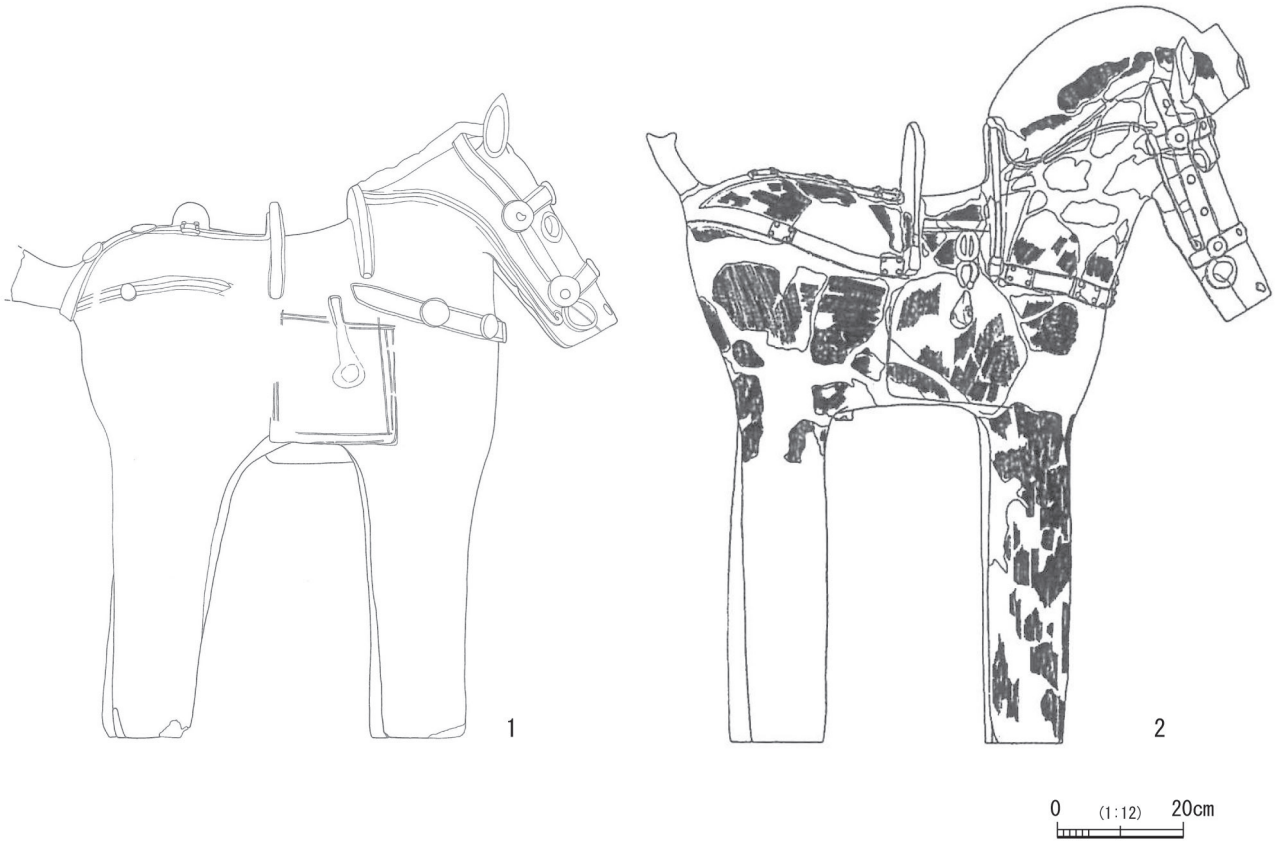



図 4. 類似する頭部表現の馬形埴輪（高井ほか 2010、横澤 2017）

表 1. 伝白石古墳群出土資料　観察表

| 図版 | 種別 | 計測値（cm） | 調整、特徴等 | 色調 |
|---|---|---|---|---|
| 2図 | 円筒 | 残存高：27.4 | 外面：一次タテハケ調整 | Hue10YR7/8 |
| | | 底　径：33.3 | 内面：ナナメナデ、タテナデ調整 | 黄橙 |
| 3図 1 | 形象 | 残存長：29.9 | 外面：ハケ調整のちナデ調整 | Hue7.5YR6/8 |
| | 馬 | | 内面：ナデ調整 | 橙 |
| | | | 馬形埴輪頭部。面繋粘土紐に鋸歯文。交点に円盤状粘土貼付。 | |
| 3図 2 | 形象 | 残存長：20.0 | 両面ハケ調整 | Hue7.5YR6/8 |
| | 靫 | 厚　さ：1.5 | 靫形埴輪矢筒部上板カ。表面上下端部に粘土剥離痕有 | 橙 |

環状鏡板は第Ⅳ期に隆盛するもので、第Ⅲ期では世良田諏訪下 23 号墳例など裸馬に環状鏡板が付される例が多い。また面繋の円盤状装飾は第Ⅳ期に出現するもので、環状鏡板とセットで表現されているものに大道西遺跡例や蛇塚古墳例（ともに伊勢崎市）がある。円筒状の頭部成形技法は第Ⅳ期でも認められることから、現状では第Ⅳ期に比定しうる資料といえる。第Ⅲ期の資料であれば、環状鏡板＋円盤状装飾の飾馬の初現例となろう。

## Ⅳ. まとめ

本市所蔵の伝白石古墳群出土資料を示してきた。いずれも伝資料であり推測の域を出ないものの、円筒埴輪から白石古墳群内の 6 世紀後半の前方後円墳で多条突帯円筒埴輪が樹立された可能性が高いことが明らかとなった。出土古墳の候補となる白石二子山古墳は、墳丘中段に開口する横穴式石室から頭椎大刀をはじめとする多量の装飾付大刀や金銅装馬具類が出土していることで知られる TK43 段階における白石古墳群の盟主墳であるが、埴輪については鞆形埴輪（東京国立博物館 1983）と人物埴輪頭部（群馬県立歴史博物館 2021）が知られるのみで、円筒埴輪については明らかでなかったが、本稿の資料から多条突帯をもつ円筒埴輪が樹立されていた可能性を指摘できる。また、馬形埴輪については製作技法から TK43 段階以降に比定しうるものの、MT15・TK10 段階であれば、その後の馬形埴輪製作に影響を与えた資料といえる。

### 註

1）平井地区 1 号古墳では 2 条 3 段および 3 条 4 段の埴輪が確認されているが、いずれも底径 16cm、器高は 36cm 前後で段数による差が認められない。

2）神流川右岸に所在する諏訪ノ木古墳（埼玉県児玉郡神川町）では、円墳に多条突帯の大型円筒埴輪を一定間隔で樹立することが確認されているが、同様の事例は極めて少なく、特例的な用法であると考えられる。

### 参考文献

井上裕一 2017「馬形埴輪の馬具・馬装について」『馬具副葬古墳の諸問題』、pp.15-24、東北・関東前方後円墳研究会

群馬県立歴史博物館 2021『古墳大国群馬へのあゆみ』

志村哲 1989「十二天塚古墳の築造年代について―採集遺物からみた築造年代の分析―」『群馬県史研究』第 29 号、pp.1-24、群馬県

志村哲 2019「十二天塚古墳出土の石製合子」『地域考古学』4 号、pp.129-134、地域考古学研究会

高井佳弘・齊田智彦（編）2010『大道西遺跡』、（公財）群馬県埋蔵文化財調査事業団

東京国立博物館 1983『東京国立博物館図版目録（関東Ⅱ）』

三浦茂三郎 2017『群馬県伊勢崎市　雷電神社跡古墳出土埴輪報告書』

横澤真一 2017「群馬出土馬形埴輪の馬装」『馬具副葬古墳の諸問題』、pp.89-102、東北・関東前方後円墳研究会

考古学集刊　第 19 号　39-42 頁，　2023 年

**資料紹介**

# 宮城県北部採集の古式須恵器

木村　太一・高橋　透・藤原　二郎

## はじめに

今回紹介する資料は、共著者である藤原二郎が宮城県北部を流れる鳴瀬川周辺を中心に 1996 年から 2022 年にかけて採集した、田辺昭三（1981）による陶邑窯跡群出土須恵器編年の TK23 型式から TK47 型式の古式須恵器、および TK208 型式以前の初期須恵器である。

宮城県では、中部の仙台市において ON46 型式に位置づけられる大蓮寺窯跡（渡辺・結城ほか 1976）や、TK208 型式の金山窯跡（斎藤 1981）が確認されており、また仙台市内で初期須恵器および古式須恵器が出土する遺跡は、窯跡を除いても合計 13 遺跡で 50 点以上が認められる（山田 2007）。

一方、北部では大崎市・加美町・栗原市を合わせても 7 遺跡 1 地点であり [1)]、報告されている資料は合計 27 点で、器種は杯や高杯、甕に限られる。

そうした状況のなか、藤原二郎は 12 地点で合計 32 点の初期須恵器または古式須恵器を採集しており、これまでに宮城県北部で報告された出土量を上回り、希少なものも含むため、今回資料を紹介するに至った。

以下では、最初に採集地点についてまとめ、採集された資料の特徴とその編年的位置づけを行い、最後に資料の重要性について触れる。

## Ⅰ．採集地点について

初期須恵器および古式須恵器が採集された地点（図 1）は、おおきく四つのグループに分けられる。

グループ①は江合川周辺の大崎市古川大崎から古川小林にあたり、図 2-8 は新谷地遺跡、14・18 は名生館遺跡、24 は塚原古墳群の範囲内で採集されている。グループ②は鳴瀬川周辺の色麻町四竈から大崎市古川堤根にあたり、22 は斉田館跡、7・11・15 は堤根遺跡の東側近接地、21 は堤根遺跡の北側近接地で採集されている。グループ③は鳴瀬川と多田川が合流する大崎市三本木桑折から上伊場野にあたり、1・4・13・16・26 は鳴瀬川の中州、2・3・6・10・17・20・23・25 は右岸の河川敷、5・9 は現在の下伊場野公園内で採集されている。グループ④は①～③よりも鳴瀬川下流の大崎市鹿島台船越から美里町和多田沼にあたり、12・19・27 は右岸の河川敷で採集されている。

## Ⅱ．採集された初期須恵器および古式須恵器について

採集された 32 点うち、27 点を図示した（図 2）。

図 2-1 ～ 3 は杯蓋である。1 は復元口径 11.4 ㎝、器高 4.3 ㎝で、天井部は丸みをもち、全体の 1/2 ほどの範囲まで回転ヘラケズリが施される。天井部と口縁部の間には稜がつくりだされ、口縁部は直線的に垂下し、端部に段が認められる。天井部ヘラケズリの範囲が比較的狭いことや天井部に丸みがあること、口径 11 ㎝台の坏蓋は TK23 号窯や TK47 号窯を中心にみられることから（佐藤 2007）、TK23 型式から TK47 型式に位置づけられる。2 は器高 3.8 ㎝で天井部が平坦であり、稜直上まで回転ヘラケズリが施される。稜上部では強いナデにより沈線状の段が形成され、口縁部は垂下して端部でわずかに外傾する。器形や端部の特徴から、TK47 型式以前のものと考えられる。3 は天井部から稜直上付近まで回転ヘラケズリが施され、口縁部が垂下して端部は凹線状のくぼんだ面をもつ。回転ヘラケズリの範囲と口縁部の特徴から、TK208 型式から TK47 型式に位置づけられる。

4 ～ 8 は杯である。4 は口径 11.0 ㎝、受け部径 13.4 ㎝、器高 5.2 ㎝で、ほぼ完形である。底部は平底状で、体部は丸みをもちながら立ち上がり、底部から体部の 1/2 の範囲に回転ヘラケズリが施される。受け部は広く、口縁部がやや内傾して立ち上がり、端部は凹線状のくぼんだ面をもつ。内底面にはナデ調整が認められる。丸みをもった体部や回転ヘラケズリの範囲が比較的狭い特徴から、TK208 型式から TK23 型式に位置づけられる。5 は復元口径 11.4 ㎝、器高 4.7 ㎝、復元受け部径 14.0 ㎝で、底部は平底状で体部が強く張り、底部から体部の 1/2 の範囲まで回転ヘラケズリが施される。受け部は広くつくりだされ、口縁部が内傾する。平底状で体部が強く張る特徴から、TK208 型式に位置づけられる。6 は復元口径 9.6 ㎝で、体部は丸みをもって立ち上がり、体部下半に回転ヘラケズリが認められる。受け部は斜め上方へ伸び、口

縁部は内傾する。口径が小さいことや体部の丸みが強いこと、回転ヘラケズリの範囲が狭いことから、TK23 型式から TK47 型式に位置づけられる。7 は復元受け部径 12.6 ㎝で、底部は平底状で体部が強く張り、受け部直下まで回転ヘラケズリが施される。口縁部は内傾しつつ直線的に立ち上がる。平底状で体部が強く張る特徴から TK208 型式に位置づけられる。8 は受け部が比較的広く、口縁部は短く内傾し端部は凹線状のくぼんだ面をもつ。小片であるが口径が大きい可能性があるため、TK23 型式から MT15 型式まで新しくなる可能性がある。

9 ～ 12 は高杯で、9 ～ 11 は無蓋高杯である。9 は体部が直線的に伸び、口縁部との境には突線がみられる。口縁部は短く直線的に外傾して伸び、端部は凹線状のくぼんだ面をもつ。こうした器形は TG232 号窯（冨加見ほか 1995）や濁り池窯（田中 1999）でみられ、TK73 型式以前にさかのぼる可能性がある。10 は復元口径 16.2cm で坏部下半にヘラケズリが施される。体部は丸みをもって立ち上がり、板状の把手が付される。口縁部は強く外反し、口縁端部で直立する。体部には 2 条の突線の下に 5 条 1 単位の櫛描波状文が施される。この器形は TK216 型式から TK47 型式にみられ、突線間に把手が付される例は TK208 型式を中心に認められることから（田辺 1981）、当該期に位置づけられる可能性がある。11 も 10 と同様に体部に 2 条の突線がめぐり、その下に 5 条 1 単位の櫛描波状文が施される。12 は復元底径 10.4 ㎝で、脚部が 1/5 ほど残存しており、両側面に透かし孔がみられることから、透かし孔は四方に穿たれたと考えられる。脚部は「ハ」字状にひらいて伸び、端部は丸みをもち、その上部に 1 条の突帯がめぐる。器形および四方透かし孔がみられることから、TK216 型式から TK208 型式に位置づけられる。

13・14 は椀である。13 は復元口径 8.2 ㎝で、体部はゆるやかに丸みをもって立ち上がったのちに内湾し、口縁部が直立する。体部上半と下半に突線が付され、水磨によりほとんど磨滅しているが、突線間に櫛描波状文が施される。14 は復元口径 9.8 ㎝で、体部は丸みをもち体部上半に最大径をもつ。口縁部は短く外反し、端部は丸くおさめる。体部下半と上半の突帯間に 8 条 1 単位の櫛描波状文が施される。器形の特徴から、TK23 型式以前のものと考えられる。

15 ～ 17 は甕で、いずれも注口は残存していないが、器形や文様から判断した。15 は樽形を呈する胴部側面の破片であり、胴部外端には突線がめぐり、その口縁部側には 5 条 1 単位の櫛描波状文が施される。16 は肩部が丸みをもち、胴部上半にはカキメ後に 6 条 1 単位の櫛描波状文が施される。17 は肩部が丸みをもち、1 条の沈

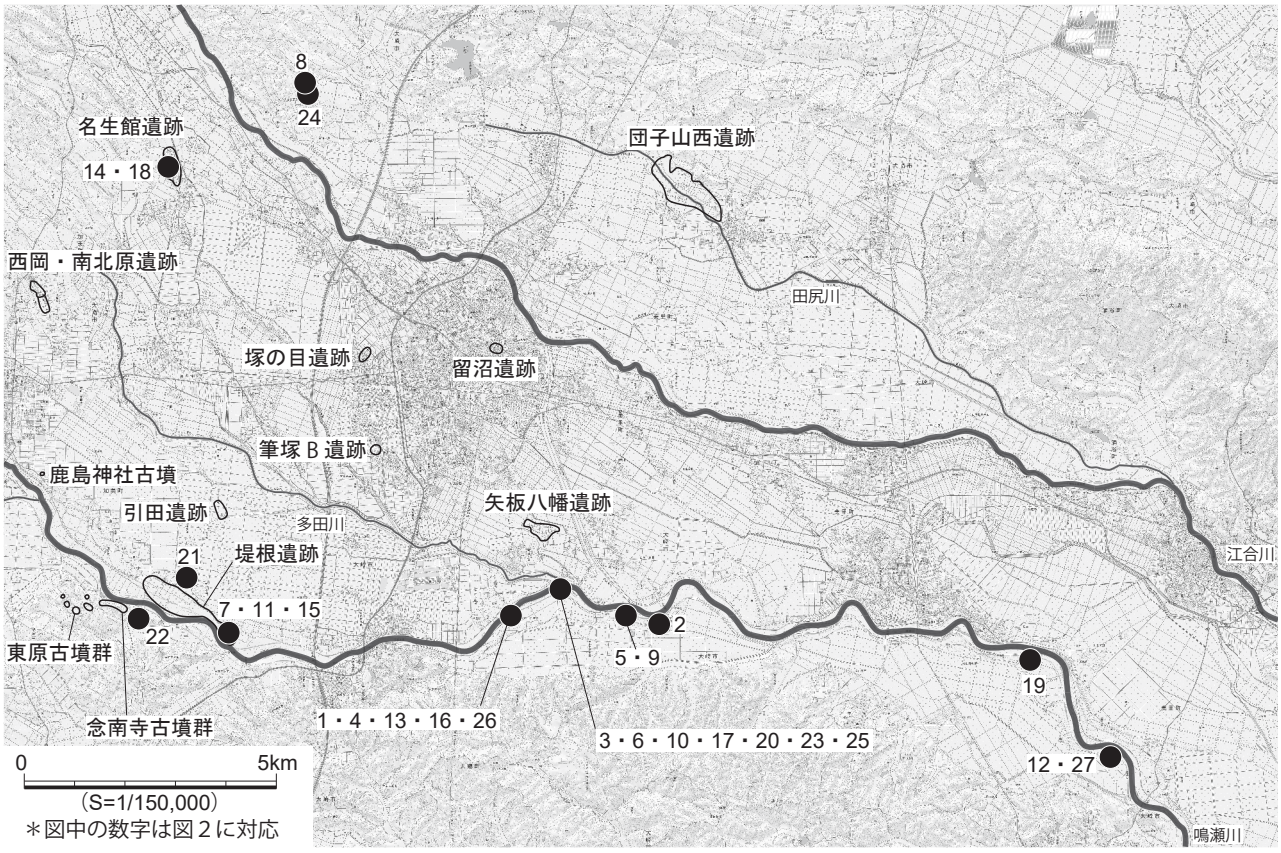



図 1　古式須恵器が採集された地点と周辺の主な古墳時代中期の遺跡
（電子地形図 25000〔国土地理院〕に加筆して作成）

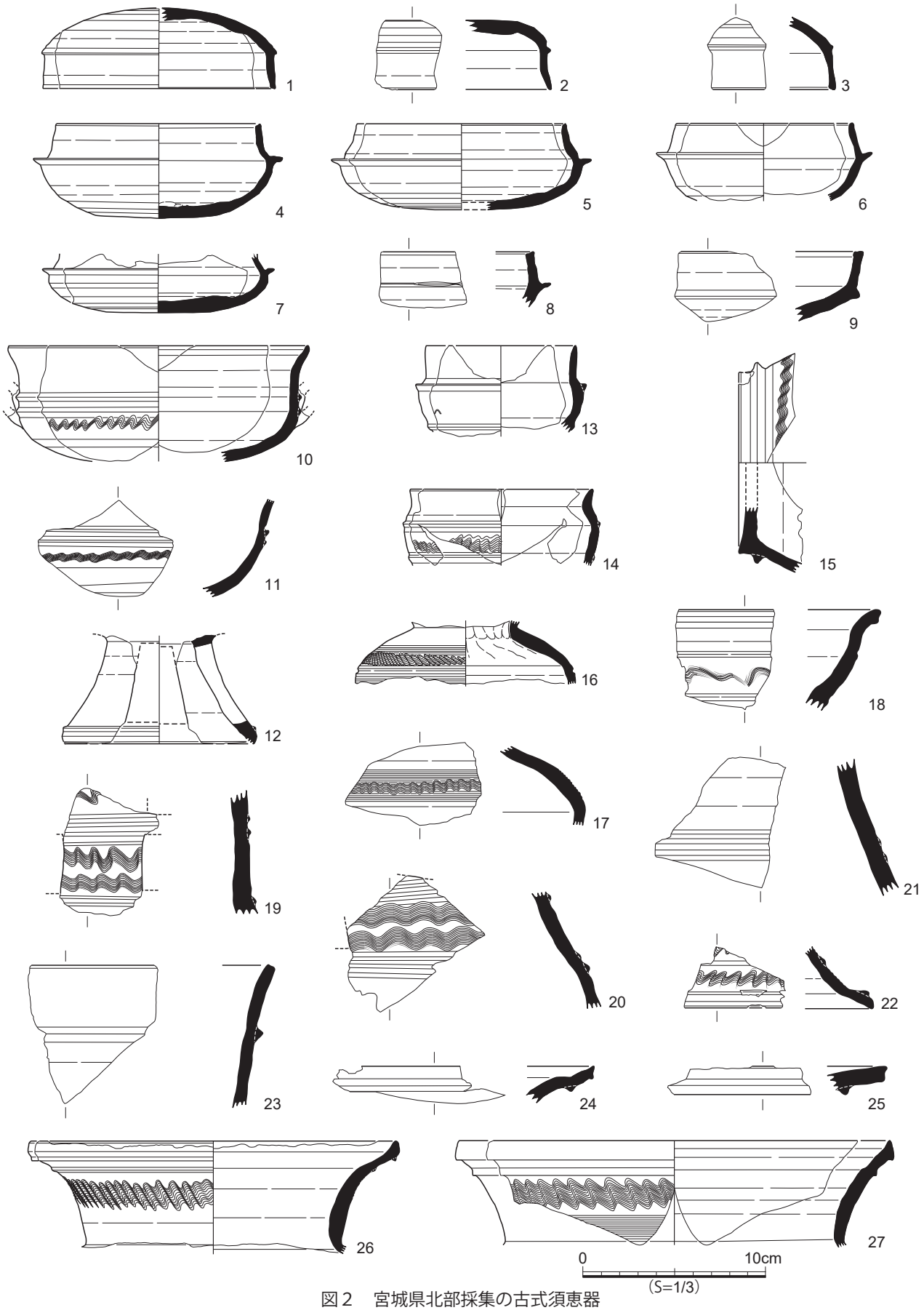



図２　宮城県北部採集の古式須恵器

線がめぐる。胴部上半にはカキメ後に 6 条 1 単位の櫛描波状文が施される。胴部内面には絞り目が観察でき、頸部の内面にはナデがみられる。器形や文様の特徴から、いずれも TK47 型式以前のものと考えられる。

18 ～ 22 は器台である。18 は口縁部片で、体部はやや丸みをもち、口縁部が外反する。体部には 2 条の沈線の間に 6 条 1 単位の櫛描波状文が施される。19 ～ 21 は脚部片で、19 は 3 ヵ所に長方形の透かし孔が穿たれ、2 条の突線の間に 2 段の 9 条 1 単位の櫛描波状文が施される。20 は三角形または長方形の可能性のある透かし孔が 2 ヵ所穿たれており、2 条の突線の間に 2 段の 11 条 1 単位の櫛描波状文が施される。21 は 2 条の突線がめぐる。22 は脚端部片で、上端に突線がめぐり、その上部に 7 条 1 単位の櫛描波状文が施される。器形や文様の特徴から、いずれも TK47 型式以前のものと考えられる。

23 ～ 27 は甕である。23 は頸部が直立して直線的に伸び、中位に 1 条の突線がめぐり、口縁部端部は面取りされる。24 は頸部が大きく外反して水平方向に伸び、口縁部が外傾して受口状となる。口縁端部の上下端はつまみ出される。25・26 は頸部が大きく外反し、口縁部が水平方向に伸び、端部は面取りされ、その下に突帯が付される。器形や文様の特徴から、いずれも TK47 型式以前のものと考えられる。

## Ⅲ. まとめ

以上、藤原二郎が宮城県北部で採集した初期須恵器および古式須恵器は、これまで宮城県北部で報告された出土量を上回るものであり、またこれまで確認されていない椀や器台、甕、そして樽形瓶がみられた。時期にかんしては、TK208 型式から TK47 型式を中心に、TK73 型式以前にさかのぼる可能性があるものも確認できた。

これらが採集された地点と周辺の遺跡をみた際、注目すべきはグループ①で、家形石棺や TK208 型式に併行する時期の円筒埴輪が出土した前方後円墳である念南寺古墳および念南寺古墳群（八嶋ほか 1998）、念南寺古墳に後続する首長墓とみられる円墳の御山古墳・鹿島神社古墳が隣接する。また周辺で 7・11・15・21 が採集された堤根遺跡では、古墳時代中期の石製模造品が採集されており（高橋 2006b）、水辺の祭祀が行われた可能性が指摘されている。採集品であるが、そうした地域において多数の古式須恵器が存在することを明らかにできことは、今後の研究の進展に寄与する貴重な成果である。

謝辞

本稿を作成するにあたり、古川一明氏、村田晃一氏、佐藤渉氏から多くのご教示をいただいた。末尾ながら感謝申し上げます。

### 註

1）山田（2007）の集成によれば、大崎市名生館遺跡（鈴木・高橋 1990・1991、高橋ほか 2001・2002）・清滝城内遺跡（渡邊・井口 1987）・筆塚 B 遺跡（佐藤 2003）・留沼遺跡（高橋 2006a）、加美町壇の越遺跡（斉藤ほか 2003）・米泉城跡（板垣 1973）、栗原市長者原遺跡（三好・佐藤 1995）・油田地点（佐藤 1976）で出土が確認できる。

### 引用・参考文献

板垣剛夫 1973「古墳時代」『宮崎町史』、pp.101-169、宮崎町
斉藤篤ほか 2003『壇の越遺跡Ⅳ』、宮崎町教育委員会
斎藤秀寿 1981「仙台市金山窯跡出土の古式須恵器」『陸奥国官窯跡群Ⅳ』、pp.8-28、古窯跡研究会
佐藤隆 2007「6 世紀における須恵器大型化の諸様相―陶邑窯跡編年の再構築に向けて・その 3―」『大阪歴史博物館研究紀要』、第 6 号、pp.25-48、大阪市文化財協会
佐藤信行 1976「古墳時代」『築館町史』、pp.167-178、築館町
佐藤優 2003『筆塚 B 遺跡』、古川市教育委員会
鈴木勝彦・高橋誠明 1990 名生館官衙遺跡Ⅹ』、古川市教育委員会
鈴木勝彦・高橋誠明 1991『名生館官衙遺跡XI』、古川市教育委員会
高橋誠明 2006a「留沼遺跡」『古川市史』第 6 巻資料Ⅰ（考古）、pp.198-211、古川市
高橋誠明 2006b「堤根遺跡」『古川市史』第 6 巻資料Ⅰ（考古）、pp.232-233、古川市
高橋誠明ほか 2001『名生館官衙遺跡ⅩXI・南小林遺跡』、古川市教育委員会
高橋誠明ほか 2002『名生館官衙遺跡ⅩXⅢ・灰塚遺跡』、古川市教育委員会
高橋誠明 2014「古墳築造周縁域の地域社会の動向」東北・関東前方後円墳研究会（編）『古墳と続縄文文化』、pp.175-194、高志書院
田中英夫 1999『濁り池須恵器窯址』、信太山遺跡調査団
田辺昭三 1981『須恵器大成』、角川書店
冨加見泰彦ほか 1995『陶邑・大庭寺遺跡Ⅳ』、大阪府教育委員会
藤沢敦 2001「倭の周縁における境界と相互関係」『考古学研究』第 48 巻第 3 号、pp.41-54、考古学研究会
三好秀樹・佐藤信行 1995『長者原遺跡』、栗駒町教育委員会
八嶋伸明ほか 1998『壇の越遺跡・念南寺古墳』宮城県教育委員会
山田隆博 2007「宮城県出土の古墳時代須恵器」『多知波奈の考古学―上野恵二先生追悼論文集―』、pp.189-204、橘考古学会
渡辺泰伸・結城慎一ほか 1976「仙台市大蓮寺窯跡発掘調査報告」『陸奥国官窯跡群Ⅱ』、pp.1-29、古窯跡研究会
渡邊泰伸・井口祐二 1987「宮城県の様相」『第８回三県シンポジウム　東国における古式須恵器をめぐる諸問題』第Ⅱ分冊、pp.443-472、千曲川水系古代文化研究所

考古学集刊　第 19 号　43-51 頁，　2023 年

**追悼**

# 大塚初重先生を偲ぶ
## ―明大考古学の先頭を歩み続けた生涯―

石川　日出志

明治大学名誉教授であり、明治大学考古学専攻第三代専攻主任であった大塚初重先生が、昨年 7 月 21 日 21 時 56 分に逝去された。1926（大正 15）年 11 月 22 日生まれ、享年 95 歳。戦後明治大学文科専門部入学第 1 期生であり、かつ 1950 年に設置された考古学専攻の第 1 期卒業生であり、その後、大学院生・教員として明治大学考古学研究室の創設から現在までずっと先頭を歩まれた。明大考古学を育むとともに、日本の古墳時代研究を牽引し、さらには考古学の語り部として全国の方々から愛された。大塚先生は、明治大学在職中から多数の随筆や記録を残しており、退職時に編纂した『思い出文集 やっ、どぉもネ！』（1997 年）[1] に随筆の主だったものを収録した。その後も『君よ知るやわが考古学人生』（2005 年・学生社）、『土の中に日本があった』（2013 年・小学館）、『掘った、考えた』（2016 年・中央公論新社）などで自らの考古学者人生を語っている。また戦争中の苦しみと悔悟などを作家五木寛之氏と語り合った『弱き者の生き方』（2007 年・毎日新聞社）などもある。それらを参照しつつ、ここに大塚先生の足跡を簡潔ながら記し、ご冥福を祈り偲ぶよすがとしたい。

### １．明大以前

大塚初重先生は、復員後の 1946 年に明治大学文科専門部地歴科に入学してから考古学に出会い、考古学者としての生涯を歩んだ。しかし、大塚先生の考古学人生を理解するには、明治大学入学以前のことを知る必要がある。1926 年 11 月 22 日、板橋区志村西台町 1670 の父坂田友七・母ふみの次男として生れ、1928 年蔵前の大塚家の養子となる。大塚家は貸席業「植木屋」がなりわいであった。先生は自らを「お調子者で根っからのお人よし、涙もろくて世話好きの性分」[2] というが、嫌なことがあっても顔には出さず、ひそかに心遣いする姿勢は、こうした幼少青年期が土台になったのであろう。

13 歳で地元台東区の育英小学校を卒業すると郁文館商業学校に進学する。普通中学校に進学を望んだものの親御さんに許してもらえず、その悔しさから猛勉強したという。のちにこれが役立つ。1942 年 12 月に繰り上げ卒業し、翌 1 月に海軍水路部の軍属となり、横須賀海兵団を経て 1945 年 3 月に駿河台の YWCA 海軍気象部に勤務する。この時が明治大学との初めての接点ではないか。同月 10 日の東京大空襲による多数の遺体処理作業に従事。忘れ得ぬその日の体験を何度も伺った。4 月に輸送船寿山丸で佐世保港から門司港経由で大陸に向かうも深夜、米軍の魚雷に轟沈される[3]。攻撃を受けた時は船倉内で、燃え盛る炎の中もはやこれまでと思ったが、上からワイヤーが垂れていたので夢中で手繰り、下から足をつかむ手を蹴り落して俺は助かった、と繰り返し悔い語った。一週間後に吉林丸で再び門司港を発つも、またもや轟沈。十日あまりして博多港からようやく釜山港に渡り、軍用列車で上海にたどり着く。上海気象隊で 3 か月を経たのち敗戦となり、復員まで抑留される。そこでの経験もまた生涯の生き方につながる。

### ２．明治大学で考古学とめぐり合う

1946 年 1 月に上海から佐世保港に上陸し、板橋の実家に復員する。３月から虎ノ門にある商工省特許標準局に雇員として勤務し始めたが、4 月から夜間は明治大学文科専門部地歴科に入学して帰路通うことになる。なぜ大学の地歴科なのかも何度か語っている。東京大空襲直後の凄惨な遺体処理でも、また轟沈されて深夜に朦朧と漂流するなかで「俺が教わった歴史って、何だったんだ。神風なんか吹かなかったじゃないか。」と思った。だから大学で確かな本当の歴史を学ぼうとしたのだと。

写真 1．大塚初重先生（若狭徹氏提供）

年度が押し迫った3月でもまだ志願が間に合うし、勤務経路とも折り合うのが明治大学だった。試験当日朝、地元の下赤塚駅から電車に乗ろうとするもどれも満員で、扉はおろか窓からさえも乗り込めない。そこで屋根によじ登ると、すでに何人もが屋根にへばりついていたという[4)]。

こうして明治大学文科専門部地歴科に入学し、考古学に出会う。明治大学文科専門部は1932年4月に文芸科・史学科（3年制）・新聞科（1年制）が設置され、1938年に史学科が地歴科に改組されていた。1932年に設置された年から科目「考古学」を担当したのが後藤守一氏である。帝室博物館監査官が本務であったが、この一科目「考古学（有職故実・古代文化）」の担当を始めた。1946年4月に明治大学文科専門部助教授、翌年教授になっている[5)]。大塚先生が入学した1946年度は1年生向けに後藤教授が担当する科目「日本古代文化」があった。そのなかで後藤教授が「三種の神器の考古学的検討」を講じており[6)]、これに感銘を受けたという。「三種の神器」とは天皇のレガリア（王権の聖なる象徴物）である。大塚先生は「三種の神器の剣にまつわる後藤先生の講義は…（略）…皇国史観による歴史教育の残滓を多く遺していた私にとっ驚愕の一語につきるものであった」と記す[7)]。これが考古学に触れた最初で、それまで考古学という学問の存在自体を知らなかったという。

二年目の1947年度になると、明治大学文科専門部卒業生で、復員後文部省勤務であった杉原荘介氏が兼任講師として講義を担当し、翌年助教授となる。ここに大塚先生の二人の師が揃い、考古学環境の基本形が定まる。しかし二人の師はまったく思考も学生への対し方が異なった。大塚先生は「二人とも丑年生まれなんだが全く性格が違って、杉原先生が闘牛なら、後藤先生は乳牛だね！」と笑うほどに異なる[8)]。後藤教授（1888.8.10-1965.7.30）は、前掲のように戦前は帝室博物館監査官であったし、『漢式鏡』1926年、『古鏡聚英（上・下）』（1935・44年）、『日本歴史考古学』（1937年）など著作も多い。当時還暦前後で、学生には穏やかに接した。一方、杉原助教授（1913.12.6-1983.9.1）は、戦前越前和紙問屋の家業を継ぎつつ在野の考古学者として頭角を現し、当時30代半ば。戦後もまさしく闘牛のようにふるまった。大塚先生にとっては、後藤教授は正規の指導教授であり、杉原助教授は有無を言わせぬ牽引力の主であった。

## ３．人生を決めた発掘調査

学生時代に参加したいくつかの調査が大塚先生の生涯を決めた。静岡市登呂遺跡・千葉県能満寺古墳・群馬県岩宿遺跡である。

二年次に受けた後藤教授の講義で、夏に静岡で発掘する話があったことから、教授に頼み込み、「強度の神経衰弱により転地療養を要す」という偽りの診断書を商工省に提出して参加を実現させた[9)]。登呂遺跡の発掘は、後藤教授が申請して採択された科学研究費を発端とする[10)]が、考古学の専攻すらない一大学だけで実現できるものではない。そこで東京圏の大学や文部省・静岡県・静岡市の行政部門、さらに考古学者だけでなく地質学や動・植物学・建築学・民俗学など学際的な大所帯の登呂遺跡調査会という調査体制が組織され、二年目からは新たに創設された全国学会日本考古学協会の特別委員会に引き継がれ、1950年まで毎年夏に実施された。実務を担う幹事の一員であった杉原助教授が強力というよりも強引に牽引した調査で、その中で途中から大塚先生は学生であるにも関わらず書記として経理を担当することになる。実は不本意ながら入学しながらも悔しくて猛勉強した郁文館商業学校で学んだ簿記がここで活きた。発掘調査を行うだけでなく調査食料や畑作物の賠償交渉など多彩な実務を担う。各大学の先生方や学生のなかに信頼が醸成されていったのは想像に難くない。

岩宿遺跡の調査では、登呂遺跡調査四年目の直後に行われた9月の予備調査は参加していないが、10月と翌年4月に行われた第１・２次本調査は参加し、ここでも経理を担当している。その際の出納帳博物館に残されており、日々の収支が克明に記される[11)]。毎日「焼酎4合5本」と記され、遺跡近くの国瑞寺の境内に焼酎瓶で囲った花壇ができたという伝説の裏付けとなっている。のちに私が専任助手になった大学入試の採点業務の折、かつては大塚先生が算盤で集計するのがつねだったという言い伝えもあった。

能満寺古墳の調査は文科専門部2年目の1947年である。登呂遺跡の初年度の調査を終えて二か月あまりのちの11月に10日間かけて行われた。周辺の農家を回って食料の買い出しをしながらというご苦労しながらの調査であった。全長73.5ｍの前方後円墳で、木炭槨の主体部に銅鏃・鉄鏃・鉄斧・鉄刀・鉄剣・銅鏡片などの副葬品を確認し、主体部上から古相の土師器を伴う状況を確認した。その2年後、新制大学制度により発足した文学部の日本史学専攻3年生の秋、杉原助教授に勧められて執筆した調査報告が『考古学集刊』第3冊で活字になる[12)]。先生にとっては初めての古墳発掘調査であり報告である。しかし発掘経験わずか3年目で、現在でも関東では屈指の前期前方後円墳の調査報告を執筆した経験は、のち1952年に行った常陸丸山古墳の調査とともに先生のライフワークを古墳時代研究に導く契機となった。先生も「古墳研究の道を歩いてきた私の第一歩」と記す[13)]。しかし、この報告論文を準備するに際して、後藤教授も杉原助教授も遺物の実測図作成に関して何ら具体的な指導もなかったために、両先生が著した論文類を参照して独力で行うしかなかった。特に土器は古墳の時期判

断を行う上で最も重要な基準であるにもかかわらず、のち振り返ってきわめて不本意な実測図になったことを悔いていた。そのためであろう、『君よ知るやわが考古学人生』で、古墳時代研究のきっかけとなったこの古墳の調査と報告を記した際の挿図では、土器の実測図を省いている[14]。この経験がきっかけとなって遺物実測については学生をきつく指導するようになった。

退職記念の『思い出文集 やっ、どぉもネ！』には大塚先生の履歴・業績とともに遺跡調査歴も掲載してある。それをみると、いまではとても考えられないほどの発掘調査を行っている。例えば、専任講師となった翌1958年をみると、東京都多摩川台古墳群、静岡県三池平古墳、福岡県城ノ越貝塚、千葉県加曽利貝塚、東京都三宅島ボウタ遺跡・利島大石山遺跡、石川県高木森古墳、広島県中山貝塚、東京都丸山1号墳、千葉県正徳院近世墓地、島根県多聞院貝塚などの調査、埼玉県皆野大塚古墳の測量調査とある。じつに関東から九州までの七都県12遺跡に上る。一年中全国を飛び回って発掘していたと何度も述懐されていたが、今の感覚であればいつ授業をしていたのか不思議に思うほどである。戦後20年間の調査遺跡を見ると、後藤・杉原両教授の調査がそれぞれ五～三割、大塚先生担当の調査が一・二割といった比率である。これは発掘調査の場で問題を整理して解く杉原方式であり、調査後に発掘資料・データを整理検討する方式は大塚先生に始まるといってよかろう。

## ４．すべてが第一期生

大塚先生の歩みを振り返ると、すべてが第一期生だという点も重要である。

まず学生時代。前記のように1946年度に明治大学文科専門部地歴科に入学。文科専門部は、1944年度は学内問題、44年度から45年度は空襲激化により授業はままならぬ状態であったから、敗戦後の1946年度はようやく平静な状態に戻った最初の年度である。文科専門部は3年制であるから1948年度で卒業となる。ところがちょうど1949年度に新制大学制度により文科専門部が廃止され、新たに文学部が創設された。この頃すでに杉原助教授の先導により考古学研究室を名乗っていたものの、新設された文学部史学地理学科には考古学専攻はなかった。文科専門部時代に考古学に関する科目はあったものの主要構成部門と位置付けられていなかったために、日本史学・東洋史学・西洋史学・地理学専攻のみによるスタートとなった。しかも旧制度では、「小学校6年→中学校5年→高等学校／予科／専門部３年」であったために、1946年度に文化専門部に入学して3年で卒業生しても、新制大学の3年生に編入するしかない。そのたため、大塚先生は日本史学専攻3年生に編入となる。ようやく一年遅れの1950年度から考古学専攻が開設されたので、その4年生に転専攻し、1951年に晴れて文学部史学地理学科考古学専攻を卒業する。大塚先生24歳。もちろん史学地理学科の4専攻とも同じで、1951年3月に新制大学制度による第1期卒業生が誕生した。

ちなみに、1950年度の史学地理学科第1期の5専攻の4年生は、自分たちの研究発表の場が欲しいとして学生会費を元手に教員を説得して『駿台史学』を創刊し（1951年3月）、その秋に駿台史学会を立ち上げた。大塚先生もこれを主導した一員である。学部学生が自らの予算をもとに教員を説得して学会を立ち上げた稀有な事例である。

大塚先生は1951年3月に卒業すると、ひと月の間を置いて5月に文学部助手となる。この年に後藤教授に従って長野市（当時埴科郡寺尾村）大室古墳群の発掘調査に携わる。のち1983年に杉原教授が亡くなった後、自ら考古学研究室を主導して学生教育を行う拠点をして大室古墳群を開始するのは、この時の経験が糸口になっている。

翌1952年になると大学院文学研究科に修士課程が創設され、その第1期生として進学。この時は助手を併任できたが、1954年になって博士課程が開設され進学すると、今度は助手を併任できなくなり生活が困窮する。小学校5年生の時から兄妹のように暮らしてきて、大学院に進学した年に結婚した奥様の収入と、時折は大学院同期の芹沢長介氏のご尊父銈介氏の染色工芸にかかる内職をし、助手時代に買った『考古学雑誌』を売るなどしてかろうじて生計を立てたという。

博士課程３年在学・中退して、1957年度から文学部専任講師に就任。30歳。4年後の1961年度に助教授、その2年後に「前方後方墳序説」で文学博士（明大文1号）を取得した[15]。すべて戦後明治大学の第1期生である。

なお、博士学位申請については杉原教授に強く勧められ、ねじり鉢巻きで数か月かけて書き上げたという。これには事情がある。杉原教授は1943年9月に文科専門部を首席で卒業したものの、大学院経験はない。そのため博士学位は取得していなかった。ただし、新制大学制度のもとで課程博士を輩出すれば、そのあとであれば論文博士を申請することができる。それが歴然と分かるのは、杉原教授は大塚先生の翌年に「日本農耕文化の生成」で博士学位を取得した。興味深いことに、東洋史学の青山公亮、日本史学の遠藤元男両教授も同年学位を取得している。

## ５．古墳時代研究者としての歩み

古墳時代研究者という面に話を進めよう。学生時代に能満寺古墳の発掘調査に参加してその報告も活字化したことがきっかけとなって、古墳時代研究に焦点を当てるようになる。そして卒業論文題目は「日本古代葬制の一

考察―特に箱式石棺の系統分布を中心として―」、修士論文は「舟形石棺の研究」いずれも後藤教授の助言と指導による。修士 2 年の秋、京都大学人文科学研究所で開催された日本考古学協会で、前年行った茨城県柿岡丸山古墳の調査成果をもとに「常陸丸山古墳の墳形と内部構造について」、さらに翌 1954 年 10 月、同所開催の同学会で修士論文にさらに資料調査を行って研究発表「舟形石棺に関する二、三の問題」を行う。ところが事前に発表要旨を読んだ後藤教授から、自説の舟葬論を織り込んで発表しなければと困ると言われ、急遽修正して口頭発表した。その部分に対して会場から人類学の金関丈生、東北大学の伊東信雄、國學院大學の大場磐雄といった学界の大先生が次々に質問し、さらに、のちに奈良大学の学長になるが当時まだ学生だった水野正好氏までもが批判し、立ち往生状態となった。京都大学の梅原末治教授が「大塚さんは後藤さんの説を代弁してるんだから、後藤さん応えなさいよ」と発言するも、後藤教授は応じなかった。口惜しい思いで研究発表を終えると、内容には批判的であるはずの京都大学の小林行雄先生が祇園の顔なじみの店に案内して、杉原先生ともども慰めて下さり、さらに小林邸に泊めてもらい、悔し泣きしながら夜を明かした[16]。

1952 年秋に調査した常陸丸山古墳が茨城県で最初に確認された前方後方墳であったことから、前方後方墳の研究に邁進することになる。島根大学の山本清先生の論文から山陰にも前方後方墳にも前方後方墳があると知り、さらに現地調査すると京都大学梅原末治が前方後円墳とした奈良県新山古墳も前方後方墳であることを確認する。その成果を自ら創設した『駿台史学』の第 6 号（1956 年）に「前方後方墳の成立とその性格」と題して発表する。さらに掘り下げて 1963 年に学位請求論文「前方後方墳序説」で文学博士（明大文 1 号）を取得したことは先述した通りである。

学生時代の登呂遺跡で東京圏の各大学の先生方と学生、院生時代の日本考古学協会弥生式土器総合研究特別委員会による西日本各地の遺跡調査で全国の考古学者と知り合うが、しかしまだ古墳時代に関しては東日本の研究者と言ってよかった。しかし次第に全国区の古墳時代研究者と評価されるようになる。直接の糸口は、1959 年、小林行雄先生が編集する『世界考古学大系』Ⅲ（古墳時代）で「大和政権の形成―武器武具の発達―」の執筆を担当したことにある。戦後まもなく古墳時代研究の体系を構築した小林先生からの勧めは、光栄であると同時に大変な重責と感じたに違いない。小林先生には、後藤・杉原両教授のもとで苦労する大塚先生を励ます意図もあったのかもしれない。その期待に応え、厳しい論調で知られるようになる野上丈助氏が『論集武具』（1991 年・学生社）でこの論文を評価したほど確かな内容にまとめ上げる。

さらに 1966 年には、日本考古学界の先後 20 年間の研究成果をまとめ上げた出版として、今も高く評価される『日本の考古学』シリーズのⅣ（古墳時代・上：近藤義郎・藤沢長治編）で、「古墳の変遷」を担当する。これは前掲の『世界考古学大系』Ⅲで小林先生が担当した古墳編年の基準を示したものと同名の論文である。これを纏めるために、学会の折に全国各地を分担する考古学者に集まってもらって意見交換を重ねたという。小林説を基盤としながらも、古墳の変遷観の詳細を提示し、まさしく全国区の古墳・古墳時代研究者と目されるようになった。

## ６．よろこびと葛藤

『日本の考古学』Ⅳ掲載論文が公になってまもなく、在外研究の機会を得る。明治大学では、サバティカル（長期研究休暇）制度のひとつとして在外研究があり、1967 年 6 月から翌年 1 月まで欧米を歴訪する。後藤教授も若い頃にヨーロッパ留学し、杉原教授も戦後、短期的に欧米への研究出張を重ねていた。杉原先生からは、欧米の考古学者の名前を列挙して、直接会いに行けと言われて閉口したようである。ハワイのビショップ博物館の篠遠喜彦氏を訪ねるのを皮切りに、アメリカ合衆国・英国・エジプト・イランなどを歴訪した。特に大英博物館では W．ガウランドの大阪府芝山古墳資料を調査するなどたくさんの収穫があった。

帰国後まもなく教授に昇格するが、翌年大学の副学生部長となる。大学紛争の真っただ中で、しかも学内に警察が入って学生を不当逮捕したことから学生部長名で警視庁を訴えているので、いざという時に神田警察署に派遣要請できないという理由（？）から、学生部長ではなく大塚副学生部長が学生対応の最前線に立たされる。しかも、考古学専攻でも市川市史編纂事業の一環として行われた同市須和田遺跡の発掘調査を考古学実習に組み込んだことなどが問題となり、火種となっていた[17]。連日学生と対応し、時には小川町校舎 2 階にあった考古学陳列館から座っている椅子ごと専攻学生に担ぎ出され、群集の中で糾弾されたこともあったと訊く。ちなみに必修科目「考古学実習」はこれがきっかけで実施できなくなって科目は廃止され、約 20 年後の 1987 年に大塚先生が先導してようやく復活した。

しかし、こうした葛藤の前後に、次々に魅力的な遺跡の調査に巡り合うよろこびもあった。その筆頭は、1965 ～ 68 年の勝田市（当時）の馬渡埴輪製作遺跡であろう。古墳ではない谷地から中学生が埴輪を採集したことをきっかけに調査をすると、谷の傾斜地に窯跡が並び、その背後の平坦地で粘土採掘坑や竪穴建物の工房群が発見された。埴輪を製作する場が面的に一体として把握できたことは、学界に大きな刺戟を与えた。

また、次いで勝田市史編纂事業として行った虎塚古墳

の 1973 年の調査では、横穴式石室から未盗掘の彩色壁画を検出した。東日本の前方後円墳では初の彩色壁画である。前年に奈良県高松塚古墳の石室から極彩色の壁画が発見されたが、盗掘を受けていた。古墳壁画の保存対策を考えるには未盗掘石室内の環境データが必須なので、その条件に適う古墳の調査があればすぐ連絡が欲しいと、東京文化財研究所の新井英夫氏から依頼されていた。そのため即座に応援を乞い、温・湿度や空気組成等のデータが採取され、それを基準としてその後の保存環境が保たれるようになった。

それ以外でも、群馬県教育委員会の調査に協力した高崎市綿貫観音山古墳の 1968 年の調査では、荘厳な大陸系文物が多数発見された。運も実力のうちというべきであろうか。

しかし、私が大塚先生の考古学でもっとも注目するのは土器研究である。杉原教授から、土器を知らねば古墳時代であれ社会など分からないと強調されたのが大きいであろう。私が挙げたいのは、1963 年の「島根県出雲市知井宮遺跡の調査」(『考古学集刊』2-1) と 1965 年の「福井市林遺跡の調査」(『考古学集刊』3-2) である。前者は、知井宮遺跡の層位と型式学で山陰の弥生時代中期～古墳時代前期の土器編年を、後者は地点と型式学で北陸の弥生時代後期～古墳時代前期の土器編年を構築した。いずれも 1970 年代に資料の蓄積に伴って詳細な議論が進む際の基盤となった。土器研究の師であるはずの杉原教授の土器研究をはるかに超える精度の分析を行ったと考える。

## 7．考古学と古墳時代研究の語り部

大塚先生は、50 歳前後から語り部としての活躍が増し、定年退職後はそれが生きがいともなった。きっかけは二つあるように思う。

『思い出文集 やっ、どぉもネ！』の巻末の業績一覧に学外講演の論題と年月日が列挙されている。それをみると、1972 年以前は 1958・1960・1961 年に各 1 回であったのが、同年 5 月から講演が突如急増したことがわかる。この年の 3 月 21 日に奈良県明日香村にある高松塚古墳で発見された極彩色の壁画が華々しく報道されて、全国が古代史ブームに沸いたのである。1972 年 5 月から一年間の講演 9 回のうち 5 回が高松塚古墳関連で、しかも翌年 8 月に大塚先生自ら調査した勝田市虎塚古墳で壁画が発見される。その後 1 年間の講演 8 回のうち虎塚古墳を取り上げたものが 7 回に及ぶ。それから 91 歳になるまで関東圏にとどまらず全国を飛び回り、明治大学定年退職の前年である 1996 年の講演はなんと 29 回にも及ぶ。虎塚古墳の装飾壁画発見が、調査者である大塚先生ご自身に大きな影響を与えた。

もう一つの契機は、1983 年 9 月 1 日に杉原教授が現役 69 歳で亡くなったあと、考古学陳列館の館長を引き継いだことである。考古学陳列館は、1950 年に考古学専攻が創設されたのを受けて、学生が実物の考古学資料を日常的に触れる環境を整えようと、杉原先生が戦前から収集した資料を大学に運び込んで 1952 年に開設した。その際に、京都大学の文学部陳列館をモデルとし、名称のみならず調査時の図面類などを収納する箱形ファイルも京都大学から譲り受けてこれを模倣した。明治大学の学芸員養成課程は戦後長らく考古学専攻教員が担当していたが、美術分野をも含めた幅広い視野の専門家養成が必要だとして、サントリー美術館・山種美術館・北海道立近代美術館の設立準備の実績のある倉田公裕氏を 1978 年度に教授として招聘し、独立した部門に改めた。すでに博物館学界の重鎮であるこの倉田教授が「もはや陳列館の時代ではない」と主張しても、杉原教授はまったく受け入れなかった。これを大塚先生が考古学博物館に改称した。

それだけでなく、博物館としての実質を備える必要があると考えて．市川市で考古博物館や歴史博物館などを 30 代で創設して活躍した熊野正也氏を学芸員として採用する。この熊野学芸員が「いままでのような上から目線の大学博物館ではダメで、社会人の誰もが参画して楽しめる博物館でなければならない」と提案した。これを大塚館長が全面採用して「明治大学博物館友の会」が生まれ、その会員の要望として「考古学ゼミナール」が始まった。毎年春と秋にそれぞれ 5 回連続で公開講座を催し、しばらくは申込み者が多すぎてお断りするのが常態という盛況であった。大塚先生が所長を務める人文科学研究所 [18] でも公開講座を始めるなど、学内に飛び火し、それらが統合されて現在のリバティ・アカデミーという社会人向け講座組織となった。明治大学は 70 歳定年で、大塚先生がこうして始まった社会人向け公開講座だが、大塚先生は定年退職後 [19] は、リバティ・アカデミーの連続講座で話すのが生きがいとなる。受講生はいつも満員で、ずっとアカデミーの「稼ぎ頭」であった。しかも通常は 90 分なのに、大塚先生は「90 分では思いの丈を話せない」と、異例の 2 時間であった。しかも立ったまま講義する。それどころか、常連さんたちが「大塚組」を自称して、講座終了後もお茶を共にして話し込むのがつねであった。

これは誰もが「大塚節」と呼ぶ絶妙な語り口ゆえのことである。私は何度か大塚先生の講演録をテープ起こししたことがある。しかし文章にしてみると面白さがなかなか分からなくなってしまう。本で読む落語と生の寄席との違いと同じ。大塚先生の場合は、同じ話を何度聞いたとしても面白い。「芸」というほかない。

大塚先生は実は、敗戦時に上海に抑留されていた時に演芸大会があり、友人からの誘いで漫才を特訓したのだ

写真 2. リバティアカデミー最終回の様子（リバティアカデミー事務局提供）

という。コンビ名は＜上海ガーデンブリッジ＞。復員直後にも一度伊東温泉に呼び出されて舞台に上がったという[20]。語りの絶妙な抑揚と間合い。時にはきわどい話もチラリとまぜる。ここでも、意外な経験をのちに活かしていく力が見える。

## ８．大塚先生の日常

大塚先生の口ぐせは「やっ、どぉもネ！」。現在、駿河台キャンパスのリバティタワーの東南側はす向かいにある紫紺館（校友会館）の 2 階に考古学陳列館があり、そこが考古学研究室でもあった。朝、出勤すると、軽やかに右手を上げてにこやかに「やっ、どぉもネ！」。1997 年に定年退職されるのを記念して思い出文集を作成した。考古学博物館の会議室で専任教員と博物館学芸員が集まり、さて書名をどうするかと会議をもった。黒沢浩学芸員が半ば笑いながら「『やっ、どぉもネ！』なんて面白いんじゃないでしょうか」と提案。ところが戸沢充則主任教授が「よし、それだ！」と即決。そして 5 月 31 日に行われた退職記念会で贈呈したとき、いくらか憮然とした表情とみたのは私だけだろうか。

学内では授業担当以外に、副学生部長（1969.4-1971.3）、硬式庭球部部長（1971.4-1992.3）、文学部教務主任（1973.12-1976.11）、文学部史学地理学科長（1978.10-1980.9）、考古学専攻主任（1979.4 -1988.9・1990.10-1996.3）、明治大学評議員（1980.2-1984.3）、人文科学研究所長（1983.4 - 1988.3）、考古学博物館館長（1983.10 - 1992.3）、文学部長（1988.10-1990.9）、明治大学理事（1992.4 - 1996.3）とほぼ間断なく学内の役職に就いた。庭球部の部長はお気に入りで、考古学専攻には毎年のように硬式庭球部の体育推薦入学者がおり、その活躍を愉しんでいた。部員全員を成田の自邸に招いて焼肉パーティーを開き、帰りは貸切バスで八幡山の合宿所まで送り届けたこともある。もちろんすべて大塚先生もち。

大学職員からの信望も際立つ。戦後明治大学のつねに一期生であったことだけでなく、学内外での活躍、教員と職員の別を感じさせない気遣いがつねであったからであろう、大学職員からは抜群の人気があった。定年退職して 10 数年経ってもなお、うるさ型の年長職員が集まると大塚先生がたびたび話題となっていた。

1983 年 9 月に杉原教授が亡くなったあとの 10 月 15 日、考古学専攻生を集めた夏期調査報告会の終盤大塚先生は「明治大学と杉原荘介」と題する身に講演を行った。その翌年から自分が学生の教育を先導する意気込みで、かつて助手として後藤教授を補佐した長野市大室古墳群の継続的調査に着手した。全国を飛び回るゆえ調査期間中常駐することは叶わなかったが、必ずしばらく滞在して小林三郎教授とともに調査の指揮を執った。この調査の折に水彩スケッチを始め、大室古墳群を何枚も描き残している。

ちょうどその頃、同志社大学が論集考古学シリーズを開始した（1982 年～）。大塚先生はこれに刺戟されて、明治大学も毎年学術誌を出そうと一念発起して、京都に赴いた。小林行雄先生を訪ね、明大で考古学の雑誌を出したい、ついては戦前に小林先生が活躍の場とし、運営にも尽力した東京考古学会の名を使いたいと了承を求めたのである。小林先生は了解したものの、『考古学』という雑誌名は森本六爾先生のものゆえ使っては困ると話したという。ところが大学に戻って、さあ出す準備を始めようと提案すると、戸沢充則教授が「その前に発表するべき内容を組み上げるところから始めないといけない」と主張して、実現しなかった。現在のこの『考古学

集刊』はそれから20年あまり後の2004年度に、文学部の希望した専攻の雑誌刊行費を1回だけ補助することになったのを機に復刊したものである。

さて、大室古墳群など合宿調査する旅館にお見えになると、当然夜の調査ミーティングのあとは、大塚先生を中心に杯を片手に語り合うことになる。数々の調査や杉原先生の思い出などが語られる。そして消灯時間には解散となるが、就寝前の歯磨きで洗面所で顔を合わせると「もうちょっとだけ？！」。ここからが長い。やがて先生の十八番（おはこ）が始まる。＜惚れたって駄目よ＞。これは1961年に 和田弘とマヒナスターズが歌った曲の替え歌で、歌詞二番の「惚れたってだめヨ どうせ学生だもの 卒業したなら 惚れておくれよ・・・」をもじって大学の出世話にしたものである。「惚れたって駄目よ、まだ学生だもの、卒業するまで待っててくれ、い～ついつまでも、待ってね、待ってね～」で始まり、院生、助手、講師、助教授、教授、学部長、学長、理事長、総長、と延々と続き、手拍子しながらも皆が飽き飽きした頃「・・・女房が死ぬまで待っててくれ、い～ついつまでも、待ってね、待ってね～」で全員がひっくり返って、やっとおしまいになる。

思えば大塚先生の歌は何度聴いたことか。調査合宿、史学地理学科教員で関東近県で一泊する慰労会、一時ほとんど毎週通った上野黒門町のクラブ風スナック「子爵」、李進熙先生が案内する韓国史跡見学旅行などなど。＜あこがれのハワイ航路＞、＜東京ラプソディー＞、＜東京の花売り娘＞、＜目ン無い千鳥＞、＜夜来香（イェライシャン）＞、韓国に出かけるようになってからの＜サランヘヨ（愛しています）＞などなど。その優しい歌声はじつに味があり、今も蘇る。

定年最後の3年間担任となったクラスの教え子のひとりである榊（雄城）しおりさんへのハガキを紹介してこの追悼文をおしまいにしよう。榊さんは卒業後すぐ博物館嘱託となり、そのあとの就職先を探して悩んでおり大塚先生に相談したところ、数日後次の文面のハガキが届いた。

人生って　寂しいときも　楽しいときもありますよ
がんばれ雄城君　　大塚

その春、中国・新疆を旅した際のスケッチの一枚をハガキに描き、水彩を施してある。

大塚先生は、古墳研究など学界でも、大学の教育と運営にも、獅子奮迅の活躍をされた。そこにはつねに笑いと温かみがあった。若い頃、九死に一生を得るなど、数々の苦しみを体験し、それを自らの力に変え、それを教育や人々との心の交流に活かした。そうした大塚先生に教えを受けたことを、いま、とても嬉しく思う。

きびしく学問するのはもちろん、つねに穏やかな笑いと喜びを感じること、それが明大考古学の学問と教育の伝統だと思う。大塚先生が育んだものを、これからも継承していきたい。

**注**

1) 大塚初重先生頌寿記念会（編）1997『思い出文集 やっ、どぉもネ！』東京堂出版製作（「第二部随随筆」選定は石川が担当）
2) 大塚初重 1995「私の故郷―性分は蔵前仕込み―」『朝日新聞』10月4日（注1文献 pp.171-172）
3) 大塚初重 1991「轟沈された船からの生還」『朝日グラフ』12月25日号（注1文献 pp.174-176）、大塚初重 2013「第1章 米潜水艦に撃沈される」『土の中に日本があった』小学館 pp.13-62
4) 注3前掲書（大塚 2013）「1. 念願かなって明治大学へ」pp.63-75
5) 明治大学文学部50年史編纂委員会 1984『明治大学文学部五十年史』明治大学文学部
6) 『あんとろぽす』創刊号「特輯日本古代史への反省」の筆頭に掲載（pp.2-13）された同名論文の内容を講じたものであろう。後藤 1947『日本古代史の考古学的検討』山岡書

写真3. 榊（雄城）しおりさんへのハガキ（同氏提供）

店 pp.103-165 に訂正再録。

7）大塚 1996「敗戦から考古学への道へ」『歴史家が語る戦後史と私』吉川弘文館（注 1 文献 pp.205-208）

8）杉原氏は丑年だが、後藤氏は一年違いの子年生まれ。

9）注 3 前掲書（大塚 2013）「2. 登呂遺跡と私の青春」pp.75-102

10）杉原氏の証言によると、この調査は杉原氏が企画し、文部省の科研費担当官として後藤教授に促して申請したという。明治大学文学部五十年史編纂準備委員会 1981『地歴科から史学地理学科へ―考古学専攻創設のころ―』明治大学文学部 50 年史資料叢書Ⅸ

11）注 1 前掲書 p.209

12）大塚 1949「上総能満寺古墳発掘調査報告」『考古学集刊』第 3 冊 pp.22-32

13）注 3 前掲書（大塚 2013）「1. 考古学人生最初の古墳調査」pp.129-136

14）同書 p.49

15・16）大塚 2005「第 4 章 舟葬論から学位審査まで」『君よ知るやわが考古学人生』学生社、pp.65-84

17）紛争時に学生団体が作成した孔版刷の記録集『須和田だより』がある。

18）これも杉原教授が京都大学人文科学研究所をモデルとして明治大学に設置したもので、初代所長となった。

19）明治大学は 70 歳で専任教員は定年となる。しかし 75 歳まで兼任講師を務めることができる制度であったのを現在のように 70 歳に短縮する、その移行期に当たったために大塚先生は満 72 歳を迎えた 1998 年度まで兼任講師として大学院で授業を担当した。

20）注 3 前掲書（大塚 2013）「2. 若き苦闘の日々」pp.203-226

## 主な編著書

『常陸丸山古墳』（後藤守一共著）、山岡書店、1957 年 11 月
『考古学の調査法』（中川成夫・桜井清彦・小出義治共編著）、古今書院、1958 年 2 月
『考古学ノート 原史時代Ⅱ』（吉田章一郎共編著）、日本評論社、1958 年 3 月
『能登高木森古墳』（後藤守一・橋本澄夫共著）、石川県七尾市文化財保護協会、1960 年 9 月
『三昧塚古墳』（後藤守一・斎藤忠共著）、吉川弘文館、1960 年 9 月
『三池平古墳』（後藤守一・内藤晃共著）、静岡県庵原村教育委員会、1961 年 6 月
『日本原始美術３（弥生式土器）』（杉原荘介共著）、講談社、1964 年 9 月
『日本原始美術４（青銅器）』（杉原荘介共著）、講談社、1964 年 11 月
『信濃 長原古墳群』（小林三郎共著）、長野市教育委員会
『シンポジウム古墳時代の考古学』（森浩一等共著）、学生社、1970 年 6 月
『土師式土器集成Ⅰ』（杉原荘介共編著）、東京堂出版、1971 年 12 月
『土師式土器集成Ⅱ』（杉原荘介共編著）、東京堂出版、1972 年 9 月
『シンポジウム弥生時代の考古学』（小田富士雄等共著）、学生社、1973 年 5 月
『土師式土器集成Ⅲ』（杉原荘介共編著）、東京堂出版、1973 年 10 月
『土師式土器集成Ⅳ』（杉原荘介共編著）、東京堂出版、1974 年 9 月
『日本古代史の謎』（藤間生大・水野祐ほか共著）、朝日新聞社、1975 年 3 月
『茨城県馬渡における埴輪製作跡』明治大学文学部研究報告６（小林三郎共著）、1976 年 3 月
『考古学ゼミナール』（江上波夫等共著）、山川出版社、1976 年 3 月
『日本古代史の謎』（小林三郎共著）、学習研究社、1977 年 5 月
『虎塚壁画古墳』（小林三郎ほか共著）、勝田市、1978 年 3 月
『日本考古学を学ぶ１』（佐原真・戸沢充則共編）、有斐閣、1978 年 11 月
『考古学の謎解き』（乙益重隆・門脇禎二ほか共著）、講談社、1979 年 4 月
『日本考古学を学ぶ２』（佐原真・戸沢充則共編）、有斐閣、1979 年 7 月
『日本考古学を学ぶ３』（佐原真・戸沢充則共編）、有斐閣、1979 年 8 月
『成田市史 原始古代編』（編著）、成田市、1980 年 3 月
『国家成立の謎』（森浩一・西嶋定生ほか共著）、平凡社、1980 年 4 月
『稲荷山古墳とさきたま古墳群』（斎藤忠共著）、三一書房、1981 年 7 月
『探訪日本の古墳 東日本編』（編著）、有斐閣、1981 年 11 月
『古墳辞典』（小林三郎共編著）、東京堂出版、1982 年 12 月
『考古学者・杉原荘介―人と学問―』（編集代表）、杉原荘介先生を偲ぶ会、1984 年 12 月
『埴輪』考古学ライブラリー 37、ニュー・サイエンス社、1985 年 7 月
『登呂遺跡と弥生文化―いま問い直す倭人の世界―』登呂遺跡発見 40 周年記念シンポジウム、（森浩一共編）、1985 年 7 月
『日本考古学選集 18 後藤守一（下）』（編著）、築地書館、1986 年 4 月
『東国の古墳文化』、六興出版、1986 年 6 月
『日本古墳第辞典』（小林三郎・熊野正也共編著）、東京堂出版、1989 年 9 月
『図説 西日本古墳総覧』（編著）、新人物往来社、1991 年 1 月
『季刊考古学別冊３ 東国の古墳』（編著）、雄山閣出版、1992 年 11 月
『日本古代遺跡事典』（桜井清彦・鈴木公雄共編著）、吉川弘文館、1995 年 3 月
『図説 成田の歴史』（編著）、成田市、1995 年 4 月
『必携古代史ハンドブック』（吉村武彦共編著）
『最新 日本考古学事典』（戸沢充則共編）、柏書房、1996 年 6 月

『弥生時代の考古学』（石野博信等共著）、学生社、1998 年 9 月
『続日本古墳大辞典』（小林三郎共編著）、東京堂出版、2002 年 9 月
『巨大古墳を造る―倭王の誕生―』史話日本の古代 4、（編著）、作品社、2003 年 2 月
『大塚初重のレクチャー 「弥生時代」の時間』、学生社、2003 年 10 月
『大塚初重のレクチャー 「古墳時代」の時間』、学生社、2004 年 2 月
『君よ知るやわが考古学人生』学生社、2005 年 11 月
『考古学から見た日本人』青春新書 INTELLIGENCE、青春出版社、2007 年 1 月
『弱き者の生き方』（五木寛之共著）、毎日新聞社、2007 年 6 月（徳間文庫、2009 年 7 月）
『「考古学」最新講義 古墳と被葬者の謎にせまる』、祥伝社、2012 年 9 月
『古代天皇陵の謎を追う』、新日本出版社、2015 年 5 月
『邪馬台国をとらえなおす』講談社現代新書、2012 年 4 月（『読み直す日本史 邪馬台国をとらえなおす』、吉川弘文館、2021 年 8 月）
『土の中に日本があった―登呂遺跡から始まった発掘人生―』小学館、2013 年 5 月
『「考古学」最新講義シリーズ 装飾古墳の世界を探る』、祥伝社、2014 年 2 月
『歴史を塗り替えた日本列島発掘史』、KADOKAWA・地中経出版、2014 年 12 月
『古代天皇陵の謎を追う』、新日本出版社、2015 年 5 月 30 日
『掘った、考えた』、中央公論社、2016 年 10 月
『90 歳のスケッチ―考古学と人生―』、百年書房、2017 年 4 月
『考古学者大塚初重 スケッチ画集』、百年書房、2021 年 1 月

考古学集刊　第 19 号　52-53 頁，　2023 年

**記録**

# 明治大学考古学研究室動向 2022 年（2022.01.01-12.31）

新型コロナウィルス（COVID-19）の感染拡大は、3 年目を迎えたがいまだ終息に至っていない。昨年度に続いて考古学研究室の教育・研究活動は大きく制限を受けることになったが、年度初めのガイダンスや新入生歓迎会は対面実施が可能となった。学生を引率したフィールドワークは規制の合間を縫って実施し、夏季休暇中の実習授業は感染爆発の影響で、一部のメニューが中止・代替措置がとられた。

## Ⅰ．研究室スタッフ（2022 年度）

**教授**：阿部芳郎・石川日出志・佐々木憲一・藤山龍造・若狭徹、研究知財特任教授：栗島義明・池谷信之.

**大学院博士後期課程**：蒲生侑佳、佐藤兼理、轟直之、大熊久貴、箕浦絢

**大学院博士前期課程**: 吉木誉絵、竹林香菜、安藤壮平、三邊有希、岡田侑子、鈴木静華、冨田樹、井上姫菜乃、桑村夏希、小西竜世、佐藤豪、舎川史矩

## Ⅱ．研究プロジェクト等

### １．明治大学研究クラスター

①国際日本古代学研究クラスター（以下、古代研）：石川日出志（代表）・佐々木憲一・若狭徹および古代史・古代文学関係研究者

②資源利用史研究クラスター：阿部芳郎（代表）・宮腰哲雄名誉教授・本多貴之准教授・米田穣（東京大学総合研究博物館教授）および縄文時代関係研究者

### ２．黒耀石研究センター

:石川日出志（センター長）・藤山龍造・栗島義明特任教授・池谷信之特任教授・能城修一客員教授・島田和高博物館学芸員ほか

### ３．文科省研究助成・科学研究費等

①研究代表者：阿部芳郎 科研費基盤研究（A）「古代製塩技術の実証的研究」（2019 年度～ 2022 年度）

②研究分担者：阿部芳郎　科学研究費基盤研究（A）「初期の縄文土器の機能に関する総合的研究」（代表者：米田穣　東京大学）（2019 年～ 2023 年）

③研究分担者：阿部芳郎　科学研究費基盤研究（C）「骨角製装身具類の包括的検討からみた縄文から弥生への時代変遷の解明」（代表者川添和暁　愛知県埋蔵文化財センター）（2020 ～ 2023 年度）

④研究分担者：佐々木憲一　文部科学省新学術領域研究（研究領域提案型）「出ユーラシアの統合的人類史学」A03 班「集団の複合化と戦争」（領域代表　松本直子　岡山大学；班代表　松木武彦　国立歴史民俗博物館）（2020 ～ 2023 年）

〔この他、黒耀石研究センタープロジェクトメンバーによる科研費基盤研究（A ～ C）25 件〕

⑤研究代表者;石川日出志　科学研究費基盤研究 (B)「璽印・ガラス・鉄器からみた西暦 1 ～ 3 世紀日本列島・東アジアの広域交流の重層性」（2021 ～ 2023 年度）

### ４．その他

①研究分担者：佐々木憲一　国際共同研究プロジェクト助成「アメリカ合衆国国立スミソニアン研究機構との日米文化財資源化のための共同研究 」（代表者：山内健治政治経済学部教授）（2022 年度）

②研究分担者：若狭徹　奈良県立万葉文化館委託共同研究「古代における地方文化の創成」（2022 ～ 2023 年度）

③研究代表者：佐々木憲一、研究分担者：若狭徹　国立歴史民俗博物館共同研究「東アジアからみた関東古墳時代開始の歴史像」（2022 年度～ 2024 年度）

## Ⅲ．研究活動記録

1 月 9 日：明治大学と大阪大学・京都府立大学・関西大学との 考古学・古代史大学院生研究交流プログラムをオンラインで開催、冨田 樹（M1）「「前方後円形小墳」に関する再検討―下毛野を中心に―」、岡田侑子（M1）「カマド出現以降の古墳時代竪穴建物の空間利用」、吉木誉絵（M2）「貼石と葺石の連続性に関する再検討 - 前方後円墳の形成過程を探る試み」

2 月 21 日：佐々木教授、南カリフォルニア大学主催の国際ワークショップ「Use of Maps for Medieval Japanese History 」 で、「Use of Maps for Archaeological Investigations in Japan.」と題し、オンラインで研究発表。

2 月 25 日:卒論発表会をオンラインで開催、大井啓輝（4 年）「縄文土器の規格性における共時的・通時的検討―中期中葉から後期前葉にかけて―」、桑村夏希（4 年）「縄文時代中期～晩期の関東地方における土器の器種

組成変化の要因―4.2ka イベントに起因する環境決定論の可能性の検討―」、鈴木天海（4 年）「弥生時代中期における播磨地域の土器編年と南関東の東部瀬戸内系土器について」、小西竜世（4 年）「茨城県域における 6･7 世紀土師器様式の再検討」、島根永臣（4 年）「古代印旛郡における墨書土器の動向」

3 月 26 日：2021 年度卒業式

4 月 1 日：阿部教授特別研究。助手：大熊久貴、TA：佐藤豪・舎川史矩・鈴木静華・冨田樹が着任。

4 月 9 日：新入生歓迎会を対面で開催。

4 月 29 日：大学院考古学研究Ⅴ・演習Ⅰ（3 年生）の授業に伴い、若狭教授の引率で東京国立博物館を見学。

5 月 15 日：大学院考古学研究Ⅰとして東京国立博物館見学。

5 月 21 日：大学院考古学研究Ⅳの授業に伴い、佐々木教授の引率で群馬県高崎市域の古墳時代遺跡を見学。

5 月 25 日：大学院考古学研究Ⅴの授業に伴い、若狭教授の引率で神奈川県立歴史博物館の「洞窟遺跡を掘る」展を見学。

6 月 4 日：佐々木教授、第 56 回日本文化人類学会研究大会で「明治大学によるアラスカにおける考古学調査の概要とその成果」と題し、研究発表。

6 月 18 日：夏期「どんぐり会」をオンライン開催。
舎川史矩「秋田県域における縄文時代早期から前期の石器製作活動」、桑村夏希「関東の縄文時代中期から晩期における土器変化と環境の関係性について」、佐藤豪「平沢型壺の形態と地域性」、井上姫菜乃「甲冑出土古墳における鉄鏃の分類」、小西竜世「茨城県域における古墳時代後期の土器様相」

6 月 19 日：基礎演習（1 年生）の授業の一環として、埼玉県行田市埼玉古墳群とさきたま史跡博物館を見学。引率：藤山教授、若狭教授。補助：助手大熊、TA 佐藤・舎川・鈴木・冨田、院生井上・桑村・小西。

6 月 21 日：佐々木教授、「アメリカ合衆国国立スミソニアン研究機構との日米文化財資源化のための共同研究」の一環としてのスミソニアン研究所との共同ワークショップで、「Meiji University Expedition to Alaska in the 1960s.」と題し、オンラインで研究発表。

6 月 28 日：石川教授、㈶福島県文化財センター白河館館長（非常勤）就任。

7 月 17 日～ 24 日：佐々木教授、「集団の複合化と戦争」の一環で、アメリカ合衆国オハイオ州コロンバスとマサチューセッツ州ケンブリッジで資料調査。

7 月 21 日：大塚初重名誉教授ご逝去。

8 月 2 日～ 8 月 11 日：佐々木教授、考古学実習Ⅰ（1 年生）、考古学実習Ⅱ（2 年生）で埼玉県東松山市五領遺跡の再整理作業。

9 月 5 日～ 9 月 9 日：若狭教授、考古学実習Ⅰ（1 年生）、考古学実習Ⅱ（2・3 年生）で群馬県高崎市上滝町上滝遺跡群の発掘調査。補助：TA 鈴木・冨田・佐藤

10 月 5 日：大学院考古学研究Ⅴの授業に伴い、若狭教授の引率で大田区立郷土資料館の「大勾玉展」を見学。

10 月 22 日：基礎演習（1 年生）の授業の一環として、群馬県みどり市の岩宿遺跡・岩宿博物館を見学。引率：藤山教授、若狭教授。補助：助手大熊、TA 佐藤・舎川・鈴木・冨田、院生井上・桑村

10 月 28 日～ 11 月 3 日：藤山教授、考古学実習Ⅰ（1 年生）、考古学実習Ⅱ（2 年生）で神奈川県横浜市赤穂原遺跡出土資料の整理作業を実施。

11 月 4 日・11 日・18 日・25 日：博物館第 69 回考古学ゼミナール「大塚初重先生と明大考古学」開講。講師：橋本裕行講師・矢島國雄名誉教授・忽那敬三学芸員・石川教授。

11 月 27 日・12 月 3 日・11 日・1 月 15 日・17 日：石川教授、考古学実習Ⅰ（1 年生）、考古学実習Ⅱ（2 年生）で神奈川県三浦市赤坂遺跡の現地見学と整理作業。

11 月 27 日～ 12 月 5 日：佐々木教授、「アメリカ合衆国国立スミソニアン研究機構との日米文化財資源化のための共同研究」の一環で、アメリカ合衆国首都ワシントン、国立スミソニアン研究機構にて資料調査。

11 月 30 日：大学院考古学研究Ⅴの授業に伴い、若狭教授の引率で国立歴史民俗博物館の「加耶」展を見学。

12 月 10 日：駿台史学会大会開催、轟直行「考古学からみた境界領域―弥生時代後期の荒川下流域を事例として―」、佐々木憲一「古墳時代における東北日本フロンティアの諸相」

12 月 17 日：冬季「どんぐり会」をオンラインで開催。松本康太郎「土器を構築材とするカマドの基礎的研究―埼玉県域を中心に―」、小西竜世（M1）「茨城県域における 6・7 世紀の土師器群の数値的検討」、大熊久貴（D2）「古代横櫛の製作技術」

12 月 26 日：佐々木教授、考古学実習Ⅰ（1 年生）、考古学実習Ⅱ（2 年生）で、埼玉県東松山市域の古墳時代遺跡を見学。

**コロナ下で行われた考古学実習Ⅰ・Ⅱ（群馬県高崎市上滝遺跡群）の様子**

## 編集後記

2020 年当初から始まった新型コロナウィルスのパンデミックは、日本では 2023 年 5 月 7 日にようやく終わった。感染症 2 類という過酷な社会制限を伴う病としての位置づけから、5 類というインフルエンザ並みの位置づけに変更されたからである。

この 3 年間、日本社会は歴史的な大混乱となった。異常な額の国家予算（我々の税）が諸方にばらまかれ、同調圧力が社会を分断した。私たちは今後、歴史学としての視点から、この間の事態を評価していかなくてはならないだろう。ウィルスが武漢株からオミクロン株になっても、日本社会では恐怖感が蔓延し、苛烈な政策が変更できず、鎮静化に舵を切った国際社会から取り残された。エビデンスに基づいた科学的・客観的な政策転換が速やかにできないことが、日本社会の「政治」・「科学」・「マスコミ」の弱点を露わにした。行われた様々な政策と投じられた経費、それぞれが失敗だったのか成功だったのか、丁寧な検証が不可避である（しかし、日本社会はこれが歴史的に不得手だ）。

大学教育や研究にも、その影響が直撃した。考古学関係の学術ジャーナルの経営体力は、もとからきわめて脆弱である。一部の会費制のジャーナルでも、会員減少による経営危機が叫ばれている。大学の学術ジャーナルはもっと悲惨であり、これまでは日本最大の考古学会である一般社団法人日本考古学協会の総会と大会で、対面販売をする売り上げによって経営が細々と維持されてきた。

本誌、考古学集刊は、創刊時 1 回だけの大学からの補助金を元手に、教員の出資金を原資として運営されてきたが、コロナ禍で対面学会が 3 年間も中止されると販路が極端に狭まり、自転車操業も儘ならなくなった。こうした消極的だが切実な理由によって、本号（19 号）から完全なウェブジャーナルに舵を切ることとした。

編集に関わる教員・助手・院生が、試行錯誤しながら編集ソフトを駆使してフォーマットを確立してここに至った。このフォーマットによって今後、編集手法が継承していけると考える。なお、本誌 1 冊まるごとのアクセスは奈良文化財研究所のリポジトリから、個別論文は明治大学図書館のリポジトリからアクセスできる予定である。

ここに編集後記を書いている若狭はアナログ世代であり、今回のデジタル化には貢献することが少なかった。デジタル作業を推進したのは相談役である藤山教授と大熊助手・院生佐藤である。その労苦に対して謝意を表したい。ただし、還暦アナログ世代としては、編集レイアウトの細やかな体裁調整などの部分について、後進に伝達できたと思う。

印刷冊子体ではなくなったが、ウェブジャーナルは無料であり、世界のどこからでもアクセスできる。その点では、掲載論文はより広く手軽に読んでいただけることになる。経営危機というところから出た苦肉の策であったが、それが転じて吉となることを願っている。

（編集委員会代表　若狭　徹）

## 執筆者紹介（五十音順）

石川日出志（明治大学文学部教授）
大熊久貴（明治大学大学院博士後期課程）
木村太一（宮城県教育庁文化財係、2022 年度明治大学文学部卒業）
小西竜世（茨城県教育財団調査課）
齋藤直樹（藤岡市教育委員会、明治大学大学院博士前期課程 2018 年度修了）
高橋　透（宮城県教育庁文化財係、2010 年度明治大学大学院修士課程修了）
藤原二郎（元宮城県警察職員）
松本康太郎（船橋市教育委員会、明治大学文学部 2019 年度卒業）

## 編集委員会

若狭徹（代表）・大熊久貴・岡田侑子・佐藤　豪
蒲生侑佳（サポート）

考古学集刊　第 19 号

2023 年 7 月 8 日　発行

編集・発行　明治大学文学部考古学研究室
〒 101-8301
東京都千代田区神田駿河台１－１

# KŌKOGAKU SYŪKAN, No.19

2023

Table of Contents


## Chief Ariticles

Production Techniques of Wooden Combs of Ancient Japan ····· OHKUMA Hisataka（1）

## Researche Note

A Study of Built-In Earthen Stoves Adopting Ceramic Pots: With Special Reference to the Archaeological Discoveries in Saitama Prefecture, Northern Neighbor of Tokyo ····· MATSUMOTO Kōtarō（13）

Temporal Changes and the Regional Differences in the Production and Use of Haji Earthenware Pottery of the Sixth- and Seventh-Centuries, A.D. in the Present Ibaraki Prefecture, Eastern Japan
····· KONISHI Ryūsei（24）

## Reports

Haniwa Found From the Shiroishin Monded Tombs in Fujioka City, Gunma Prefecture
····· SAITŌ Naoki（35）

Ancient Sue Pottery of the Northern Part of Miyagi Prefecture
····· KIMURA Taichi, FUZIWARA Jiro, and TAKAHASHI Toru（39）

## Memory

In Memory of Professor ŌTSUKA Hatsushige：A life that continued to lead the Meiji University archaeology
····· ISHIKAWA Hideshi（43）

Bulletin of the Archaeology Program Meiji University, 2023 ····· （52）



Archaeology Program, Faculty of Arts and Letters
Meiji University, Tokyo 101-8301, Japan